
エヴァンゲリオン 現実からエヴァ世界へ

古手 夜一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エヴァンゲリオン 現実からエヴァ世界へ

【Nコード】

N0775H

【作者名】

古手 夜一

【あらすじ】

祝125万アクセス突破。

更新はできるだけ早くします。本当にすいませんでした。今後更新を続けていくつもりです。

過去に少しトラウマを持つ普通の高校2年生古手夜一ふるてよるいちがなんとエヴァの世界、碇シンジの中に入ってしまう。彼はこの世界でどう生きるのか？そして何をするのか？サードインパクトは防ぐことが出来るのか？つたない文章ですがよろしく願います。アイディアも募集します！

第1話 エヴァの世界へ（前書き）

自分がエヴァの世界に入ったらこうするなどのコメントをお待ちしています。初めての連載なのであたたかい目で見てください

第1話 エヴァの世界へ

今日もいつもと変わらない… そう思っていた。

目が覚めると俺はベンチで横になっていた。

「ここは、どこ？」

見回すとここはどこかの駅の中のようなうだ。改札機がここから見える。その瞬間

【ドォーン！】という轟音が外から響いた。

「何が起こっているんだ？てかここどこだよー！」

と言いながら駅の外に出ると、その横を戦闘機が通過しミサイルを発射した。

その先には仮面のような顔をした怪物が…

「サキエル… なんで…」

ミサイルの先なはなんと、エヴァの第3使徒サキエルが暴れている。夢かなにかだと思いい俺は顔を思いつきりつねった。

「イタツ… てか腕がいつもより細い気がする…」

確かにいつもと違和感があると言いかありすぎる。

「つかこの状況ってエヴァの最初のシーンじゃね。てことはもしかして俺が碇シンジ？？」何てことを考えているとまた爆音と同時にコンクリが飛んできてそれをかばうように青い車ルノーが止まり、ドアが開いた。

「遅れてごめん。碇シンジ君ねっ？」とチャイドレスっぽい服を着た美女・葛城ミサトが尋ねた。

ヤベェマジでミサトさん美人だわゝ など考えいると、ミサトは再び

「碇シンジ君ねっ？」と尋ねた。

「あつ、はい。多分…」

「早く乗って！」

乗るや否やミサトは車を発車させた。

「あのー葛城さん？」

「ミサトでいいわよ」きたー名ゼリフ（笑）俺結構好きです！そんなことより

「俺って碇シンジですよな？」

ミサトは怪訝そうな顔をして口を開いた。

「そう思うけど…違うの？」

その瞬間、俺が碇シンジであることが確定した。

ちょっと待てよ、まず何でエヴァの世界に入っちゃったんだ？これまでのことを思い出してみる。

まず俺のことを書こう。名前は古手夜一都内ふるてよるいちの高校に通う2年生だ。確かに退屈な日常がやで、エヴァの世界に入りたいと思ったこともけっこうある。しかしただの妄想だしホントに入っちゃうとは…

なんか記憶が曖昧だ。学校が終わりいつものように自転車に乗って帰って… そうだ思い出した！ぼーっとしながら運転して車に引かれたんだ！そのせいこっち世界に？？？

「ちょっとシンジ君大丈夫？」ミサトさんの声でわれに帰った。窓の外をみるとどうやらエレベーターが何かで車が降下しているようだ。

「あつ大丈夫です」と笑顔言う俺。ホントは現実についていけないんだけどね。

「お父さんからID貰ってない？」

ID…てかアニメだとあつたバッグないし…駅に置いてきたのかな「えっと…」と言いながら学生ズボンのポケットを探る。例の（ここに注目）と書いてある写真と共にカードが入っていた。

「これですか？」

「そうよ。大事だから無くさないでねん！」

その時外の様子が開け、広大なジオフロントがみえた。

「ジオフロントよ。そしてあれがネルフ本部、人類を守る最後の砦

「どれくらいだろう…」

俺はその広大な光景に時間を忘れるくらい見とれていた。
てか俺これからエヴァに乗るのか…
どうしよう…

第1話 エヴァの世界へ（後書き）

ご指のコメントもお待ちしています。

第2話 ANGEL ATTACK（前書き）

ご指摘のコメントお待ちしております。

第2話 A N G E L A T T A C K

「ミサトさんもしかして迷いました？」

原作通りネルフ本部の中を迷う俺たち

アニメ見たって本部地理は分かんないしなあ

「大丈夫よ。迎えは呼んだから！」と明るく言う。

少し歩くと反対側から金髪の美女が歩いてきた。

「遅いわよ。ミサト」

「ごみんごみん」

「この子が例の男の子ね」

「そ。マルドウックの報告書による3人目の適格者。碇シンジ君。」

俺の方を向いて

「赤木リツコよ。リツコでいいわよ。」

「よろしくお願いします。リツコさん」

「報告書と違うわね」とリツコがボソツと言った。

今、報告書って言ったよな。原作のだと確かシンジは挨拶もしなかったよな。松代に居たときシンジは見張られていたはずだからあんまり性格が違うとマズイかも。

落ち着いて考えて見よう。俺はアニメの細部を思い出す。原作通りに進めば、このあとゲンドウが出てきてエヴァに乗せられるはず。てか俺、シンクロできるのか？ ホントのシンジじゃないし思考パターンとか大丈夫なのかな？ 幸いなことにまだシンジはテストしてないと思うから多分いけると思う。とりあえず乗った時に考えよう。次は綾波のことだ。はつきり言う俺はアヤナミストだから出来るだけ助けたい！ まずは、ストレッチャーで運ばれて来るのを回避したい。それから友好関係も築きたい。

あと何よりも情報がある。それは加持さんに頼みたいと思う。原作を読む限り真実を追う姿勢には信頼がおける。セカンドインパクト

の真実などを話して協力してもらおう。この世界に入ったことを話すかは後で考えることにする。加持さんは結構好きなので絶対に死んでもらいたくない！

後はゲンドウ（父さん）の目的が分かっていることが大きい。俺が知っている限りでは、碇ユイ（母さん）に合うことだ。これの対応も後で考えることにする。

何よりも俺は、アニメやマンガやSSなどを讀んでるからかなりのアドバンテージがあると思う。

気がつかないうちに俺たち3人は大きなドアの前にいた。リツコさんがIDを通すとドアが開いた。中は真っ暗だった。真ん中まで歩いたところで明かりがついた。

俺の目に入ったのは巨大なエヴァの横顔。直接見る巨大さに圧倒される俺。

それを見てリツコさんが

「人造人間エヴァンゲリオン。その初号機よ」と言った。

「ひさしぶりだな。シンジ」スピーカーから声が響く。

上を見上げると管制室にゲンドウがいた。そして一言

「出撃」と。

ミサトさんがちらつ初号機と俺を見ながら

「出撃？ 零号機はダメでしょう。まさか、初号機を使うつもりなの？」

「そうよ。他に道はないわ」とリツコさん

また俺を見ながら

「レイは動かせないでしょ。パイロットがいないわよ」

「さっき届いたわ」

「マジなの。レイでさえシンクロするのに7ヶ月かかったのに」

「今はシンクロする可能性が少しでもある子に乗ってもらうしかないの」

はつきりと俺の方に向き直りミサトさんが

「シンジ君、あなたが乗るのよ」と言った。

ミサトさんっていい人だけど、こういうふうに仕方がないと言う感じにして自分を納得させるってネットで叩かれてたのを思い出す俺。スपीカーから

「乗るなら早くしろ、乗らないなら帰れ」とゲンドウ。

乗らないと綾波連れて来られちゃうから早く返事をしないとマズイ。俺はゲンドウに向かって

「わかった。乗るから後で話しをしよう。それでいい？」

「それでいい。後で司令室に来い」

俺はリツコさんの方を向き

「リツコさん、説明をお願いします」

「わかったわ。こっちへ来て」

そこで俺は簡単な説明を受けてエントリープラグに乗り込んだ。

「ＬＣＬ注入開始」とリツコさんがお馴染みの発令所で言った。

俺の足下から液体が入ってきた。

これを飲むのかあゝ　いくらアニメで見たことあるって言っても緊張するな

そして俺は勇気を振り絞りそれを飲んだ。

ヤベゝ　ホントに息できるわ　この世界の科学力マジすごいなあゝ

と感動する俺。

発令所で

「彼、ＬＣＬを驚かなかったわね」

「やはり何か報告書と違うわね」依然として発令所では起動作業が続けられている。

エントリープラグ内の俺に聞こえるようにマイクのスイッチを入れリツコさんが

「地上に出たら歩くことだけ考えて」

「わかりました」

（シンクロー率19.8% 起動限界ギリギリですがいけます！）
と言う声が聞こえた。多分マヤさんだと思う。

初号機のロックが外され射出口へ送られ固定される。

「エヴァンゲリオン発進」

声と共に初号機が上に打ち上げられ強いGが俺を襲う。 結構イタイ（笑）

初号機は地上に上がり拘束具が外された。

少し離れて漆黒の巨人がいる。装甲ビルから射撃されているがATフィールドに阻まれて効いてる様子はない。

「落ち着いて、ゆっくりと歩くことだけ考えて」とミサトさん。

「わかりました」

初号機の右足が上がる。それはまるで自分の足を上げているような錯覚に襲われる。

「おおお……」と感嘆の声をあげるネルフ職員。

俺は使徒に向かって歩き続けた。だが途中で足がもつれ転けてしまった。受け身も取れず顔面から地面に激突。

イタイ… ホントに自分が倒れたみたいだ。けどかなりエヴァの反応が遅く感じる。やっぱり俺が本物の碇シンジじゃないからか…
倒れているエヴァに使徒が飛び付き拘束し初号機を立たせる。

ヴァキツ。

音と同時に初号機の左腕がちぎれ緑色の液体が吹き出る。その液体で周りのビルは緑色に染まる。

「うあああああっ」

反射的に俺は左肩を押さえる。

「落ち着いて、シンジ君！それはあなたの腕じゃないのよ」

ミサトさんが叫んでいたが俺の耳には入らなかった。

使徒の攻撃は止まず、速射砲のような物を目に向けて連射する。

そこで俺の意識は無くなった……

第3話 何もかも見知らぬところ（前書き）

今回は本編をなめる感じになってしまいました。ご指摘お願いします

第3話 何もかも見知らぬところ

司令室

「碇、暴走して使徒を倒すところはシナリオ通りだが性格などが予想より明る過ぎないか？」

「予想と少し違うが誤差の範囲内だ。シナリオに影響はない」

「ならいいんだがな。ところでシンジ君ホントにと話すのか？」

「ああ、別に問題はない」

「3年振りの対面だな」

「……………」

そんなゲンドウの様子に小さく冬月は微笑んだ。

目が覚めた。

最初に目に入ったのは白い天井

「知らない天井だ」と言って吹き出す俺。

あはは、知らない天井どころか窓から見える空や何もかも知らないものばっかだし（笑）

自分の状況を見ると病院服を着ている。どうやら入院しているようだ。多分お馴染みのネルフの病院だろう。

俺は思い出したように左腕を押さえる。

「ちゃんといってる」

使徒の戦闘の時に左腕がもがれた。本当に自分の腕がもがれた感じがして痛みも感じた。

まてよ使徒との戦いはどうなったんだ？

左目に攻撃を受けたことまでは覚えている。

まあ生きてるってことは何とか倒したんだと思う。もしかして原作同様に暴走したのかもしれない。

てゆうか、俺ずっとこの世界にいるのかよ。
どうしたら元の世界に戻るんだ？

落ち着け古手夜一

可能性があるとすればまた車に轢かれれば戻るかもしれないけど、
あいにくそんな勇気俺にはない。

俺は病室の外に出た。

第3新東京市某所 指揮車内

「やっぱクーラーは人類の宝、崇高な発明だわ」

外は四季が夏しか無くなった日本の日光が容赦なく降り注いでいる。
車内電話を置くリツコ

「そうね、ところでシンジ君が目覚めたと連絡がきたわ」

「そう、容態はどうなの？」

「少し疲労が見えるけど大丈夫だそうよ」
「とコーヒーを飲みながら言った。」

「それにしても、昨日の戦闘はすごかったわね」

「ええ、彼がどこまで覚えているか興味があるわ」

二人は昨日の戦闘のことを思い出していた。

左腕をちぎられ目に速射砲を受け動かなくなる初号機

「シンジ君、大丈夫？ 返事をして！！」と叫ぶミサト

さらに続く攻撃で背中のコードが切れた。

「アンビリカルケーブル断線、内部電源に切り替わります。活動限界まで後2分」

「シンジ君お願いだから返事して！！」再び叫ぶミサト

「パイロットの信号なし、生死不明」

静かになるネルフ職員

「ミサト、どうするの？」

「人命が最優先です。初号機を回収するわ」

発令所のスクリーンには使徒に思うがままにされる初号機が映っている。

「初号機活動限界です」

完全に沈黙する初号機

しかし使徒の攻撃は続いている。

「回収チームを向かわせて！人命が最優先よ」

それを遮ってリツコが

「見て、ミサト」

使徒が初号機の胸の装甲を壊し中のコアに攻撃をしようとした瞬間、初号機が使徒の腕をつかんだ。

「初号機活動を再開しました。内部電源は残ってません！」マヤが叫んだ。

グアツと口が割れ、巨大な歯を剥き出し吠える初号機腕をつかんだまま立ち上がり使徒を殴り付けた。

「まさか… 暴走……」とリツコは呟いた。

発令所の頂上で冬月が言った。

「勝ったな」

「ああ」

とゲンドウが答える。

隙をついて初号機から離れた使徒はA Tフィールドを張り応戦する。
しかし難なくA Tフィールドを引き裂き使徒の赤色のコアを殴り続ける。

光の矢を顔に打つ使徒。

逆に、使徒に突き刺す。

激しい音と共に爆発する使徒。

周囲のビルが融解する

煙のなかから姿を表す初号機。

剥がれる顔面の装甲。

のっぺりとした（人の顔）がスクリーンに映る。

驚愕している人々

その顔は勝利の喜びではなく、恐怖の表情に満ちていた。

「——あれがエヴァの——本当の姿」

ゲンドウだけが微笑みを浮かべていた。

第4話 R e i A y a n a m i (前書き)

やっと少しオリジナルっぽいのが書けました。

第4話 Re i A y a n a m i

ネルフ病院

病室の外に出た俺はナースステーションに向かった。

確か、綾波もこの病院に入院しているはずだ。どこの病室か聞きに行くために

その途中看護婦と合った。

「碇さん、今先生がいらっしゃるから病室に戻っててください」
そして有無を言わず病室に戻された。

ちよっと間抜けな俺、目覚めたことをナースコールで知らせればよかったかもしれない。

そんなことを考えていると、しばらくして医者が入ってきた。
診察を終えると

「特に悪いところはありません。ただ少し疲労が見えるようなので今日は泊まって、明日退院にしましょう」と言い去っていった。

戻ろうとする看護婦を呼び止めて

「あの、ここってネルフの病院ですか？」と聞いた。

「そうですよ」と笑顔で答える。

「あと、綾波さんってどこの病室に入院してるか分かりますか？お見舞いに行きたいんですけど」

やっと俺は聞きたかったことを聞いた。

看護婦は少し表情を陰しくして

「今、碇司令が見えられています。どうしますか？」

今ゲンドウと合うのはちよっと不味いな。話はちゃんと司令室でしょう

「そうですか… 場所だけ教えて貰っていいですか？」
分かりましたと言って、看護婦は場所を教えてくれた。

看護婦が出ていってからだいたい1時間になる。

俺はその間、今後綾波にどう接しようか考えていた。

原作を読んでいた時、1番考えていたのはレイのことだ。

人形のように扱われ、ゲンドウはレイを見ていたのでは無くレイを通してユイを見ていた。

同情のような感覚だったのかもしれない。

学校に通っていたのだってゲンドウの自己満足だと思う。

俺はいてもたってもいられなくレイの病室に向かった。

原作の様にゲンドウと合うこと無くに病室に着くことができた。

このドアの向こうにある種の憧れていた人がいると思うと、俺の心は自然と高ぶった。

意を決してドアをノックし、返事も待たずに病室に入った。

そこには蒼色の髪をした少女が……

って寝てるし…… おいおい…… 俺けっこう気張って来たのに

何か恥ずかしいじゃん…（笑）

てか起こすわけにも行かないしな… どうしよう

つかさつきゲンドウ来てたんだよな

もしかしてそんな時も寝てたのか？

だったらゲンドウもすぐ帰ったよな

だったらもっと早く来るんだっし！

しかし俺はレイの顔を見れたことで何か少し安心出来たような気がした。

俺は少し寝顔を観察してみた。

確かにかわいいと思う。

蒼色の髪ってどんなんだろうと思っていただけで窓から入って来た光に反射し、それは幻想的な輝きに満ちていた。

俺はレイと話したかったので病室で目覚めるのを待つことにした。

ネルフ病院 綾波レイの病室

暗い場所

私は血の臭いのする液体の中に入っている

そう……

そこは私の生まれた場所

もうそこには戻りたくない……

今は私にはあのひとがいる

あのひとの言うことなら何でも聞ける

私はその為に生まれてきたのだから……

目が覚めると私はいつもの見慣れた病室にいた。

身体中に鈍い痛みが走る

少し時間が経つと、だんだんと意識がはっきりとしてきた

私はどうしたんだろう……

出撃して使徒にやられたのはなんとなく覚えている

使徒はどうなったの？

まだ倒していないならまた出撃しなきゃ……

そっじゃなきゃ 私の存在価値はないもの……

すべてはあのひとのために……

ベットから上半身を起こそうとした私は左腕に違和感を覚えた

怪我している？

いや違う……

暖かい……

よく見ると黒髪の少年が私の手に覆い被さる様に椅子に座って眠っている

普段なら振り払ったと思う

しかし今は嫌じゃなかった

手から感じる体温になんだか落ち着くような感じがした

私はその少年をずっと見つめていた……

第5話 過去と涙

ネルフ病院 綾波レイの病

俺は夢の中にいた

レイが起きるのを待っている内にどうやら俺も寝てしまったようだ。

夢の中の俺は家にいた。

頬には涙が伝っている…

目の前には2つの遺影が……

そうあの日だ……

俺のまだ17年しか生きていないが今後も含めて人生最悪とも言えるあの日に……

つらかった……

俺の親は2人とも教師だった。

小さい頃、そう幼稚園の頃から勉強をやらされた。

幼稚園のころはまだ遊びの延長みたいで楽しかったと思う。

しかし小学校に行ってから変わった。

初めて塾に通った…

どんどん問題を解かされ、あげくの果てには家でもかなり勉強を強制された

息をつく場所すらない…

放課後に友達と遊んだことも全く無かった…

小5の時、そんな生活が嫌になった

初めて仮病で塾をサボり友達と遊んだ

楽しかった…

今まで俺は何をしていたんだろうと感じ後悔した…

それが親にバレて初めて父親に顔が腫れるぐらい殴られた

流血し泣き叫ぶ母親…

逆らってはいけないと本能で感じた瞬間だった…

受験を迎え、俺は親の指定した名門と言われる中高一貫校に合格した

何も嬉しくない…

それが率直な感想だった

その中学校の授業は大変でレベルがかなり高い

塾に行かされ、家でも勉強を強制され苦痛だった…

部活も禁止されたのも原因だったのかもしれない…

俺は爆発した…

勉強をしると言って叩いてきた父親を初めて殴った

俺は自分の力の強さに感激のような驚きを覚えた

俺は殴り続けた…

そして父親は病院に運ばれた…

その時俺は我にかえり 後悔した…

警察が来て事情聴取をうけた

どんな内容かはもう覚えてない…

俺は精神科に入院することが決まった
後悔の感情しか浮かばなかった…

3ヶ月の入院を終え退院した俺は両親と話し合い父親の実家があった長野に家族で引越すことに決まった

そこは快適だった

勉強から解放されたのも理由だったと思う
のどかな自然も広がっている

新しい学校で何人も大切な友達もできた

何もかも充実していた！

地元の高校に入学し楽しくなり ますます充実していった

しかし幸福は長く続かない……

もしかしてそれは、父親を入院させるほど殴った俺に対する神様の天罰だったのかもしれない……

一瞬の出来事だった……

俺の誕生日祝いで家族3人で外食しに行った時だった

長野は以前いた都会とは違ってどこへ行くのにも車が必要だ

両親が前で俺が後ろに座る
いつもとまるでかわらない……

そう思っていた……

一瞬だ……

対向斜線を走っているトラックが急に秩序を失ったように家の車に突っ込んできた

そこまでは記憶がある

気がついたのは病院だった

そこで医者から両親が即死だったことと大事故にも関わらず奇跡的に俺が軽傷だったことを教えてくれた

それは最後に父が身体を張って庇ってくれたおかげだということも

それを聞いた瞬間、涙が止まらなかった……

軽傷と言っても右足にヒビが入っていて、1週間の入院が必要だった。

入院中は祖父母、近所の人やともだちが世話をしてくれて、かなり助かった

やっと退院でき、家に帰ることができた
祖父母が忙しく一人で帰ることに決めた

帰り道の途中俺は考えた

正直に言うとな両親が死んだなどと言うことはまるで信じられない

家に帰ったら普通に両親が迎えてくれるのではないかとさえ思った

しかしそれは幻想でしかなかった……

家のリビングに位牌と共に二枚の遺影が飾ってあった……

涙が止まらなかった

俺が両親の死を実感した瞬間だった……

もうこれ以上おもいだしたくない……

その後何カ月もその夢を見続けた……

涙と共に目が覚めた

最初に見えたのは赤い瞳だった……

第5話 過去と涙（後書き）

フィクションです

第6話 初対面・そしてただいま（前書き）

皆さんの意見を参考にして書かせて頂いています。今後ともご意見や感想、アイデアを心からお待ちしています！

第6話 初対面・そしてただいま

嫌な夢を見た…

それをかき消す様に目を擦りゆつくりと頭を上げる

俺の眼と赤い瞳がぶつかった

その目からは何の感情も読み取ることとは出来ない……

「あつ、綾波…おはよう」

「……………」

おい今、俺おはようって言ったよな

なに言ってるんだよ俺…

まず今起きたの俺だし

しかも今午後だよ…

第一印象って超大事だよな

これやっちまった感じかな

完全に最悪のパターンだね……
しかも無言だし……

とりあえず話そう！

「えっと、身体の具合は大丈夫？」

「……」

「その、怪我したって聞いたから……」

「……」

「……」

「……」

「気まずい……」

「何か言わないと……」

「その……」

「誰」

「えっ……」

「……」

レイの言葉にハッと頭を上げた

そっか。今回はすぐにエヴァに乗ることに決めたから、綾波はケイジに出てこなかったから会ってないんだよね。

俺、一人で暴走してただけだよ……

かなり恥ずかしいな……

「ご、ゴメン。俺は碇シンジ。サードチルドレンだよ。」

「……………いかり……………」

そっか、やっぱり“碇”って言葉はマズイかな。
何とか仲良くならないとな。

「そっだよ。碇ゲンドウの息子だよ。」

「……………」

「俺は君のために来たんだ。」

その瞬間、レイの赤い瞳が少し揺れた。
しかし彼女は普段感情を全く出さないもので、外からはその変化はわからない。

ちよつと恥ずかしいこと言っちゃったなあ
けど頑張らないと。

「医者はいつでも退院して良いって言ってたけど、骨折もしてるし
ゆっくり休んでよ。」

レイの怪我の大半は出撃による怪我ではなく、その前の零号機の起
動実験の失敗によるものだった。

「帰る」

素っ気なくそう言うとベットから足を出しスリッパを履き始める。

「えっ、大丈夫なの？ まだ休んでた方がいいよ」

「……………」

「休んでた方が治りも早いと思うし…」

「許可は出ているのでしよう」

「確かに出ているけど、まだ休んでいても誰も文句は言わないと思
うよ。」

「また……使徒が来るかもしれないわ」

確か原作だと使徒はまだ来ないんだよな。

「使徒はしばらく来ないから安心して休んでよ。」

「なぜ？」

レイが怪訝そうな表情でみている。

しまった… 何て説明すればいいんだろう。

別世界から来たと言ったらただの頭のおかしいやつだよな…

てかよく考えたらこの病室の会話って監視されてるんだよな

おおゝ 怖っ…

下手なこと言わない様に気を付けなきゃ

小声で俺は

「まだ言えないんだけど、とりあえず使徒は来ないから安心して」

綾波は不思議そうな顔をして俺を見てくるが無理もない

続けて

「とりあえず今は休んでよ。さっ、横になって。」

俺の誠意が伝わったのか綾波はゆっくりとベットに横になる。

そして目をつぶると、数分もしないうちに穏やかな寝息をたて深い眠りに落ちた。

やはり怪訝の身体は休息を求めていたようだ。

「ゆっくり休んで早く良くなって。」

眠るまで見守り、最後にそう言つと俺は音をたてないように病室を後にした。

彼はなぜ使徒が来ないと断言出来るの？

彼はなぜ私の心配をするの？

私の代わりはたくさんいるのに…

しかしそれは嫌じゃなかった…

なぜ…

あのひとの息子だから？

いや、ちがう…

彼はあの人とはちがう…

そんな気がする…

何か暖かいそんな感じがする

それはとても気持ちいい

彼が言った通りわたしはベットに横になった。

すぐに私の意識は遠くなる

ネルフ病院 廊下

綾波の病室から出た俺は自分の病室に戻ろうとする。

初対面だったけどあんな感じで大丈夫だったかなあ…

まあ今後仲良くなるように努力していこう！

明日から続けてお見舞いに行って仲良くなろう作戦を実行することにする。

そうこうしているうちに自分の病室の前に着き、ドアを開ける。

そこにはイスに座りながら寝ている女性の姿が…

「ミサトさんっ」

俺は予期せぬ来客に声をあげる。

しかしそれで起きる気配はない。

綾波の病室に行ってる間待ってて寝ちゃったんだな。

最初の使徒戦の後処理とかも大変そうだし疲れてるよね。

待てよ、ミサトさんなら俺がどこに居たとかわかっていたはずだかわざと邪魔しないでくれたのかも。
考え過ぎかな？

とりあえず起こさないと

「ミサトさんっ、起きてください」俺は声と共に身体を揺すった。
すると少し反応があり

「うっ、後五分…」

これは完全に朝と勘違いしてる…

しかも口からよだれをたらしてるし…

俺はそんな様子を見てると少し元気になったような気がした。

この繰り返しを10分ぐらいしているとミサトさんの意識は覚醒した。

「シンジ君がいないから寝ちゃったわよ」
笑いながら言うミサトさん。

「すいません、まさか来てると思わなかったの」

「まあいいわ。それよりシンジ君、退院するからすぐに用意して。」

俺は予想しなかった言葉に驚きを隠せなかった。

「医者に今日は休めって言われたんですけど…」

「病み上がりにレイの病室に行くぐらいの元気があれば大丈夫よ」

ミサトさんがニヤついてるし
やっぱり知ってたんだな…

「もちろん許可はとってあるわ。それとこれが駅に忘れたあなたのバックよ。」

そうだ、駅で焦った俺は何も持たずに飛び出しちゃったんだよな。

言われたままに着替えて病院から出てミサトさんの車に乗った

ネルフに向かう途中では綾波の病室で何をしてたのかからかわれた。

ネルフ本部 総務課 事務室

本部に着くと俺たちは総務課の事務室に向かった。
俺の住居などを決めるためだ。

総務課の人が

「君は第6ブロックの3号室が住居になる。それで構わないな。」

高圧的な言い方。嫌悪感が背中に走る。

何か俺が言い返そうとしたときミサトさんが

「シンジ君のお父さん…、碇司令とは一緒に住まないんですか？」
と言った。

総務課の男は俺の方を見て

「そつだ。君もその方がいいだろう。これは碇司令の指示だ。」

高圧的な言い方に圧倒され頷いてしまった俺。

ミサトさんは下を向いている。

事務室から出るとミサトさんが声をかけてきた。

「シンジ君、本当にあれでいいの？」

はつきり言っであんな言い方されたら頷くしか出来ないし。
拒否権ないじゃん…

「ええ、まあ…」

曖昧に返事をした。

ミサトさんは少し考えた様子を見せると、決意したように
「シンジ君」

「はあ」

「うちに来なさい。」

「はあ」

「もう決めたから。」

ミサトは携帯を取り出すと電話を掛け始めた。

五分ぐらいで話しが終わった。

そして

「シンジ君、私の家に帰るわよ。もう決まったから。」

「わかりました。これからよろしくお願いします。」

やっぱりこうなったか。

まあ、嬉しいんだけどね（笑）

そして車に乗った。

「ちょっとよるところあるから」

突然ミサトさんが言った。

多分、第3新東京市が見渡せる展望台だな。

新劇場版を見た時の映像の壮大さが頭をよぎった。

見てみたい

自分の目で…

展望台に着くとちょうどビル群がまるで生えて来るかの様に地面から上がってきた。

「シンジ君、これがあなたが守った街よ」

その光景に俺は感動した。

さてよ、今回俺気絶しちゃったから何にもしてないんだけど…

苦笑いする俺…

展望台の近くにあるコンビニで今日の夜ご飯の買い物をする俺たち。ミサトさんの買い物かごにはレトルト食品や弁当や惣菜が山の様に入っている。

全然自分で料理を作る気がないのがわかる。

辺りを見回して見る。

コンビニの中は俺の世界とほとんどが変わらない。入り口に新聞が置いてあり、一部を手を取った。

2015年

それを見たとき改めてエヴァの世界だと実感した

新聞をめくってみる

昨日あれだけのことがあったのに新聞にはエヴァのことは載っていない。

「B-22か…」

俺は原作で言っていた報道管制を思い出した。

買い物が終わりミサトのマンションに二人は到着した。

コンフォート17

街灯は着いているが部屋の明かりが着いている所は1つもない。

エレベーターに乗り上に上がるとある部屋の前に引越し用の段ボールが積んであった。

「あら、結構早いわね。あそこが私たちの部屋よ。まあ私も最近引越してきたばかりなんだけどね。だからちょっと散らかってるわよ」

「

玄関に入ると俺の目には信じられない光景が飛び込んできた。

ゴミゴミゴミゴミゴミゴミゴミ……

脱ぎ散らかした服服服服服服……

アニメではテレビ用に綺麗にしたんじゃないかと疑いたくなる……

てかこれでどうやって生活してるんだあ……

かたづけなくちゃ……

それは今後の苦勞が容易に想像できる光景だった……

第7話 ミサトの家（前書き）

頑張って連日でアップしました！よろしくお願いします。

第7話 ミサトの家

何とか食事が出来るぐらいに片付けて、俺たちはさっき買ったコンビニの弁当などを食べ始める。

ミサトさんの手にはあのエビチュウが

たわいのない話などをしたあとミサトさんは改まって

「同居にあたって家事の当番を決めたいと思います。」

と言った。

てゆうか、ミサトさんが家事が終わってることをさっき思い知ったからなあ

よし、俺が家事をやるう。

幸いにも俺は両親が死んでから一人暮らししてたから何とか簡単な料理とかは出来る。

まあ、原作のシンジほどじゃないけど…

「料理とか俺がやるんで、ミサトさんはゴミ捨てとかやって貰えますか？」

「いいの、それで。私も料理した方がいい？」

俺は慌てて首をふり

「料理得意なんです。一人暮らし長かったから」

ああとミサトさんは納得した。

確かシンジは松代でけっこう酷い扱いを受けていたんだよね。
ネルフの報告書ではどうなっているのだろう。
確認出来る機会があればいいんだけど…

加持さんに頼むことになっちゃうかな。

「そうだ、シンちゃん。明日から学校に通って貰うわよん」

酔いが入ってテンションが上がってるミサトさんが言った。

今シンちゃんって言ったよな。

高校生になってちゃん付けとか恥ずかしいな
って言っても今の俺は中2なんだよね。
そんなもんか（笑）

てか学校に通えって言ったよね。また中学に通うのは嫌なんだけど…
悪い思い出しかないし…

「明日からですか？」

「うーん、明日からじゃあ何かシンちゃん問題あるの？」

「出来れば綾波のお見舞いに行こうかと思ってたんですけど」

さっき明日も綾波のお見舞い行くなって決めたんだから明日から学校には出来れば行きたくない。

「レイのお見舞いねえ、シンちゃんはああいう子がタイプなお
」

ミサトさん完全に酔っ払っちゃってるな。
それとも元からこういう人なのかな。

「まあ、同じパイロットですからね」
当たり障りのない返事しておく。

「ホントはどう思ってるのよ？」

こうなると完全に酔っ払いが絡んでるだけだな……

しばらくそんな話しをして、俺は風呂に入ることにした。

もちろんペンペンにあっただ。

風呂の中で俺はいろいろと考えた。

ミサトさんはアニメの通りいい人っぽかったなあ

そうだ、ゲンドウの所に行くの忘れちゃったなあ
明日お見舞いの帰りに行くことにしよう。

学校にはあんまり行きたくないが、この世界にとって学校が重要なポイントになっていることは確かだ。

シンジが通った2ーAは適格者が集められていると加持さんが調べていた。

そう、学校での対応も頭の片隅に入れとかなくちゃ。

とにかく昨日と今日は密度の濃い日だったな……

俺は風呂から出るとミサトさんに軽く声をかけ、新たに住むことになった部屋のベットに横になる。

とりあえず今日はもう寝ることにする……

コンフォート17 ミサトの家

「もう寝たかな…」

エビチュを片手にミサトは今日そして昨日のことを思い出していた。テーブルには空き缶が十本以上ある

彼女ははずつと違和感のようなものを感じていた

ミサトはシンジを駅まで迎えに行くことが決まったとき、諜報部の報告書を穴が空くほどとは言わないうがかなりの回数を読んだ。

その報告書はなかなかよく調べてあり、おおそのシンジの性格は掴んだと思っていた。

しかし実際に本人に会ったら全然予想と違っていて驚いた。

最初は前に加持が言っていたように諜報部の能力のせいかと思っていたが、シンジを見ているうちにそれは違うようなきがしてきた。

偏見かもしれないがシンジが自分のことを俺と呼ぶとは考えてもみなかった。

それは中学2年ということを考えれば普通かもしれない。

しかしこれだけではない……

決定的だったのはエヴァに乗るように言われた時だった。

普通に考えてこんなアニメにしか出てこないような物に乗って戦え

と言われたら断るか嫌な素振りを見せるものではないだろうか。

ところが彼は嫌がるどころか乗ると言った。

しかも起動の際のＬＣＬにも全く驚きを見せなかった。

自分だったらあんな冷静な対応は出来そうもないだろう。
と言うかＬＣＬに驚かなかったのは冷静ではなく奇妙だ。

しかもコンビニで聞き間違えでなければＢー２２と言っていた。

それはエヴァのことを一般に公表出来ないので、それを隠すための偽の情報の番号である。

もちろん、一般人が知っているはずはない

どこからか聞きかじったのかもしれないが、入院していた彼が聞いた可能性はかなり低い

なんでいろんなことを知っているかはわからないが彼は敵ではない気がする。

それは今まで自分が軍人として生きてきた勘のような物だと思う

そして彼女は自分の部屋で眠りについた。

第8話 朝

コンフォート17 ミサトの家 シンジの部屋

今朝は嫌な夢を見なかった様だ。
不快感がまるでない。
それだけですごく元気になる。

目を開けて最初に見えたのは見たことのない天井。

いや、漫画やアニメなどで見たことはあるかもしれないが実際に自分の目で見るのは初めてだ。

それだけで少し孤独感が俺を襲う。

どうやら一晩眠ったら元の世界に戻っているとかそういうことは無かったみたいだ。

もしかして俺はあの辛い現実世界に帰るのを無意識に拒絶しているのかもしれない。

そんなことを考えていてもしょうがない

俺は少し慣れてきた身体を起こしリビングに向かった。

テレビをつけると6時半ということがわかった。

どうやらまだミサトさんは起きていないようだ。

昨日結構遅かったからなあ…

そうだ朝食を作ったところ。

そうしてミサトさんを起こそう。

葛城家の冷蔵庫は2つある。

1つはもちろんペンペンが使っている。

もう1つは三層に別れており一番上は冷凍庫になっている。

迷わず食材を出そうとして二段目を開けた。

しかし俺の目に入ってきたのは「ビールしかない……」

ことはを失うとは多分この事を言うのだろう。

見事にビールしかない。

俺は圧倒されながら下段の野菜室らしき扉を開けた。

「ここもビール……」

再び圧倒された。

そこには二段目に入らなかったビールとヨーグルトしか入っていない。

「さすがにね」

そう言つて冷凍庫を開ける

そこには

アイスアイスアイスアイスアイスアイスアイス

アイスしかない……

ミサトさんはどういう食生活をしてるんだ……

俺がエヴァの世界に来ちゃったのより不思議だ…

とりあえず買い物に行こう。

このマンションの近くにコンビニがあつたはずだ。

お金は…

そうだ昨日、ネルフのＩＤカードがクレジットカードになるって教えてもらったよな。

とりあえず問題解決。

ちよつと待てよ…

ネルフって非公開組織の筈だよな

外でネルフのロゴが入ったカードなんか使って大丈夫なのかな…

まあ、第３新東京市に住んでいる人のほとんどネルフの関係者だった様な…

だからかな？

ともかくこれ以上余計なこと考えて脳のキャパ使つの止めよう。

ただでさえ考えなきゃいけない事たくさんあるんだから。

俺はIDカードを持って外に出てコンビニに向かった。

コンビニはマンションから約100メートルのところに有り迷わず行くことが出来た。

いくら漫画やアニメ見ても道まではわかんないからなあ
綾波の病院までミサトさんに送っていつてもらわないとダメだな…

コンビニでパンと玉子やハム等を買って部屋に戻った。

ちなみに普通にネルフのIDカードで買い物できた。

やっぱり誰ともすれ違わなかったな。
ここは俺たちの他は誰も住んでいないみたいだ。

キッチンで簡単にスクランブルエッグを作り、トーストしておく。

ホントはサラダも食べたかったな…

ミサトさんを起こそうとして部屋の前に行く。

「ミサトさんゴハン出来ましたよ」

テレビを見ると時刻は7時半、ちょうどいい時間だ。

返事がないのでふすまを開けて入って見ると、寝相が悪いを遥かに超越した寝かたが………

「ここまで来るともはや芸術だな…」

そこには完全に布団から飛び出し大の字になって床に寝ているミサトがいた。

寝ながら飲んだのか、ビールの缶が倒れ中身が飛び出て床を濡らしている。

しょうがないのでビールを拭いてから声をかけた。

「ミサトさん、朝ですよ！」

ややタイムラグがあって

「うう…シンちゃん、後五分…」

唸っているミサトさんを叩き起こし一緒にご飯を食べる。

「シンちゃん意外と料理上手なのね」

事故以来俺は一人で料理を作り一人で食べていたので、誰かに作った物を食べて貰うことに何か喜びを感じた。

「ありがとうございます。そう言って貰えると作りがいがありますよ。」

続けて

「話し変わっちゃうんですけど、俺まだ道とかわかんないんで病院まで送っていつてくれると助かるんですけど」

「病院…、ああレイね。わかったわ、いいわよ」

と言って携帯を取り出し

「あつ日向君、私シンジ君送ってから行くからちよっち遅れるわと言った。」

「すいません、ミサトさん」

「いいのよ。私もおおっぴらに遅刻出来るしね（笑）」

さすがミサトさんだ…

日向さんかわいそうだな（笑）

ミサトさんに病院まで送って貰うと早速、綾波の病室に向かった。

ミサトさんは去り際に

「病院だから襲っちゃダメよ」
と言っていた。

何言ってんだ…

そこが良いところかもしれないけどね（笑）

ミサトさんに病院まで送って貰うと早速、綾波の病室に向かった。

ミサトさんは去り際に

「病院だから襲っちゃダメよ」
と言った。

何言ってるんだ…

そこが良いところかもしれないけどね（笑）

ノックをし返事を聞いてから中に入る。

「やあ、綾波調子はどう？」

出来るだけフレンドリーに話しかけてみた。

左腕のギプスと包帯がとても痛々しい…

「……………」

返事はなし…

俺はとりあえずベッドの近くの椅子に座った。

ベッドの備え付けのテーブルには朝食が置いてあった。
全く食べた様子はない。

「綾波、朝ごはん何で食べなかったの？」

「… 必要ないもの……………」

「栄養を摂らなかつたら怪我が早く治らないよ」

「必要な栄養は摂ってるわ」

と言つて棚にある錠剤の束を指差した。

もしかして三食これ食べてるのかな…
それってヤバいしょ

「それ、医者が出してくれるわけないよね」

「赤木博士がくれたわ」

ああ、確かにリツコさんなら栄養剤でいいっていいそうだな。

けど成長期に栄養剤って絶対間違ってる。

そうだ

「いい、よく聞いて。成長期の身体には絶対食事をとった方がいいんだ。それと食事って楽しくない？」

「なぜ…、食事は栄養をとるだけの行為だつて赤木博士が教えてくれたわ。」

「おいしいご飯を食べたら楽しいとか思ったことない？」

「いいえ……」

おい、今までどついう風に育てたんだよ！
ゲンドウ！

「じゃあ、明日俺がお弁当か何か作ってくるから食べてみてよ。そうしたらちよつと分かるかもしれないしさ」

「そう、わかったわ」

その後少し喋ってから
といつてもほぼこちらからの一方通行だったが……

「また明日来るからそんな時お弁当食べてみてね」

「わかったわ」

「じゃあ、また明日」

「さよなら」

おつ、挨拶してくれた。
一歩前進か！

俺は少し喜び病室を後にした。

ミサトさんに教えて貰った通り俺は電車を使ってネルフ本部に向かった。

どうやらIDで電車に乗れるみたいだ。

IDを通し本部内に入るとすぐさま迷子になった。

この年で迷子になると思わなかったなあ…
めっちゃ恥ずかしいし…

五分ぐらいさまよっていると反対側から女性が歩いてきて、声をかけてきた。

マヤさんだ。

「あら、シンジ君こんにちは。どうしたのこんなところで？」

マヤさんが言うには、ここは発令所などから反対側にある職員宿舎があるエリアだそうだ。

ドンだけ迷ったんだよ俺！

司令室に行きたいことを告げ、マヤさんに連れていって貰った。

「マヤさんありがとうございます！」

マヤさんは微笑みながら

「どういたしまして。ところでシンジ君、何で私の名前知ってるの？まだ自己紹介してないとおもうんだけど」

しまった…

戦闘後は入院してたから会ってないんだ…
まだ不信心を持たれるわけにはいかない。

「えっと、ミサトさんから聞いたんです。マヤさん美人だったから覚えちゃったんです！」

「まあ、シンジ君ったら」

マヤさんは少し頬を染めていた。

ちよつと無理あつたかな…
誤魔化せたみたいだからいつか。

マヤさんと別れ司令室のドアのインターフォンをおす。

『入れ』

一言ゲンドウの声が響きドアが重々しく開いた。

さあ、ゲンドウとの対面だ。

頑張ろう

第9話 嘘と挑戦（前書き）

コメントいただけるととても励みになります。同時に俺だったらこ
うするなどのアイディアも募集してます！

第9話 嘘と挑戦

ネルフ本部 司令室

無駄に広い部屋

奥には机と椅子が一组ある

椅子にはゲンドウがその横にはさらに年配の男性、冬月が立っている。

「シンジ君、一昨日の戦闘ご苦労様。我々は君がエヴァに乗ってくれたおかげで命が助かったよ」

と冬月が言った。

ゲンドウはサングラスと机に肘をつき手を組んで口元を隠している
のでその表情はうかがい知ることが出来ない。

「我々としては今後もシンジ君にエヴァに乗って貰いたいだがどうかな？」

この人大学の先生だったんだよな

確か、形而上生物学だっけ

さすがは先生だけあって何か品があるな

「いいですよ。冬月先生」

冬月の目が見開いた。

そう

俺の利点は情報を知ってることだ

知りすぎてることを知られれば殺されるかもしれないがエヴァの中でユイ（母さん）に聞いたことにすれば良いだろう

サードインパクトを回避するためには何か行動を起こさなくてはいけない

それが例えどんなに小さいことでも

「シンジ君…、どこで聞いたのかね？」

「エヴァの中だったと思います。気を失っている時に女の人と会いました」

「まさか…、ユイ君が…、おい碇」

「ああ、そのようだな」

「あれは母さんなの？」

「ああ」

おいっ　認めちゃったよ

親がエヴァの中にいるとか普通だったら信じられるわけないし…

ゲンドウの頭の構造を知りたいわ（笑）

「予定よりかなり早くないか」

「ああ…、シンジ他には何か言っていたか」

こいつ「ああ」って言ってばっかだな（笑）

本来俺はこれが言いたかったんだよね

「私はここから出ないとかここで未来を見るとか言ってたよ」

これでサードインパクトが回避される方向に少しでも行けばいいんだけど…

本当にゲンドウが碇ユイに会いたいなら行動がこれで少し変わると信じたい

「碇…」

「ああ…、問題は無い、だがシナリオに若干の修正を加える必要があるな」

三人は沈黙する

とりあえず成功とみていいかな？

ゲンドウちょっと慌ててるし（笑）

全部作り話なのにね

長い沈黙を破ったのは冬月だった

「シンジ君、今日のご苦労だった。とりあえず今日は帰ってくれ。後私のことは副司令と呼んで欲しい」

冬月まで慌ててるし（笑）

やっぱり相当ショックだったのかな

「はい」

「そうだと忘れとこだった。赤木博士が君にきて欲しいと言っていたから赤木博士の部屋まで行ってくれ」

「わかりました。じゃあ失礼します」

俺は司令室を出た。

リツコさんは俺に何の用だろう

実験かな…

明日の綾波のお弁当作らなきゃいけないから早く帰りたいんだけど
な……

てかりツコさんの部屋どこだよ！

場所教えてくれよ 老人二人！

俺は司令室に戻り道を聞いたら青葉さんを道案内に付けてくれた。

そっか、青葉さんって副司令直属の部下だったんだよな

原作じゃギター持ってるくらいしか見たことないし（笑）

どんな人なんだろう

五分ぐらいで青葉さんがやって来た。

とてもいい感じの人だった。

「シンジ君、待たせたね。俺は青葉シゲルって言うんだ。オペレー

ターだよ」

「これからよろしく願いします」

青葉さんは積極的に話しかけてくれとても好感を持った。

雑談をしながら歩いているとすぐにリッコさんの部屋に着いた。

俺は青葉さんにお礼を言って別れた。

彼は

「また何かあったら声をかけて」
と言って去っていった。

最後までいい人っぱいなあと俺の評価はうなぎ登り

インターフォンを押し扉が開き中に入った。

リッコさんが中で座っている。

俺は薦められた椅子に座りながら

「今日は何の用ですか？」
と尋ねた。

「明日からの訓練のすけについてよ」

と言って一枚の紙を渡された。

そこにはスケジュールがびっしりと書かれていた。

えっ…、毎日…

4時から9時まで…

予備校の時間割ですか…

「こんなにマジでやるんですか？」

おそるおそる尋ねた。

リッコさんはちょっとキレそうな顔で

「何か問題があるのかしら」

有無を言わさない迫力…

「いえ、無いであります」

即答する。軍隊口調になっちゃったけど…

「ただ…」

「ただ…、何？」

リッコさんの顔に青筋が浮き出る。

「明日学校初日なんでよには間に合わないかもと…」

実際は綾波のそこに行くからだけどね」

「そうね、明日は6時からでいいわ。特別よ、わかったわね」

「はい。わかりました」

「じゃあ、今日はもう帰っていいわ」

ここで大事なことに気がつく俺

「あの帰り方わからないんですけど」

その瞬間、青筋復活！

「何、ミサトに聞いてないの？」

その顔はまるで

鬼だ 般若だ……

金田じゃないよ（笑）

背中に冷水ぶっかけられてるって錯覚するぐらい身震いした

「わかった、ミサトに送らせるわ」

ミサトさんに送ってもらい無事に帰宅

途中で弁当のための食材も購入した。

道を覚えるのが最優先かなあ…

何故かミサトさんまで帰宅

聞くと仕事は日向さんに任せたらしい。

すいません日向さん（笑）

さあ明日は学校にいかなくちゃ

第10 転校初日（前書き）

いろいろコメントありがとうございます。コメントをくださると励みになるのでこれからもよろしく願いします。

第10 転校初日

「こんにちは。碓シンジです。松代の方から親の仕事の都合で来ました。よろしくお願いします」

転校初日2ーA教室で挨拶した。

また中学かあ

あんま乗り気がしないなあゝ

けど2ーAにはチルドレン候補が集められてるんだよな

おつ、ケンスケいるじゃん

トウジは…いないな

妹のところかな？

「それでは碓君、窓際から2列目の前から2番目の席に座って下さい」

と担任の老教師が言った。

席に着こうて辺りを見回すと教室に生徒が少ないことに気づいた。

半分くらいの席に空席が目立つ。

そして指定された席に座った。

さてよ、ここって原作の席と違うね？

確か詳しくは出てなかったけど最前列だったような気がする…

やっぱり俺の行動のせいで原作と変わってきたのかな。

これは逆にいい方向かもしれない。

運命というのはたくさんの小さな歯車の組み合わせだと思う。

何かちょっとした事を変えるだけで未来は大きく変わることだってある。

そう考えるとこれは小さいが、俺にとっては大きな一歩と言えるかもしれない。

そういえばここって綾波の隣じゃね

俺は主人のいない隣の席を見た。

そこはまるで最初から誰も使って無いような静けさだった。

「碇君、どうしました？もう授業は始まっていますよ」

老教師の声で我に帰った。

他の生徒は机の上にパソコンを出している。

俺もバッグからパソコンを出す。

パソコン重っ

てか型が古くなっ？

何でエヴァてかあんなにハイテクなのにこのパソコン、フロッピー使ってたんだ（笑）

もっと言うと、支給された携帯も古い！

今どき折り畳み式じゃあないってヤバいっしょ

そつえば新劇場版 破 では新しい携帯になるって言うってたなあ

十万らしい（笑） 買えない…

と言うことはこの世界は新劇場版の世界じゃないってことなのかな？

真希波 マリ イラストリアスとかわかんないし…

そう考えると一応知ってる世界見たいで良かったかも。

社会の授業が展開されている。

てかパソコンどうやって使うんだよ！

旧型過ぎて何がなんだかわかんないし…

寝よう…

俺の意識はそこで途絶えた…

身体を揺すられる感覚があり、心地よい夢の世界から引き戻された。

クラスメートっぽい女子が3人いる。

「碇君、転校初日から寝るなんて勇氣あるね」

俺の頭はまだ完全に覚醒していない。

「ねえ、碇君って何で転校して来たの？、今ってほら転校していつちやう人多いからさ」

確かに怪獣と巨大ロボットがドンパチやってる街に転校してくるやつは普通いないよね（笑）

「あゝ、親の仕事の都合かな」

「へえゝ、大変だね。両親と一緒に住んでるの？」

「違うよ」

「じゃあ一人暮らし？」

「違うよ、父さんの部下の人と住んでるんだ」

「ええ、変なの」

確かに普通に考えると変だよな。

てかシンジってこんなに話しかけられるやつだったっけ

これも変化の一つかな

「あともう一個聞きたいんだけどね」

「ちょっと待って、今何時かな？」

大事なことを思い出した。

綾波に弁当を渡さなきゃ

俺のバッグには今朝作った綾波の分の弁当が入っている

「1時だよ、碇君ずっと寝てたんだから（笑）」

ヤバい早く行った方がいいよな

「ありがとう、後悪いんだけど俺ちょっと用事が有って早退するか
ら先生に言つといてくれないかな？」

「ええ、もう帰っちゃうの？」

「ごめんね。頼んだよ」

神速で帰り支度を済ました。

学校の外にでるとまた困ったことに気づいた。

道がわからない…

タクシーも走っていない様子だしどうしようもなく辺りを見回した

あれっ…

人通りの少ない道に黒いスーツに黒いサングラスまでかけた人が…

あの人多分俺の護衛だよな

俺と目があって隠れたけど見つかったちゃダメっしょ（笑）

一言で言うとかっこいいな（笑）

そうだ、あの人に言えば病院に連れて行って貰えるかも！

俺は早速近づいて話しかけた

「あのネルフの人ですよね？」

まさか話しかけられるとは思っていなかったらしく護衛の人は驚いた

「はっ、はい。そうですが」

「病院に行きたいんですけど道わかんないんで送ってもらいたんですけど」

「わかりました、あの車でお送りします」

と言って黒い車を指差した。

「あと全然関係ないことなんですけど、俺に見つかっちゃマズくないですか？」

護衛の人は困った顔をして

「良くはないですね。こんなに早く学校から出て来られると思わなかったので車から出てジュースを買っていたんです」

手にはオレンジジュースを持っていた。

ぷっ、このガタイでオレンジジュースかよ（笑）

ちよっと吹き出す俺

「それでは車にお乗り下さい」

病院に届けてもらいお礼を言い護衛の人と別れた。

携帯を見ると2時だった。

俺はすぐに綾波の病に向かいノックをした

ネルフ病院 綾波レイの病室

なぜ彼は私に会いにくるの……

私がエヴァのパイロットでファーストCHILDレンだから？

それとも他に理由があるの？

彼は今日も来ると言った

昨日彼は私に病院のご飯を食べると言った

私は栄養剤で必要な栄養は摂ってるのに

赤木博士は食事は栄養を摂取するだけだと教えてくれた

何で彼は食事をしろと言うの？

私にはわからない……

だけど嫌じゃない……

何か暖かい感じがする……

あの人とはまるで違う

これが嬉しいって気持ち？

ノックの音がした

「はい」

ドアが開いて顔が見える

彼だった……

「綾波調子はどう？」

「問題はないわ」

おっ、綾波が返事したよ！

変わってきたのかな？

「今日俺2ーAに転校して行っただけど多分席綾波の隣になったんだよ。綾波の席って窓際の前から2番目だよな」

綾波は軽く頷いた。

「これからヨロシクね」

「よろしく…」

俺は聞いたかったことを聞いた

「あとパソコンの使い方を教えてくれない？全然使い方わかんなくて…」

意外なことに綾波は丁寧に使い方を俺に教えてくれた。

しかもわかりやすい！

だいたい使い方が分かってきたところで

「ありがとう、助かったよ。綾波って意外に教師とか向いてるかもね」

沈黙が流れる

やべえ、はずしたかもしれない…

でも少し顔が赤くなってるような…

「そんなことよりお弁当作ってきたんだ。お腹すいてる？」

コクンと頷く。

「一応綾波の嫌い肉は入れてないんだよ、みて野菜のハンバーグ！」

俺は弁当を取り出しながらテンションを上げて言った。

実はこのハンバーグ3回も作り直した苦心作なんだよね

失敗のおかげで朝ごはんは俺の弁当は両方ハンバーグだよ…

これはキツいつて！

「なぜ…」

綾波が呟いた

「えっ」

「なぜ私が肉嫌いって知ってるの？」

そうか…

知ってるわけないんだよね…

俺らの世界ではニンニクラーメンチャーシュー抜きってローソンで商品になってるほど肉嫌いって常識だからなあ…

そうだ思い出した。

俺まだニンニクラーメンチャーシュー抜きのやつ食べてないし！

この世界に入っちゃうなら食べとけば良かったぜ…

ついでにミサトカレーも（笑）

「えっと……、リツコさんから聞いたような…」

確かにリツコさんなら知ってるよな

まあ普通に考えてそんな話しするわけないけどね

まあ綾波が話してくれるだけ昨日や原作よりましかな？

綾波は食べ始め、小さな弁当だったのが完食してくれた。

「どうだったかな？」

おそろおそろ聞いてみた

「おいしかったと思うわ」

「どう、楽しくはなかったかな？」

「……」

「おいしいのを食べるのって楽しいもんなんだよ」

「楽しかったかもしれない…」

マジっすか！

3 回もハンバーグ作り直しただけの成果はあつたぜ

「じゃあ、これから学校のお弁当作っていくから食べてくれない？」

「

コクンと頷く

おつ、またまた一步前進じゃん

んっ…、5時…

訓練に行かなきゃいけないんだよね。

間に合うかな…

「ありがとう……」

と小さな声で言った彼女の言葉を考え事をしていた俺は気づかなかった。

「ゴメン綾波、もう行かないといけないみたいだ」

「……」

「また明日来るから」

綾波の顔が明るくなったようなきがした。

「じゃあね綾波」

「また明日…」

おっと、挨拶してくれた！

くっそ、訓練なんか行きたくなってきたよ…

俺は名残惜しかったが病室を後にした。

ネルフに行かなくちゃ。

俺はまたまた大事なことに気づいた。

だから一人じゃネルフに行けないって！

とりあえずミサトさんに連絡する事にした。

またこういう落ちか……………

第11話 起動実験（前書き）

アイディアを送ってくれた、ホノベルさんありがとうございました。ちよっとよく分からなかったので詳しく教えて頂けるとありがたいです。皆さんからのアイディアを待っています。

第11話 起動実験

「ミサトさんまた帰れなくなっちゃったんですけど…」

タメ息が聞こえる。

「シンちゃん今どこ？」

「あの…、病院です」

「ああ、レイのとこね。うーん…、そうだ剣崎君に頼むわ。シンちゃん、病院の入り口で待っててね」

俺は電話を切り病院の入り口に移動した。

剣崎って…

シークレットエヴァンゲリオンの剣崎キョウヤかな？

俺、ちゃんとそのゲームやってないんだよね…

てか俺定価で買ったのに今は中古で千円だったからね…

ショックだし…

そんなことより、剣崎キョウヤがいるんだったらここはどの世界なんだ…

剣崎キョウヤは何か重要な人物なのだろうか

「シンジさん、お待たせしました」

前方から声がした。

黒いスーツに黒いサングラスを掛けた男が立っていた。

「はじめまして、といっても先ほどもお会いしましたね」

そういわれて黒服の顔を見ると学校から病院に送ってくれたオレンジジュースのあの人だった。

「あなたが剣崎さんだったんですね」

「そうです、諜報部の剣崎キョウヤです。ではこちらにお乗りください。ネルフ本部にお送りします」

車中で剣崎と話してみると、大学時代はミサトさんと加持さんとりッコさんと同じだったようだ。

これはゲームと同じ

新しい情報は得られなかった。

ただけっこう話しやすい感じだったかな

ネルフ本部に着くと入り口に青葉さんが待っていて案内してくれた。

「シンジ君遅いわよ、3分の遅刻ね」

リツコさんに怒られた。

「すいません」

「とりあえずプラグスーツに着替えてきてちょうだい」

「わかりました」

てか更衣室どこだろう

「更衣室はそのドアを出たら右に進んですぐよ」

俺の不安を予期した様に言った。

スゲー…

てか早くネルフの地理を覚えないとこれからの行動に差し支えるな…

おれは更衣室着替えて、リツコさんに連れられてケイジに行った。

そこには紫色巨人がLCLに浸かって待機していた。

なすがままにエントリープラグに乗せられる。

「第1次接続、開始」

「続いてエントリープラグ、注水」

プラグ内にLCLが満たされていく。

確かLCLってターミナルドグマにいるリリスの体液じゃあなかったっけ？

そりゃあ血の味がするわけだよね…

考えると気持ちが悪くなってきた吐き気が…

「うぶっ」

「シンジ君、そこで吐くと大惨事になるわよ」

とリツコさん。

確かに一応水の中だから大変なことになるな…

我慢することに決めた。

「第2次コンタクト、準備オーケー」

「主電源接続」

一気にプラグ内が明るくなる。

「A10神経接続、異常なし」

「思考形態は日本語をベーシックにして、フィクス」

「双方回線、開きます」

「起動実験、開始」

発令所のモニターのシンクログラフが揺れる。

「シンクロ率、27.8%」

「おかしいわね、理論上はまだいけるはずよ。シンジ君、聞こえてる？」

「はいっ」

突然こえをかけられびっくりした。

「まだシンクロ率が上がるはずよ、集中してちょうだい」

いや

集中って言われてもな…

どうすればいいんだろう…

俺ホントの碇シンジじゃないしな

シンクロって確か親を求める気持ちで率が上がるんだよね

俺みたいな偽物でも上がるのかな？

母さんか…

俺の母さんはもう死んじゃってるしな…

いい思いではあんまりなかった…

「母さん…」

“ドクン”

なんだ今の？

“母さん”って言うのに反応したのか？

「シンクロ率、49・5%に上昇」

マヤさんが叫ぶ。

「シンジ君その調子よ。そのまま集中して頑張ってちょうだい」

その後約2時間実験は続いた。

シンクロ率は最高で60%まで上がった。

エントリープラグからでた俺にバケツが渡される。

それに胃に残ったLCLを吐き出す。

嫌悪感が身体中を走った。

これを毎日やるのか…

やだなあ…

てかよくチルドレンは耐えていたよな

ある意味尊敬するよ（笑）

「シンジ君、お疲れ様。」

リツコさんだ

「あつ、どうも」

「後で聞きたいこともあるから着替えたら私の部屋まで来てね」

俺はシャワーを浴び、着替えてリツコさんの部屋に向かった。

「シンジ君、早速だけどシンクロ率が急に上がったとき何を考えたの？」

まあ、そう聞かれるよね

変な風に答えるとマズイかな

けど前に司令室でエヴァの中に母さんが居るってことを聞いたんだ
つたな

それなら喋ってもいいな

「母さんのことですけど…」

「そう…、あの人……、碇司令から聞いているのね？」

今、あの人って言ったよな

そっかりツコさんってゲンドウの愛人だったんだよね

何か複雑だな（笑）

「はい」

「このデータから見るとシンクロ率を上げるにはユイさんのことを考えるのがいいよね。今後もそれを頭に入れといてちょうだい」

そのあとは簡単な健康診断や質問などが続く。

「もう帰っていいわよ」

そう言われた。

俺はリツコさんがゲンドウの愛人だと思い出した時からずっとリツコさんに

“母さんって呼ぶ準備は出来てますよ”

って言いたい衝動に駆られていた。

けど今後のリツコさんとの人間関係を円滑にしていく為には今日は

言わないことにする。

だがいつか絶対に言ってやる（笑）

そんな時のリツコさんの顔を見たいなあ（爆）

部屋を出る俺

今日は前と違いコンフォート17に帰る道を調べて来ている。

てか今聞いたんだけどね（笑）

電車に乗って、降りた駅から約10の距離に在るらしい。

そんな近かったのかとびっくりした。

ただ学校からだとして少し駅から遠く、バスならネルフに着くのが有る
と言っていた。

まあたくさんの職員がいるから電車やバスがあるのはあたりまえか

待てよ、ネルフって国連直属の非公開組織だよな…

ネルフ本部前とか言うバス停だったらウケルな（笑）

てか新劇場版だとビルとか至るところにネルフのマークが入ってた
からね

非公開組織じゃあないし（笑）

最後に分かんなかったらタクシーを使えばいいって言ってたな。

てか俺の給料いくらだよ！

人類の危機を救ってるのに3万とかだったらウケルな（爆）

後、綾波ってちゃんと給料もらってるのかな？

これも明日にでも聞いてみよう。

そして俺はコンフォート17に帰り、明日の弁当の下ごしらえをして寝ることにする。

まあいい夢を見れるわけはないな…

そこで意識は途切れた。

第12話 Toji Suzuhara(前書き)

いろいろコメントをしてくれた方ありがとうございます！まだまだお待ちしています(^o^)

第12話 Toji Suzuhara

今日も朝ごはんの用意をしてミサトさんを起こす。

髪もボサボサのまま起動してくる。

これはミサトさんのファンは見ちゃいけないな（笑）

一人で心のなかで大爆笑する

そして弁当を綾波の分も持ち登校した。

今日も病院に行くために早退かな

俺ってヤンキーだな（笑）
転校そうそうからね

学校につくと何人かが挨拶してきてくれた。

これも一応明るくしていたおかげかな

いい傾向だと思う。

挨拶してきてくれた中にはヒカリも混ざっていた

やっぱり洞木さんはいいやつなんだろうなあ

そんなこんなしている間に授業が始まった。

担任は昨日俺が早退したことを何も言わなかった。

ネルフの用事だと思ったのかな？

ホントは綾波に会いに行っただけなのにね（笑）

1時間目は国語で、昨日俺が綾波に習ったパソコンテクで版書を写す。

てかノートがパソコンなのに黒板っておかしくね？

まあ細かいことは置いとくことに決めた

意外にうまくパソコンが操れ綾波に凄く感謝する俺

2時間目に入ると老教師がセカンドインパクトについて語り始めた…

確かにこれは退屈だわ…

小学校の時の朝礼の校長の挨拶よりもウザいわ…（笑）

それもセカンドインパクトの原因違うし

まあ一般人には隠されてるからしょうがないっていえばそうなんだけどね…

その時パソコンの画面に新着メールが届いたと表示があった。

これはあのメールかな？

後ろを見ると女の子二人が手を振っていた

一応メールを見ると

“碓君があのだロボットのパイロットとゆーのはホント？ Y E S
o r N O ”

やっぱり…

俺は間髪入れずに“ N O ”と入れた。

するとすぐに

“ 知ってるんだから、 Y E S o r N O ”

ハハは…

じゃあ聞くなつてんだよ!!

確かネットでこのメールはケンスケがやってるんじゃないかっていう説があつたけどどうなのかな？

ケンスケを見してみる

あいつだ…

このメール出してるの

ニヤつきながらこつち見てるし…

じゃああの女の子は俺と目があつたから手を振っただけなのかな？

しょうがないので“Y e S”とキーボードに叩きこんだ！

『ええ〜!!!!!!』

教室が歓声に包まれる。

「静かにしてください！」

洞木さんが叫んだ。

「これでは授業になりませんね」

そのあとすぐに授業終了を告げるチャイムがなった。

「ちょうどいいようなのでこれで授業は終わりにします」

先生がいなくなった瞬間に何人もが俺の席にやってきた。

「どうやってパイロットに選ばれたの？」

クラスメートの一人が質問してきた。

「まあ、たまたまじゃない」

適当に答える。

「どっやって操縦してるの？」

「コントローラーだよ、プレステのやつ」

笑い声が起きる。

そして俺は嘘をつき続けた。

「碇君って学校の誇りよね」

女の子から歓声があがる。

それより嘘つきまくってからのケンスケの顔がマジでヤバイ…

こっちガン見してるし（笑）

多分質問の答えとか極秘事項だけど知ってるんだよな（笑）

諜報部頑張ってくれよ（爆）

さすがにこれ以上質問攻めには耐えられないので俺は早退を決意した。

「質問途中で悪いんだけど俺早退するね、何だかお腹の調子が悪いんだ」

「碇君、大丈夫？」

「たぶん、今朝目覚めのアイスクリームを3つ食べたせいかな（笑）」

大爆笑が起きる。

これなら何とか愉快的なキャラクターを演じられたかな。

お大事にと言われ、見送られた。

病院に着くとすぐさま綾波の病室に向かった。

ちなみに学校から剣崎さんに送ってもらったので今日は迷わなかった。

「はいっ、綾波お弁当だよ」

「ありがとう…」

といって食べ始めた。

最初は挨拶もしてくれなかったのでお礼をいってもらえとかなり嬉しい！！

他愛のない話しをしていたら綾波がこう言った。

「医師に頑張れば退院してもいいって言われたわ」

突然の話題チェンジに戸惑う

「そうなんだ、どうするの？」

「あと2、3日で全快するって言われたからそれから退院する」

「そうだね、それがいいよ」

正直、綾波が自分で入院し続けるって言うとは思わなかったな

原作だったら一刻も早く退院するって言いそうだもんね。

これを変化だと喜んでいいんじゃないかと思った。

それから少し話して明日も来ると約束し病室を後にした。

話が盛り上がったとまではいかないけど時折笑顔らしい物も見れた。

友好関係はオツケーかな？

俺はもう一つの大事な用事…

リッコさんに調べて貰った病室に移動する。

プレートには“鈴原ミドリ”と書かれていた。

ノックをした

『コンコン』

やや間があって

「どうぞ」

と男の声で返事があつた。

俺は扉を開け中に入りベットの脇の椅子に腰掛けている少年をみた。

ジャージを着た鈴原トウジだ…

「あんた、誰や？」

トウジが聞いてきた。

「碇シンジ、君と同じクラスに転校してきたんだ」

「さよか、それで転校生が何の用や？」

「お見舞い、言いくいんだけどあのロボットを操縦していたのは俺なんだ」

といって買っておいた花を渡す。

「なんやて！」

トウジは突然叫び俺につかみかった。

一発くらい殴られもしようがないかな……

俺は覚悟を決めて歯をくいしばった。

「お前のせいでミドリは怪我したんだ！、今度からはちゃんと下見て戦わんかい！」

いや……

下見て戦うとか普通に考えて無理でしょう

てかトウジがちゃんとミドリちゃんを連れていれば怪我しなかったんじゃないかな？

当然の疑問だが、怪我させたのは俺なので黙っておくことにする。

トウジが拳を振りかぶったとたん

「お兄ちゃんヤメテー」

と叫び声が聞こえトウジは殴るのを止めた。

ミドリちゃんだ……

「お兄ちゃんそれは違うよ」

「何やミドリ、起きてたんかい」

「お兄ちゃん……、碇さんは私を守ってくれたんだよ」

「何を言ってるんや、お前怪我しとるやないか」

「もし碇さんがあの怪獣を倒していなかったらどうなってると思う？、たぶん足の骨折だけじゃ済まなかったと思うよ」

偉い！！

どんだけ人間が出来てるだこの子は！

怪我させたやつを目の前にして感謝してるなんて普通言えることじゃないぜ

こんな妹ぜひ葛城家に来てほしい！

そして重労働の家事をして欲しい（笑）

「それなのに碇さんを殴ろうとして……、碇さん本当にすいません

でした。……ほらっ、お兄ちゃんも頭下げて」

ミドリちゃんがトウジをつつく。

「いいいいよ、ミドリちゃん。怪我させたのは俺だし、本当にゴメンね」

おれも頭を下げた。

「いえっ、碇さん本当に感謝してますから気にしないで下さい。」

「いやっ、悪いのは俺とネルフだからね。入院費は任してよ、お釣りが出るくらい搾り取ってくるから」

やっとミドリちゃんに笑顔が見えた。

今のあんまり面白いとこなかったと思うけどな。

「お父さんとおじいちゃんがネルフの職員なので入院費はネルフに出して貰ってるんです」

おっと

何かでかいこと堂々と言っちゃって恥ずかしい……

リッコさんにはどこの病室かを聞いただけだったからな……

「ははっ…、そうだったんだ」

「気持ちだけ受け取らせてもらいます。ありがとうございます」

「転校生！」

今まで黙っていたトウジが叫んだ。

「どついたりして悪かったな、妹が怪我してどうかってたんや。堪忍してくれ」

「いや、怪我させたの俺だからしょうがないよ、気にしてないから」

「それじゃあワシの気が治まらん、転校生一発ワシを殴ってくれ！それであいこや」

……

なんというか実直というかなんというか……

「いいよ、殴るとか」

「だめや、殴ってくれ」

「お兄ちゃん、碇さんが困ってるじゃない」

見かねたミドリちゃんが助け船を出してくれた。

「じゃあ友達になってくれないかな、まだ転校したばかりで友達いないんだよね」

トウジは少し考えて

「わかった、きょうからワシのことはトウジって呼んでくれや」

「俺もシンジって呼んでよ」

てかよく考えたら俺ってシンジじゃないし……

こっちの世界に来てからシンジ、シンジって呼ばれ続けたから普通にそう言っちゃったし

慣れって恐ろしいな

でもトウジと友達に成れたみたいだからよしとするかな

そのあと3人で話した。

「じゃあそろそろ帰るね。ミドリちゃんお大事に、トウジじゃあね」

「碇さん、今日は本当にありがとうございました」

「シンジ、たぶん明日は学校行けると思うからヨロシク頼むわ」

二人と別れを言い病室を後にした。

綾波も後3日ぐらいで退院だって言ってたし、トウジとも友達になれた。

後はケンスケとも仲良くなれるといいな

俺はやつとこの世界で 先のビジョンが見えてきた。

おそらく綾波が退院したら直ぐに第4の使徒のシャムシエルが来ると思う。

今のままでは俺はエヴァを上手く使うことが出来ない

訓練の必要性を痛感した。

原作ではトウジ・ケンスケを守りながらの相討ちの様な倒しかただった。

それはまた考える必要がある。

さあ訓練に行かなきゃいけない時間だ。

俺はネルフ本部に向かった。

第13話 第4使徒襲来 序（前書き）

ついに新劇場版見ました！！ 最初は劇場版の要素を入れないつもりだったのですが、皆さんからの要望も強かったので使徒とかの設定はアニメのままでチヨロチヨロと劇場版の要素を加えて行くことに決めました。ヨロシクお願いします。

第13話 第4使徒襲来 序

トウジの妹の病室を訪れてから3日が経ち、綾波は昨日無事に退院した。

トウジが学校に登校してきて直ぐにケンスケとも仲良くなることが出来て、クラスにも何とか馴染むことが出来たみたいだ。

まあ、エヴァに関する質問をしても俺がふざけてしか返さないからもう質問してくるやつはいなくなっただけだね（笑）

そんなことを考えていると教室に到着した。

「ちーっす！」

俺は元気よく挨拶してみた。

おはよー

や

ういーす

など思い思いの返事が帰ってきた。

けどこんなみんなに挨拶してるシンジなんて原作からは想像できないな

でもトウジやケンスケには挨拶してたかな

自分の席に向かうと隣にはすでに綾波が教室に来ていた。

「おはよー、綾波」

「おはよう、碇君」

綾波が挨拶を返してきた時急にクラスはシンとなった。

最初俺は何でみんな黙ったか分からなかったが、たぶんいつも話さない綾波がおはようって言ったからだと納得した。

別に周りのやつに言うこともないので

「どう怪我の具合は？」

綾波は骨折をしているので手にまだギプスを着けている。

といっても俺は毎日お見舞いに行っているので病状は知っている。

綾波は昨日見たテレビの話とかするタイプではないので話しのきっかけにこの事を選んだ。

「悪くはないわ。後2週間でギプスは外していいって許可が降りたわ」

「それは良かったね」

俺は微笑んだ。

「ええ、ありがとう」

綾波の頬が少し紅くなったような気がした。

そんなことより今お礼言つたよね

最近綾波のリアクションが増えるのが楽しくてしょうがない（笑）

「じゃあ俺はこれから寝るから何か有ったら起こしてね」

「わかったわ、おやすみなさい」

おやすみなさいとも言ってくれたよ（笑）

綾波にはこれまでの分も楽しく生きて貰いたいと思う

人間として……

人間……

そう

この言葉を思い出すと不快に成ってきた。

こんな風に接してくれる綾波は人間じゃなくて何だって言うんだ！

いつか綾波には代わりはいないってことを教えてみせる。

ダミープラントも破壊する。

しかし今のままではターミナルドグマには行くことが出来ない。

やはり加時さんに協力を仰ぐしかないと痛感した。

原作通り人間性に溢れた人物であればいいなあ

顔に直接机がこないように教科書を引きながら寝る準備をした。

さあおやすみと思った瞬間クラスの女子数人が話しかけてきた。

「碇君って綾波さんと知り合いなの？」

そうだよね……

誰とも喋らないやつが急に転校生と話し始めたら誰だって変に思うよね

「そうだよ、家が近いんだ。おやすみ」

こういう時は、多くを語らずだよね。

いつもの様に嘘をぶっこき俺は寝た。

しばらくして、身体を揺すられる感覚がして目が覚めた。

起こしてくれたのは綾波だった。

「碇君、お昼休みよ」

昼休み……

俺朝8時半に学校に来て、今は12時半……

4時間眠った（笑）

てか先生とか起こさなかったのかよ（笑）

「先生が起こそうとしていたけど、碇君全く起きなかったわ」

あつ、そうなのね……

とりあえずお昼なので綾波にお弁当を渡すことにした。

「起こしてくれてありがとう。はいっ、お弁当だよ」

そう言って蒼い袋に包まれたお弁当を渡した。

「蒼い……、ありがとう」

実は昨日綾波専用の蒼い弁当箱セット買ったんだよね

気に入ってくれるかな？

「綾波は蒼って感じだからいいかなって思ったんだけど、どうかな？」

「蒼って私の色？、うれしいわ」

どうやら気に入ってもらえたみたいでかなり嬉しい。

「シンジ、屋上行くで！、早くこいやっ」

トウジが大声で呼んでいる。

教室内なんだからもつと静かに呼んで欲しいよね（笑）

「じゃ綾波、俺行くね」

「ええ」

「食べ終わったら俺のバックに入れといてね」

「わかった、ありがとう」

何度もお礼いつてくれる綾波いいな。

そんなことを考えているとまた恒例の女子数人がやってきた。

「碇君、綾波さんとどういう関係なの？」

また聞いてきた。

でもいきなりお弁当わたしてるんだ無理はないよね

「えっと……、幼なじみ？」

また俺は適当に答える。

「さっき引越した家が近所って言ってたから幼なじみではないでしょ」

女子の一人に嘘を突っ込まれる。

参ったな……

何にも考えてなかったからな

どうしよう

「兄妹」

こんな単語が口から出てしまった。

「そうなの？、綾波さん」

「違うわ」

綾波が淡白に言った。

まだ他の人に対しては素っ気ないんだよな……

どうにか改善しなくてわ。

そんなことより俺が必死に嘘をついているのに綾波がそれを台無しにしちゃったよ（笑）

俺がまた口から出任せを言おうとした刹那、携帯がなった。

画面を見ると非常召集の文字が浮かんでいた。

「碇君っ」

「ああ、行こう」

俺たちは質問を無視し外に出た。

その後の教室がどうなったかはわからない。

シャムシエルって今日なのか……

シャムシエルってことは確かトウジとケンスケが外に出たやつだよな

俺は携帯を取り出しトウジに電話した。

屋上に行けないことを詫びて

「よく聞いて、もうすぐ避難警報が発令されるけど絶対に外へ出ちゃダメだよ」

「どないしたんやシンジ。警報中に外へ出るやつなんかおらへんや」

「オツケー、じゃあ頼むよ」

「そないなやつ見つけたら、ワシがパチきかましたるから安心して戦えや」

こっちは大丈夫そうだ。

同士討ちなんてマジで勘弁だからね（笑）

訓練で何とかエヴァを上手く使えるようになってきたけど、まだまだアスカレベルにまでは到達してないからこの使徒戦どうなるか不安だな……

「碇君、綾波さんこちらにお乗り下さい」

学校の外に剣崎さんが待っていた。

ちなみにちょっとフレンドリーになったので剣崎さんは俺のことを君ずけで呼ぶようになった。

後部座席に乗った俺は隣に座った綾波に話しかけられた。

「碇君、お弁当食べられなかったわ」

手にあの蒼いお弁当袋を持っている。

「しょうがないよ、また明日作るから、そしたら食べてよ」

綾波は首を横に振って

「後で食べる」

まるでただっ子みたいで楽しいな。

新たな発見だった

「わかった、じゃあもしも使徒が早く倒せたら夕食家に食べにこない？」

俺は関係の前進のための案を出してみた。

「うん、行くわ」

約束が出来た

使徒を早く倒さなくてわ（笑）

そして俺たちはネルフ本部に着いた。

第14話 第4使徒襲来 破（前書き）

いつも読んで下さる方お待たせしました。 夏はけっこう忙しくなりそうなので1週間に一回ぐらいの更新になりそうです……。すいません。 今回はコミックで言うと二巻だったことに気付きちよっと展開の遅さに驚きました。 しかしこの小説のコンセプトは細かいところまで補完なのでくだらないところまで細かくいきたいと思うのでよろしくお願いします。

第14話 第4使徒襲来 破

「総員、第1種戦闘配置。迎撃用意」

「迎撃用意、D級勤務者を避難させて」

「D級勤務者、避難完了。第3新東京市、戦闘形態に移行します」

自動的にシャッターが降り、道路にバリケードが作られて行く。

「中央ブロック、收容開始」

不要な高層ビルは地下に収納され、高層ビルには防御壁が覆っている。

逆にジオフロント天井へ姿を見せる、ビル群。

天井を覆っていく装甲シャッター。

「第6ブロック、閉鎖。全館收容完了」

「政府及び関係各省へ通達終了」

「迎撃システム、スタートします」

顔を出すミサイルランチャー。兵装ビルにミサイルが装填されている。

「目標は、真鶴上空に侵入しました」

発令所のメインモニターにアップになる使徒。

イカのような形状で光球が光っている。

シャムシエルである。

第3新東京市 某地下シエルター

学校の生徒たちをはじめ、大勢の市民が避難している。

遠くで聞こえる子供騒ぐ声や赤ちゃんの泣き声。

ケンスケは自分のカメラのモニターを見ていた。

どのチャンネルも画面は同じお花畑の静止画が流れている。

「チツ、まただ！」

「また文字だけなんか？」

トウジがケンスケに訪ねる。

「報道管制ってやつだよ。俺たち民間人には見せてくれないんだ。こんなビッグイベントだっていうのに」

画面を見るトウジ。

爆音の様な音と共に、微震が連続している。

ネルフ本部　発令所

「碇司令のいぬ間に、第4使徒襲来。意外と早かったわね」

「前は15年のブランク。今回はたったの2週間ですからね」

「こっちの都合はお構いなしか。女性に嫌われるタイプね」

山間部からの迎撃が続く。

使徒はAフィールドを展開し難なくミサイルを跳ね返していく。

「エヴァの出撃準備を」

ミサトが叫んだ。

第3新東京市 某地下シエルター

「なあトウジ、ちょっと話があるんだけど」

「なんや？」

「ちょっと、なっ」

「しゃーないな、委員長！」

ヒカリが振り向く。

「ワシら二人、便所やつ」

「早く行つてきなさいよ」

ヒカリが顔を赤らめる。

「なあトウジ、外へでるドアのロックを外すのを手伝ってくれないか？」

「何を言ってるんや。外は危険やないか」

「考えてみてよトウジ、一生に1度あるかないかのチャンスなんだから。行かないとずっと後悔するよ」

「ドンパチみて楽しいのはお前ぐらいや」

「頼むよトウジ」

「ダメや。ワシはシンジと外へ出ないって約束したんや。ワシらのせいでシンジの気がちったらどないするんや」

「頼むよ」

「絶対ダメや」

「分かったよ、俺お腹いたいから先戻ってよ」

「さよか、ゆつくりしたれや」

トウジは戻って行った。

こんなチャンスを逃す手はないな。

トウジの強力は得られなかったけど何とか一人で外へ出てみよう。

ケンスケは外へ向かうために停止してるエスカレーターをかけ上った。

「停止してるエスカレーターがこんなに辛いって思わなかったな…」

ドア付近のロックにパソコンを繋ぎ解除しようと試みると突然声をかけられた。

「相田ケンスケ君だね」

ギョツとして振り向くと黒いスーツの男が立っていた。

「ネルフの物だが外へ出るのは感心しないね」

「えっと…、これは…」

「避難警告が出ている時に故意に外に出ようとするのは犯罪だよ」

「……………」

男は携帯を取り出し電話を掛けた。

「葛城本部長ですか、剣崎です。シンジ君に例の件はオッケーだと伝えて貰えませんか？　ありがとうございます。でわ」

ケンスケの方を向いて

「シンジ君の頼みで見回ってたんだ。今回はシンジ君の友達ってことで目をつぶるけど、次はないよ。いいね？」

冷静な口調だが圧倒的な威圧感をケンスケは感じていた。

「はいっ……………」

これがケンスケの答えられる精一杯だった。

「シンジ君聞こえる？、今剣崎君から連絡があつて例の件はオツケ
ーだつてよ。いったい何の話し？」

そうか、これで余計な心配はしないで済みそうだね。

「男同士の秘密つてとこですかね（笑）」

「あらっシンちゃん、後でゆっくりと聞かせてもらうことになりそうね。」

「それよりも外へ出たら目標に向けてパレットライフルの一斉射撃よ。いいわね」

「ミサイルとかが効かないのにパレットライフルって効くんですか？、確か劣化ウラン弾ですよ、当たった瞬間煙幕になっちゃいませんか？」

「どうなのリツコ？」

リツコさんが手元の資料を見ながら言う。

「確かにシンジ君の言った通りの可能性が高いわね。しかし武器がパレットライフルとプログナイフしかないの。パレットライフルは威嚇に使うしかないかもしれないわね」

「シンジ君聞こえた？、地上に上がったら任意で威嚇に使って」

「わかりました」

「発進準備は？」

「パイロット及びエヴァに異常なし、進路オールグリーン行けます」

「エヴァンゲリオン発進」

号令と共に紫色の巨体が打ち上げられ、俺の身体にGが架かった。

「リフトオフ」

地上に出たエヴァの固定が外される

視界に使徒シャムシエルを捕らえた俺が感じた物は鈍い恐怖心だった。

怖い………

最初に乗った時には感じなかった感情が襲いかかる。

俺は何を考えたのか使徒に向かってパレットライフルを乱射した。

普通なら全弾命中しただろうが、オレンジ色の壁に塞がれ弾扮が煙幕になって使徒の姿を隠す。

「バカっ、自分で言ってたのに……」

煙の中から光のムチが飛んできた。

何とか反応できて避けられたがパレットライフルは真っ二つになった。

ここまで来てビビるなんて……

使徒の武器が光のムチだって知らなかったら身体が2つになってたよ（笑）

「シンジ君落ち着いて、後武器はプログナイフしかないわ」

エントリープラグ内の画面にミサトさんが現れて言った。

「すみません、もう落ち着きました。」

「指示をお願いします」

使徒の攻撃はさらに続いている。

「シンジ君よく聞いて、見ての通り使徒はムチの様なもので攻撃していて速さは音速を越えているわ。中距離での勝率は0よ。援護するから使徒の懐に入ってプログナイフでコアを狙って」

「わかりました、ミサトさん」

兵装ビルの射撃が始まる。

使徒の攻撃がビルに集中する

「シンジ君、今よっ！」

初号機は使徒の後ろに回った。

「くらえっ」

パンチを繰り出すがオレンジ色の壁に阻まれて使徒には届かない。

「ATフィールドか」

「フィールドを中和しながらコアを攻撃して」

「はいっ」

てか中和ってどうやるんだ？

やったことないからわかんないし…………

引き裂く感じかな？

ATフィールドに手を掛ける。

しかし壁に触るだけで中和している気配はない。

「ATフィールドを展開して干渉させて」

リツコさんが指示を出す。

そのATフィールドの出し方がわかんないんだっての。

シンジの真似をして言ってみた

「ATフィールド展開」

……………変化なし

出来ない…………

その刹那、腹部に鈍い衝撃が走った。

使徒のムチが初号機のお腹を貫通する

「ぐっ……………」

「シンジ君大丈夫？、フィールドバックを下げて」

少し痛みが少なくなった。

やっぱりこういう状態になったか…

早く倒さなきゃ身体が持たないよ…

「アンビリカルケーブル断線、内部電源に切り替わります。初号機活動限界まで後3分」

くそっ

まさか貫通したムチでケーブルを切られるとわ……

「ATフィールドを中和しない限り勝ち目はないわね」

リッコさんが言う。

時間が限られ腹は痛く焦っている俺はあることを思い出した。

確か誰かが「ATフィールドは心の壁」って言ってたよね

てことは“拒絶”がキーワードだよな

「……………ATフィールド展開」

シャムシエルの前のオレンジ色の壁が歪んだ。

「初号機からATフィールドを確認。使徒のATフィールドに干渉しています。活動限界まで後1分30秒」

「いけるわっ」

ミサトさんが叫んだ。

俺はすかさずフィールドの歪んだ場所をナイフで刺した。

すると切れ目ができ、空いた手で引き裂いた。

「使徒のATフィールド消滅。活動限界まで後1分」

いけるか？

そのまま右手で使徒の光球を突き刺す。

しかし使徒ももう一本のムチで応戦する。

一進一退の攻防。

俺はコアにプログナيفを突き立て続ける。

発令所の誰かが何かを言っているが何も耳に入っていない。

それがどのくらい続いたのだろうか。

使徒のコアの輝きが消え、まもなくエントリープラグ内も暗くなつた。

倒した………のかな？

原作の通りだったら倒したんだよな。

結局お腹を貫通されちゃったし……

マジで痛いよ（笑）

まあケンスケとトウジが出て来なかったただけましかな。

もし2人がいたら今の俺には倒せなかった可能性が高いね。

剣崎さんにはよくお礼を言っとかなきゃ。

真面目な話、今日の使徒戦、前回は気絶してたみたいだからはつきり言って初戦に近い。

最初は恐怖心で上手く動けなかったし、操縦も危なっかしかった。

まあ俺、ついこの前まで普通の高校生だったんだから当たり前だよ
ね（笑）

冗談抜きにエヴァの操縦は上手くないということがわかった。

ATフィールドも最後は展開出来たが訓練が必要だ。

次のラミエル戦は戦い方を考えなくてはならないと思う。

それくらいかな。

てかけっこうお腹が痛い……………

よく原作でシンジは耐えてたよな。

シンジって意外とすごいやつなのかもしれないな（笑）

それよりここから早くだしてくれよ

電源切れで何にも外が見れないし……………

俺が外に出れたのはそれから30分後だった

第14話 第4使徒襲来 破（後書き）

更新が遅くてすいませんでした。

第15話 使徒戦その後（前書き）

お待たせしました。今回は長めです。尊敬してるss 2nd
ring が更新されたってことで。この小説とはレベルが違います。皆さんも読んでみて下さい。

第15話 使徒戦その後

エヴァから降りた俺はネルフの病院で簡単な検査を受けた。

お腹の怪我は痣になっていたけれどたいしたことないということだった。

検査が終わり完全に解放されたのは9時を越えてしまった。

お腹すいたなあゝ

使徒を倒してすぐ検査だもんね。

ご飯くらい出してもバチは当たらないと思っただけだな（笑）

今日は何か出前取っちゃおうかな！

何てことを考えてエントランスに出ると見慣れた人影があった。

「綾波、待つてくれたの」

「ええ」

「ありがと。でもどうして？」

「碇君の家で食事するって言ってたから」

そうだった……

お腹刺されたりとかいろいろあって完全にわすれてたよ……

確か俺から誘ったんだよな…

「遅くなっちゃったけど、とりあえず行こうか」

「ええ」

俺たちは電車で街の方へ向かった。

綾波が食べれるもので何がつくれるかな？

野菜パスタぐらいなら材料有るかもしれない。

けどとりあえず買い物いかなきゃ

「買い物にスーパーに寄っていいかな？」

「構わないわ」

葛城家の近くの商店街は時間が遅いと言うこともあるかもしれないが、ほとんどの店が閉まっていた。

俺は使徒戦の直後ということもあり、スーパーが閉まっているかも

と不安に思っていた。

しかし幸運なことにその不安はきらびやかに光るスーパーのネオンにかき消された。

助かったけどさ第3新東京市の人はどんだけたくましいんだよ（笑）

普通自分の街が怪獣的な物に襲われたら店開けないでしょ。

そんなこんな考えながらもとりあえず食材を購入した。

コンフォート17に着くともう10時を回っていた。

相変わらずこのマンションは人の住んでる気配はまるでない。

部屋に到着すると早速料理に取りかかる。

「綾波はその辺に座って待っててよ」

俺は今でテレビでも見て待っててというつもりで言ったのだが、綾波はリビングの椅子に座りこっちをみて待っていた。

背中に視線を感じる……………

正直言ってかなり料理を作りにくい。

振り返ってみるとやっぱり綾波が俺の方をガン見していた。

視線が合うと綾波は軽く目を逸らす。

初めて見たその行動に俺は軽い衝撃と感動を感じずにはいられなかった。

もうちょっと見ていたかったがパスタが茹ですぎ一步手前だと気が付き現実に引き戻された。

多少アクシデントもあったが何とか料理を作ることができた。

「はいっ、どうぞ。夏野菜のパスタだよ」

といっても、この世界の日本はずっと夏だからただのパスタなんだけどね（笑）

「ありがとう」

この頃は普通にお礼を言うようになっていた。

まあ特に会話もあるわけではなく、俺が何か話題を振ってそれを綾波が簡単に答えるという形で食事は進んでいった。

しかし1度だけ綾波が俺に質問した。

「碇君……」

「どうしたの、食べれない物でもあった？」

「いいえ。……料理って楽しい？」

興味を持ってくれたのかな？

「ああ、楽しいよ。誰かにありがととかおいしいと言われると嬉しいしね」

「そう」

それでその話題は終わってしまったが何か新鮮で嬉しく感じて今日食事に誘って良かったと実感した。

食事も終わり、ふと時計を見ると11時を回っている。

さすがに帰しないとまずいね。

送っていかなきゃ。

「綾波、もうだいぶ遅いから帰ろつ。送っていくよ」

「わかったわ」

「今日は来てくれて嬉しかったよ」

「ありがと……、碇君」

ここから再開発地域の綾波の家までは30分はかかると思う。

おおよその場所は知っているがちゃんとした家の場所まではよく分からない。

今の俺の心配は送ったあと自分の家に帰ることが出来るのかということだった。

綾波の家の最寄り駅までは電車でそこからは歩いて20分ぐらいだそう。

最初の10分ぐらいはコンビニなどがあつたが、それを過ぎると時間のせいか再開発地域らしく人の気配がせずガランとしている印象だった。

「この辺に住んでて怖くないの？」

「いえ、怖いってどういうことか分からないわ」

なるほどね……

そうだな、怖いって気持ちがあつたらこの地域には住めないね。

俺だつたら勘弁してほしい感じだね。

綾波のマンションに着くとエレベーターに乗って4階をめざす。

このマンションも人の住んでる気配がしなかった。

部屋の前に着くと、壁には綾波と書いてある表札とポストにはダイレクトメールやチラシが入っていた。

こんなとこまでチラシを持って来るのか不思議だったが、どうでもいいと思ひ思考を中断させた。

とりあえず無事に綾波を家まで送り届けるといふ使命を果たした俺は帰宅の意を告げる。

「じゃあ綾波、俺帰るからね。また明日学校で。ていつても疲れるから明日起きなくて遅刻するかもね（笑）」

軽いジョークを言ったのに綾波はまるで無反応で、最近感情の変化に気付いたのだからどうやらご機嫌斜めみたいだ。

何でだろう。

ジョークが詰まんなかったのかな。

それとも俺が帰るって言ったからかな？

それだったら嬉しいんだけどね

「上がっていい？」

その瞬間、綾波の顔がはつきりと分かるくらいに変わった。

「どうぞ」

ドアを開ける。

鍵はかかってないみたいだ。

ちよつと戸惑いつつも俺はドアを潜る。

「お邪魔します」

平気で綾波は靴のまま玄関を越えて部屋の中に入っていく。

俺はどうしようかまよったが、“欧米かつ”というふざけた発想を首を振って消し靴のまま奥へ向かった。

なんだこれは……

部屋を見回し衝撃をうけた。

マンガやアニメで見るのと実際に見るのでは、全く全然違う。

アニメでは月の光りが差し込んだりとか綺麗に描いているがそんなもんじゃない。

剥き出しのコンクリート、ベットと小さなタンスが一つ。

使われた形跡があまりない台所、栄養剤が目に入る。

「何か飲む？」

綾波が聞いてきたが動揺していた俺は“ああ”とまるでゲンドウのような答えしか返せなかった。

壁には予備の制服が掛けてあり、それは他に服を持っていないことを物語っていた。

「はいっ」

ミネラルウォーターが入ったコップを渡し椅子をすすめてくれた。

無言の状態が続く。

こんなところに住んでいては感情がどうこうという以前に何も感じない人になってしまふのではないかと恐怖さえ抱いた。

「ここに住んでてどう？」

沈黙を破ったおれ。

突然の質問に綾波はきょとんとしている。

俺は言い方を変えた。

「この暮らしは楽しい」

「楽しいってよく分からないけど、何も感じないわ」

まあそうだろうね……

ここに住んでて楽しいと感じたら異常な人が完全に人を拒絶する人のどちらかだろうね。

「ここでの暮らしは満足している？」

少し考えている様子で

「家は帰って寝たりするだけだから考えたことないわ」

俺は言葉を選びながら

「この前お弁当食べてくれた時、綾波は楽しいって言うてくれたじゃない。覚えてる。」

「ええ」

「まだ綾波の知らない楽しいことがたくさんあると思うんだ。ただどここじゃそういう気持ちにはならないと思うんだ。そう思わない？」

「たぶん……」

首を軽く傾げながら言った。

「引っ越そう、綾波」

俺は自分の考えを伝えた。

それに対する綾波の答えは意外なものだった。

「わかったわ、でも許可がないと」

まさかの即オッケーの返事に戸惑いつつも

「許可は俺がとるよ」

携帯を取り出しミサトさんの番号をプッシュする。

「シンちゃんどうさたのこんな時間に？」

確かに常識はずれの時間だが使徒戦の処理で起きていると予想して電話をかけた。

「あのミサトさん、綾波を引越しさせたいんですが」

「レイ？、突然どうして？」

「ミサトさん、綾波の部屋のなか見たことありますか？」

綾波がこちらを不安そうに見ている。

もしかしたら強い口調になっていたのかもしれない。

「保護者は碇司令になっているから住所は知っているけど見たことはないわ」

「今から写真送りますから確認してください」

電話を一旦切った。

「部屋の中の写真撮らせてね」

綾波が頷く。

何枚か写真を撮りミサトさんに送った。

すぐにミサトさんから着信が入る。

「見たわ、確かにこれはよくないわね。引越しの申請は私に任せてでも引越し先は何処にする？」

「俺たちの隣はどうですか？、空いてますよね？」

「わかったわ、でも3LDKよ。ひとりで住むにはちょっと広すぎない？」

「広すぎたって別にいいじゃないですか。ミサトさんだってそこにひとりで住もうとしてましたよね」

「それもそうね、こっちは任しておいて。でも司令は帰っちゃったから申請は明日になると思うわよ」

「分かりました、ミサトさん」

「それはそうと、写真を送ってきたってことはシンちゃんレイの部屋にいるの？いくらレイが魅力的だからっていつて襲っちゃダメよ」

「そんなことしませんよ、なに言ってるんですか。ミサトさんお酒飲んでるんじゃないですか？」

「まあちよつちね（笑）、冗談は抜きにしてもう遅い時間だから迎えを送るわ。レイも泊めていいわよ、どうせ連れていくでしょ」

「ありがとうございます、明日お願いします」

「ええ、ただ司令が渋るかもしれないわね。」

「その可能性はあると思います、その時は俺が司令室に乗り込んで認めさせてみせますよ」

「ふふつ、シンちゃん熱いわね。私も頑張ってみるから今日のところはレイを連れて帰ってね。襲っちゃダメよん」

何回も言わなくてもわかつとるつちゅーの！

「はいはい、分かりましたミサトさん。迎えを送ってくれたんですか？」

「後10分くらいで着くはずよ。私は今日帰れないからレイは私の部屋にでも寝かせてあげてね」

あの部屋……

寝れる場所あるのか……

「寝れる場所ありますか？」

「失礼ねシンちゃん、ちょっと布団にビールかかってるかもしれないけどね」

笑いながら言っている。

完全に出来上がってるようだ。

「まあその辺はシンちゃんに任せるわ、じゃあマンションの下で待っててね」

「ありがとうございました。じゃあまた明日」

「おやすみ」

電話を切って綾波に話しかけた。

「すぐには引越し出来ないから、今日は俺の家に泊まってよ。引越し先はうちの隣で構わないかな？」

「ええ、問題はないわ」

「前から思ってたんだけどさ、俺ら友達だよね？」

「……………」

「友達はさ、問題ないとか言わないんだよ。わかったとかオツケーとか何か軽い感じで言うんだよ」

「……………」

「まあ今後、段々ね。とりあえず今日泊まる用意をしてね。下に迎えが来るって」

「……………わかった」

綾波の変化を嬉しく思いながら用意をする姿を見ていた。

「用意出来たわ」

「ああ、じゃあ行こうか。もう迎えが来てると思うよ」

「ええ、行きましょう」

下へ着くとすでに車が来ていて横には剣崎さんが立っていた。

「碇君、綾波さんどうぞ乗って下さい」

後部座席に乗る俺たち

「こんな時間にすみません」

「いえ、仕事ですし、もし碇君たちに何かあったら人類が滅びちゃいますからね」

ちよつとフランクになってきた剣崎さんが笑って言った。

ついでに気になっていたことを聞いてみる。

「剣崎さん、いつも呼んだら来てくれますけどちゃんと寝てますか？」

これも笑いながら

「うーん、4時間はねてますかね。私は碇君付きなので、碇君が早く家にかえると私も早く休めますね」

「かたじけないです」

俺たちは笑いながらコンフォート17に向かった。

剣崎さんと別れた俺と綾波は家の中に入った。

ミサトさんの部屋を見た俺は一つ問題が浮上した。

散乱するビール缶に服。

敷きっぱなしの布団にはビールのシミがついていて何か臭い。

やっぱここじゃ綾波は寝かせらんないな……

ちなみに原作で新しいシンジの部屋になっていた小さめの部屋は、現在は物置になっていて汚くて使えない。

かといってリビングに寝かせる訳には行かないしな……

後は……

……俺の部屋??

さすがにそれはマズイっしょ

ああ、でも俺がリビングで寝ればいいのか

今日はそれでいいか

「綾波っ」

ダイニングに座っている綾波が顔をこっちに向けた

「綾波の寝る場所なんだけど、ちょっとミサトさんの部屋汚いから俺の部屋でいいかな?、俺はリビングで寝るからそれで問題ない?」

「

意地悪く“問題ない”って言葉を使ってみた。

どう反応するかな？

そもそも問題ないって確実にゲンドウの影響だよな

そんなの早く直さなきゃね

“全てシナリオ通りだ”とか綾波が言ったらショックだからね（笑）

「問題……、いい」

ふふふ、それでいいんだよ

「じゃあ今日はそれでね。部屋はそこを入った左で、多分汚くはないと思うよ。」

綾波が頷く。

「シャワーは自由に使って、タオルはそこね。俺はもう限界だから寝るわ。冷蔵庫の中の飲み物とか自由にね。オツケー？」

「ええ」

オツケーって言うてくれることを期待してたんだけどな（笑）

「じゃあおやすみ」

「おやすみなさい」

俺はリビングのソファに倒れこむ。

予備の布団が何処かにあるらしいけどそんなの出す気力はない。

なんてたって今日使徒倒したばっかだよ俺（笑）

疲れには勝てず俺は夢の世界に旅を始めた

第15話 使徒戦その後（後書き）

カヲル君ループ説が話題になっていると思いますが僕もどう意見です。エヴァ知識の高い人と話して教えていたのですが、原作のアスカの性格をマリが受け継いでいてアスカの性格が丸くなった気がします。加持さんの存在の有無が影響したと考えられます。

16 第4使徒戦 レイssi de 序（前書き）

アイディア募集中です

16 第4使徒戦 レイ side 序

不思議な気持ち

あの人とは全然違う……

あの人の子供なのに……

退院をして初めて学校へ行った日に碇君と挨拶をした。

初めてした学校で挨拶

そして彼は直ぐに眠ってしまった。

正確にはクラスメートの質問に答えてから眠った。

隣にいた私に聞こえた内容は、私と碇君の関係だった。

私と碇君の関係はなんだろう。

エヴァンゲリオンの初号機と零号機のパイロット？

それとも学校のクラスメート？

それとも……

彼は質問に兄妹と答えていた。

とっさに違つと私は答えた。

何故だろう

別にいつものように答えなくても良かったのかもしれない。

でも私は答えた………

もしかしたら碇君に“絆”を私は求めているのかもしれない。

その後私は碇君にお弁当をもらった。

以前に病院でもらつたお弁当はおいしかった。

普段は栄養剤を飲んでいる。

それは赤木博士が料理は栄養を摂取するためだけのものだと言っていたから。

しかし碇君は食事は楽しいということを教えてくれた。

碇君のお弁当を食べたときおいしいと感じ今までにはない気持ちになった。

それが楽しいという気持ちだと教えてくれた。

非常招集がかかり学校では食べられなかったが、碇君が使徒を倒した後に食べた。

ちょっと冷たかったけどおいしかった………

エヴァに乗る前碇君は食事に誘ってくれた。

嬉しかったのだと思う。

あの人以外に初めて感じた気持ち。

碇君にしか言ったことのない“ありがとう”の感謝の言葉。

碇君が使徒と戦ってるのを私は発令所で見ていた。

初号機が使徒に腹部を貫かれる。

その時私は息が出来ない様な感じがした。

碇君のうめき声がスピーカー越しに発令所にこだまする。

その声に反応してなぜだか分からないけど私の胸もどんどん苦しくなった。

初号機は使徒のＡＴフィールドを中和するのに戸惑っていてその間も使徒の攻撃は容赦なく続いた。

私はずっと自分の手を握りしめていた。

何とか碇君はＡＴフィールドを中和しコアにナイフを突き立て使徒を殲滅することに成功した。

嬉しかったのだと思う。

私の手の中は汗でぐっしりと濡れていた。

今までそんなことは一度もなかったのに………

碇君は食べなくていいと言っていたけど私は作ってくれたお弁当を食べた。

やっぱりおいしかった。

私は碇君を求めている？

わからない……………

気がつくと私はエントランスで碇君を待っていた。

一緒に食事をするために……………

どれだけ時間が経っただろうか

碇君歩いてきて、意外そうに私の顔を見て言った

「綾波待つてくれたの？」

少し会話をして碇君の家に行くことになった。

途中で買い物をするというのでスーパーに着いていった。

初めて見る他人の買い物。

食材を選んでい碇君は真剣に見えた。

私は普段、買い物と言ってもミネラルウォーターぐらいしか買わな

い。

栄養剤はネルフが支給してくれるから。

買い物が終わりに碇君の家に着いた。

私は碇君が料理を作っているのをずっと見ていた。

真剣に料理を作る碇君。

途中振り返って視線があつたが私はなぜか目を逸らしてしまった。

料理が出来上がり私の前に持ってきてくれる。

「はいっ、夏野菜のパスタだよ」

笑顔でそう言ってくれた。

「ありがとう」

感謝の言葉

今まで使ったことはなかったけれど碇君に対しては何回も使っている。

あの人にも使ったことはないのに……

碇君がいろんな話を話してくれる。

でも私の耳にはあまり入ってこない。

ずっと気になっていた事があった。

碇君は私にお弁当や料理を作ってくれる。

でもなぜ？

私はそれが嬉しいんだと思う。

しかしそれが碇君の負担になっていたら悪い。

料理を作ってくれるのを見ていた時そう感じた。

でも彼は真剣にそして楽しそうに作ってくれた。

私はひとつ彼に質問してみた。

「碇君」

「何、綾波？。何か食べれないものでもあった？」

碇君は私のことを気遣ってくれる。

「いいえ。料理って楽しい？」

私は聞いてみた。

少し考える素振りをみせてから

「楽しいよ。誰かにおいしいって言うてもらえると嬉しいしね」

彼の負担にはなっていないようで良かった。

私は心が暖かい何かで覆われていくような気持ちになった。

「そう」

その余韻に浸りながら私はそう答えた。

私は作った事がないけれど料理というのはお互いに暖かさを伝えられる物なのかもしれない。

それができる碇君はすごいと思う。

私の料理に対する考え方は今日、劇的に変わった。

食事が終わり帰る時間になった。

碇君が私を家まで送ってくれるという。

最寄り駅から私の家まで20分ぐらい。

10分歩くと凄く人が少なくなる。

そして碇君はこう言った。

「この辺に住んでて怖くないの？」

怖い……

そんなことは一度も思ったことがない。

唯一怖いと思ったのは

あの人に嫌われることだった。

そう……

今までは……

第4使徒戦 *Leiside* 破（前書き）

アイデアや感想には必ず返信コメント出しているので評価ページ
を見てください！

第4使徒戦 レイ side 破

「怖いってというのがどういうことかわからないわ」

初めて碇君に嘘をついた…………

碇君には“あの人に嫌われるのが前は怖かった”と言ってはいけな
い気がした。

しかしいつからだろう…………

あの人に嫌われるのが怖いと感じなくなったのは。

今は碇君に嫌われるのが怖いのかもしれない…………

部屋のドアの前まで送って貰うと碇君は私に帰ると言った。

まだ何か言っていたが“帰る”という言葉が私に突き刺さり後は何
も聞こえなかった。

碇君のことを考えると胸が苦しくなる。

そんな私に“帰る”という言葉は余りにも重い言葉だった。

その状態のまましばらくすると碇君が

「上がっていいかな？」

と言った。

私は嬉しかった。

すぐにドアを開けて彼を迎え入れた。

部屋に入った碇君は中を見回していた。

私は碇君にミネラルウォーターを渡す。

その時も彼はずっと部屋の中を黙って見続けていた。

しばらくすると碇君が沈黙を破った。

「この部屋に住んでどう？」

唐突の質問に私は何も答えられなかった。

「この暮らしは楽しい？」

楽しい……

「楽しいとかよくわからないわ」

碇君は少し間をおいて

「この暮らしに満足している？」

「家は帰って寝たりするだけだから、そんなこと考えたことないわ」

そう……

私はエヴァに乗るだけ……

そんなことは一度も思ったことはない。

「綾波さあ、この前お弁当食べた時楽しいって言ってくれたじゃん。覚えてる？」

あれが“楽しい”って気持ちならそうなのかもしれない。

嫌じゃなかった。

むしろ好ましいものだったかもしれない。

「ええ」

「まだ綾波の知らない気持ちがいっぱい有ると思うんだ。けどこじやそういう気持ちは分らないと思う。そう思わない？」

私の知らない気持ち……………

それは碇君が教えてくれた心が暖かくなるような気持ちなのかもしれない。

それを私は体感することができるの？

彼の言ってることはいつも正しいからそうなのかもしれない。

「たぶん……………」

「引っ越そう綾波」

碇君は言った。

力強く。

引っ越し……………

そんなこと考えたことなかった。

いや

考えないようにしていたのかもしれない。

私はエヴァに乗るだけの存在だから………

そして私はエヴァに乗ることで絆を求めている

碇君と会ったことではっきりとわかった。

私は人との繋がりを求めていることを

「わかったわ。でも許可がないと」

そう

私は独りでは何にも出来ない

あの人に繋がれているだけの無力な存在だから

「許可なら俺が取るよ」

そう言って携帯を取り出しかけ始めた。

話の断片を聞くとどうやら葛城一尉に電話をかけたようだ。

途中、碇君は私に部屋の写真を撮っていいか尋ねた。

それを使って葛城一尉に引越しの必要性を訴える様だ。

やはりこの部屋は普通ではないのかもしれない。

そんなこと意識したこともないし、碇君に言われるまで考えたこともなかった。

そんな私が変わることが出来るの？

「すぐには引越し出来ないみたいだから今日は俺の家に泊まってよ。引越し先は俺の家の隣で構わないかな？」

碇君の家の隣……

どうなものなんだろう

いろんな気持ち

決して嫌ではない気持ちが私の中から込み上がって来るのを感じる。

「問題ないわ」

碇君の少し怪訝そうな表情をする。

「あのさ綾波、俺達友達だよね？ 友達はさ、問題ないとか言わないんだよ。わかったとかオツケーとか軽い感じでいいんだ。わかった？」

彼は私に友達だと言った。

友達……

言われたことは初めてだしもちろん私が使ったこともない。

悪くわない…………

むしろ嬉しいのかもしれない。

新たな絆なのかもしれないがよくはわからない

「……………わかった」

碇君がにっこりと微笑んだ。

「迎えがくるっていうから泊まる用意をしてね」

用意をし下へ行くと前にも送ってもらったことがある剣崎というネルフ人が待っていて、碇君の家に送ってくれた。

部屋に着くと碇君が部屋の中を見回り始めた。

ここが碇君の家…………

私の家とは違う暖かい感じがする。

「綾波、ミサトさんの部屋は寝れる状態ではないから今日は俺の部屋で寝てよ。問題ないかな？」

碇君の部屋？

「問題………いい」

彼は私に友達と言ってくれた。

友達通しはそんな言葉を使わないことも教えてくれた。

それに応えなくては

表情をみると笑っている様だった。

「じゃあ今日はそれでね。部屋はそこを入った左ね、たぶん汚くはないと思うよ」

私は頷いた。

「シャワーは自由に使って、タオルはそこにあるよ。俺は限界だから寝るわ。冷蔵庫のなかの飲み物は自由にしてね。オッケー」

「ええ」

「じゃあおやすみ」

「おやすみなさい」

そう言つて碇君はソファーに倒れ込んで寝てしまった。

私は言われたようにシャワーを浴びた。

そして持つてきた代えの下着に履き替える。

碇君が寝るために暗くした室内の冷蔵庫を開けた。

コップによく冷えたお茶を注ぎ、それを一気に飲み干す。

シャワーで温まった体が急速に冷えていく。

リビングの碇君のところに行つた。

規則正しい寝息が室内に響いく。

窓から入ってくる月明かりでぼんやりと碇君の顔が見える

今日を思い返すと劇的な日だった。

碇君と会ったことがその始まりだったことは言うまでもない。

彼の作ったお弁当や料理を食べたことだって、今まで考えたこともない引越しを決めたことだって……

今まであの人からは感じなかった気持ちをたくさん碇君からは教えてもらった。

どれも嫌じゃない

しかし私はそれを感じていいのかわからない……

だって私は碇君とは違う

“ヒト” じゃないもの……

言われた通り廊下の左の部屋に入る。

扉には“シンちゃんの部屋”と書かれているボードが掛かっていた。

中に入ると私はベッドに倒れ込む。

今日はいろんな事が有りすぎた。

寝るために目をつぶった。

視覚が奪われ気付いた。

“ 碇君の匂いがする ”

碇君の事を考えると胸が熱くなる。

その暖かさに包まれて私は眠りについた。

第18話 引越し 序（前書き）

更新頑張ります！

第18話 引越し 序

朝目覚めると首に軽い違和感があった。

軽く寝違えたのかもしれない。

てか何で床に寝てるんだ??

よく昨日の事を思い出すとソファーに寝たことは覚えている。

どうやら見事に落下したみたいだ。

落下しても起きないんだな、俺って（笑）

顔を洗い、シャワーをあびることにする。

洗面所に備え付けられた鏡に映った自分の姿を見ると制服を着ていることに気付いた。

制服のまま寝ちゃったんだな（笑）

ズボン完全にシワに成ってるし……………

着替えがある部屋には綾波が寝ているのを思い出した。

もう起きてるかな？

時刻を見ると時計の針は7時を指していた。

昨日かなり遅くまで起きてたからまだ寝てるかも。

とりあえず着替えがないと困るので部屋の前まできた。

「綾波、起きてる？ 着替え欲しいから開けるよ」

返事はない。

しょうがないのもう一度声をかけて開けることにした。

「綾波入るよ」

返事がないがそつと扉を開けた。

ベットの上では下着姿の綾波が規則正しい寝息をたてて眠っていた。

「部屋着買わなきゃ不味いね」

綾波が服を持っていない事を引越しかりに気をとられていたので完全に忘れていた。

多分今日は起きれないだろうから学校サボって綾波の服を買いに行ってもいいかもね。

俺みたいにジーンズにTシャツって訳にいかないしね。

とりあえず今はシャワーを浴びないとね。

「碇君……………」

突然声をかけられた。

「おはよう綾波、起こしちゃったかな？ 着替え取りに来ただけど、昨日遅かったしまだ寝てていいんだよ」

綾波はまだ眠かったようで

「わかった」

と言ってまたベットに横になった。

てか綾波あんな格好なのに全然動じないな

どういう教育をしたんだよあのヒゲわ（笑）

冗談はそのくらいにしておいてシャワーを浴びた。

熱目のお湯を浴びたら生き返る様な気分がした。

時間も学校をサボればあるようなので浴槽に浸かることにした。

命の洗濯とはこの事かもしれない（笑）

風呂から出て冷たいお茶を一気に飲む。

流しに別のコップがあつたので、もしかして綾波も同じ行動をしていたかもしれないと思うと少し笑える。

落ち着いたので遅くなってしまったが朝食の支度を始めた。

昨日買ってきた材料の残りでサラダとハムエッグを作りトーストを焼く。

時計に目をやると9時半になっていたのでこの時間まで眠っている

綾波は凄く疲れていたのだろう。

朝食ができたので綾波を起こすことにする。

「綾波起きて、ご飯出来たよ」

もともと寝起きは悪くないんだろうか、ムクツとベットから起き出した。

「おはよう、朝ごはん出来たから顔と手を洗ってきてね。あとこれを着て」

俺はＴシャツを着るように綾波に渡した。

その格好でうろつかれると困るしね（笑）

けっこう大きめのＴシャツだったのでワンピースのようになった。

二人でテーブルに着き食べ始める。

今後隣に引越して来たとして多分食事はこの家で食べて貰うことになると思う。

その事に関して聞いておかなきゃいけないことがある。

「綾波さ、聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

「ええ」

「食事のことなんだけどね、綾波は肉食べれないんだよね？」

コクンと頷く。

「魚はどうか？」

「食べたことないからわからないわ」

「そっか…、魚は今度試してみるってことでね。そういえば、いつ頃から肉ダメになったの？」

「だいたい予想はしていた。」

「多分ゲンドウ関係ではないかな。」

「碇司令と食事した時にしてくれた肉が…みたいな味がしたから………」

「どうやらあんまりいい思い出ではなかったみたいだ。」

「おそらくステーキだよな。」

まさかレアとかかな？

「それって肉汁のことかな？」

「そう。ＬＣＬの味がした」

肉初めてのやつにゲンドウは何を食わしてるんだか……

「徐々にでいいんだけど、肉を食べてみない？ 綾波が食べたやつてけっこう特殊な食べ方だと思うからいつか試してみようよ」

綾波は少しの間考えてから

「いつか………」

と最初の印象は取れないみたいだった。

そんな感じで食事していると俺の携帯電話が鳴った。

着信画面にはミサトさんの名前が表示されている。

「もしもしシンちゃん？ レイの引越しの件だけど、司令の許可が降りたから今日にでも出来るわよ。正直、司令があっさり許可すると思ってなかったから意外だったわ（笑）」

「ありがとうございました、ミサトさん。父さんは何か言ってますし

「たか？」

「“好きにしろ”だって。隣の副司令の方が“いいのか、碇”とか言って慌てたわ。私それ見て吹き出しちゃって副司令に睨まれたのよ（笑）」

「それはそれは、本当にありがとうございます。」

「いいのいいの、愛しのレイの為でしょ（笑）　なんだかんだ言つて私はチルドレンの上司だからね、より良い環境に住んでもらわないと私も困るのよ。」

「部屋は隣でいいんですか？」

「好きにしろって言ってたから隣で申請しといたわ。そうだ、忘れるとこだったけど使徒戦の時に剣崎君と何を頼んだの？　てかあなたたち意外と仲いいのね（笑）」

「あはは、友達の中に軍事オタクがいますってエヴァ見に外へ出そうなやつだったんで危ないから見張り頼んだんですよ。」

「そういう事だったのね。」

「そうしたら案の定捕まえてくれたみたいです。剣崎さんにはきつく注意してくれと頼んだんですよ（笑）」

「確かに外へ出たらちよつち冗談ではすまなくなるわね。それはそうとこれから使徒の検証に行くのだけどあなたたちも来る？　興味あるでしょ、どんな敵と戦っているかとか。」

「でも学校は？」

もうサボるって決めたが一応聞いてみた。

「どうせ今日は行く気ないでしょ。レイも家にいるし、予想はつくわ。一緒にいらっしやいよ」

どうやらミサトさんの方が2・3枚上手のようだった。

「分かりました。行きます」

「オッケー、迎えを出すわ。まあ剣崎君だけど（笑） 30分後ぐらいに着くと思うから支度して、じゃあまたあとでね」

と言って電話が切れた。

俺は綾波の方を向き

「引越し許可が降りたんだって、今日にでも引越せるっていつから後で買い物行かない？」

「わかった」

綾波が意外そうな顔で頷く。

そりゃそうだよな。

こんな簡単に許可が降りるとは思ってなかったしね。

「後ね、第4使徒の検証をするから来いって言ってたよ。それ終わったら引越しの支度をしよう」

「ええ、わかったわ」

綾波は学校の制服に俺はTシャツとジーパンに着替えて、一緒に迎えに来た剣崎さんに送ってもらった。

そこにはたくさんのネルフ職員が作業していた。

第19話 引越し 破（前書き）

話が4つになりそうなんです、Qの次のタイトルをどうしようか迷っています。アイディアください！

第19話 引越し 破

「これが使徒……………」

でかい使徒をみて俺は思わず声をあげた。

「そうよ、これが私達の敵。コア以外ほとんど原型を留めている、まさに理想的なサンプルだわ。シンジ君のおかげね」

「何かわかったことはあるの？」

ミサトさんが言った。

「これを見てちょうだい」

リツコさんが画面を指さす。

しかし何が表示されているのかは素人の俺にはよく分からない。

「何なの、これは？」

ミサトさんも分からなかったみたいだ。

「解析不可能を示すコードナンバー」

「何も分からなかったってことなの？」

「マヤ」

マヤさんがパソコンを操作すると画面が変化した。

「これってまさか……………」

「そう。構成物質の違いがあっても、信号の配置と座標は人間のそれと酷似しているわ。99・89%ね」

ミサトさんとリツコさんがしゃべっている。

綾波は少し離れたところでその話を聞いていた。

その表情からは感情を読み取ることは出来なかった。

部屋の外を覗くとゲンドウと冬月が使徒の前に立っている。

ゲンドウは手袋を外しコアを触り始めた。

その手には火傷のあとが刻まれている。

それを見ていると後ろから軽く袖を引っ張られた。

振り返ると不安そうな顔をした綾波が立っていた。

引越しのことが不安なのだろうか。

それともゲンドウがあっさりと認めたことが引っ掛かっているのだろうか。

「なんにも心配いらいよ」

出来る限り優しい口調で言った。

「ちょっと話してくるから、終わったら買い物行こう」

綾波が頷いた。

俺は階段を降り、ゲンドウの方へ向かった行った。

上からはこちらを綾波がじっとみている。

「シンジか？」

ゲンドウがコアの方を向いたまま話した。

「そつだよ、話たいことがあるんだけど」

ゲンドウはこちらを向いて

「なんだ」

と普段通りの口調で言った。

「綾波の引越しだけださ……、ホントにいいの？」

「……………好きにしろ」

「一言で話したいこと終わったし……」（笑）

「ありがとう、今日引越するね。じゃあまた後で」

「シンジ」

「何、父さん？」

「お前が何を考えているのかは分からないが、自分の信念は曲げ
るな。私も曲げる気はない」

ゲンドウが俺にこう言った。

何を言いたいんだ。

少なくとも俺が原作を読んで知っているゲンドウは、自分が碇ユイ
に会ったためにシンジを利用した自己中な人物だったはずだ。

こんな言葉を掛けてくるとは思えない。

これも俺が碇シンジになってしまったことに由来する出来事なのか？

「じゃあな、シンジ。…今回はよくやったな」

と言い残し冬月と共に去っていった。

俺の中に一つ思った。

この世界のゲンドウは原作とは違っている……

これは予想だが原作でシンジを褒めたのは、シンジを次の使徒戦で発奮させる狙いがあったのだと思う。

サードインパクトを起こし人類補完計画を発動させる際、媒体となる初号機のパイロットであるシンジの心が壊れていなければいけないという大前提があった。

原作のゲンドウはそのためいろいろと策を打っていた。

それは疑う余地もない。特にダミープラグのところはかなりあからさまだっただろう。

親友を自分の手で、といってもダミープラグだがで追い込ませるというのはかなりシンジには酷だったはずだ。

しかし今回のシンジ、俺のことだがはっきり言って原作で見たようになつじうじした態度やキョドっていたりなどしたつもりはない。

ここでシンジを褒めてもゲンドウには何のメリットもないと思われる。

それどころか計画の障害にしかないかもしれない。

そつという訳で今回のゲンドウは原作とは違うのではないかという予

想が生まれたわけだ。

実際にはまだ決めつけるには時期尚早かもしれないが原作には見られない行動に俺はすごく興味を引かれた。

だがそれが俺にとってプラスに働くのかマイナス要因になるのかはまだ分からない。

しかし今はそんなことを考えている場合ではない。

第5の使徒ラミエル……

これをどう倒すかが1番の問題である。

俺が何も行動を起こさなければ原作通り“ヤシマ作戦”になる可能性が大きい。

確かヤシマ作戦の勝率は8・9%だった筈だ。もしかしたら8・7%だったかもしれないが、いずれにしろかなり低いことには変わらない。

本当にその作戦でいいのか？

原作通りだと最初に初号機は陽電子砲を一発食らってしまう。

最低でもそれは避けなくてはいけない。

痛いのはイヤだしね（笑）

俺の記憶が正しければ、零号機の再起動実験が終わった時にラミエルが現れたと思う。

リツコさんに再起動実験の日時を聞いておいた方がいい。

ふと上を向くと綾波と目があった。

もしかしたらずっとこちらを見つめていたのかもしれない。

俺は階段を上がった。

「引越してもオツケーだつてよ」

「うん」

少し嬉しそうな顔をしてくれた。

「まだリツコさん中にいる？」

「ええ、葛城一尉と一緒に中にいるわ」

俺は中に入りミサトさんに話し掛けた。

「あの、一通り見たんでもう帰っていいですか？ 綾波を引越しの準備をしたいんですけど」

「あらっ、レイを引越しさせるの？」

リツコさん面白そうに言った。

ホントにこの人は何を考えているのかが分からない……………

「そうよ、書類回したじゃない」

ミサトさんが代わりに答えた。

「私ずっとこっちにいたから書類見てないのよ。それよりよく司令が許可したわね」

「そうなのよ、私もそう思ったわ。シンちゃんの愛の力かもね（笑）」

「ふふっ」

リツコさんが不敵に笑った。

リツコさんも綾波の出生の秘密を知っている人の内の一人だ。

しかも綾波と長く関わっているのだから色々と思うことがあるのだろっつ。

「いいわっ、行って。レイに色々と買ってあげなさい！」

沈黙をミサトさんが破った。

「ありがとっございます。ところでカードっていくらまで使えるん

ですか？　というか俺と綾波って給料貰ってます？」

「ええ、毎月振り込まれているわ。待遇は三尉扱いで出撃手当が加算されて出ているわ。１ヶ月にカードで使える額は一万円よ、中学生としては多すぎるかもしれないわね。ってミサトに説明受けてないの？」

「いえ、カードで買い物出来るとしか……………」

「ゴミンゴミン」

「全く、呆れるわね。とりあえず引越しということだから、あなた達のカードの上限を無くしておくわ。シンジ君は２百万円ぐらい入っていると思うわよ」

「２百万円もですか？」

「いまだかつてない大金に驚く俺」

「あなたは人類を救っているのよ。驚く額ではないわ」

「シンちゃんお金持ち」

「ミサトさんがちやかす。」

パソコンの前に座っているマヤさんもちょっと驚いた表情になっている。

「まあ特に買いたい物とかないんで実感できないんですけどね（笑）」

「とりあえず今日の買い物はそれで充分よね？」

「充分過ぎると思います。ありがとうございます」

「じゃあ行つてらっしゃい。レイを待たしてるんでしょ」

「わかりました。リツコさん、あと一ついいですか？」

「何かしら？」

「零号機の再起動実験は何時の予定ですか？」

「マヤ」

マヤさんがキーボードを叩き始める。

「2週間後だよ、シンジ君」

マヤさんがおしえてくれた。

もしかしてマヤさんが1番マトモな大人なのかもしれない。

「ありがとうございます、マヤさんっ。では失礼します」

部屋を出ると綾波が待っていた。

「ゴメンね、待たしちゃって」

「いいえ」

「そういえば綾波、再起動実験は2週間後だってよ。知ってた？」

「ええ、赤木博士が昨日教えてくれたわ」

綾波に聞けばよかったかも…

「そっか、頑張ってるね。じゃあ買い物に行こうか」

「うん」

「引越しなんだけどね、綾波は何か家から持ってきた家具とかある？」

「わからないわ、碇君はどうしたらいいとおもってる？」

「俺的には前の家からは着替えとか必要最低限の物だけにして、備え付けの家具じゃあ足りない物を買ったらいいと思うな」

「そうする」

綾波は素直に頷いた。

「ミサトさんから聞いたのは、洗濯機、冷蔵庫と最低限の収納があるって言ってたよ」

「後何を買えばいいの？」

そうストレートに聞かれるとちょっと答えに困る。

「うん、食事は三食俺の家に来て貰えばいいんだ。だから食器とかベットとかかな？」

「わかったわ」

「後は見て決めようか。何か欲しい物があるかもしれないしね」

「ええ」

「買うところはデパートでいいかな？俺もこっちに來たばかりで、お店とかまだよく分らないんだ」

「構わないわ」

「じゃあ行こっか」

「うん」

俺たち二人は使徒の残骸が置かれている場所から出た。

てか、もしかして実際に引越し先を見ておかないと買うもの決められないんじゃないかな？

「綾波」

「何？」

綾波がこっちを見た。

「よく考えたら、一回引越し先を見てから買い物を決めた方がいいと思うよ。てか前の家にいって荷物も運んじゃわない？」

「わかった」

二人はタクシーに乗って綾波の前の家に向かった。

どうしてタクシーに乗ったかというと、リツコさんにお金があると
言われて気が少し大きくなったからである（笑）

第20話 引越し Q（前書き）

引越しは後一話続きますがQの次に名前どうしようか困っています。

第20話 引越し Q

ネルフ本部 司令公務室

広い室内に初老の男性と老人が淡々と公務をこなしている。

一段落したところで老人が口を開いた。

「碇、さっきシンジ君を褒めていたが当初の計画だとまだ早くないかな」

初老の男性は口の前で手を交差させて重々しくこう言った。

「問題はない」

「それならいいんだがな。もしかしてシンジ君にユイ君が帰って来る気がないということ言われて動揺しているのか？」

「そんなことはない。ただシンジの様子を見ると老人達のシナリオ通りにするのは難しいだろう」

「確かにシンジ君は報告書と性格や言動が全く違っていたな。諜報部は何をやっているのだから」

「今ここで諜報部の怠慢を責めても何もならない。我々のシナリオを進めるために行動したまでだ」

「問題はこれからだな」

「ああ、全てはこれからだ」

旧綾波家

「とりあえず荷物はそれぐらいでいいかな？」

「ええ、構わないわ」

荷物と言っても元々あまりなく、しかも着替えなど必要最低限な物だけなのでスポーツバッグ一個で収まった。

「じゃあ行こっか」

その荷物を俺が持ち新しい綾波の家に向かった。

徒歩と電車で荷物もあったことにより約1時間近く到着までにかかってしまった。

コンフォート17に到着しエレベーターで上まで上がる。

「さあ、ここが綾波の新しい家だよ」

「私の家………」

「そうだよ、スリットにカードをかざしてみて」

そう言つて俺は葛城家の右隣にある玄関のスリットを指差した。

頷いて綾波がスリットにIDをかざすと自動でドアが開いた。

「開いた」

まあ開かなかつたら問題なんだけどね（笑）

「もう綾波の家なんだから“ただいま”って言つんだよ」

俺は何処かで聞いたことばを、まるで自分の家に招いたかのように図々しく言つた。

「ただいま………」

初めての言葉に戸惑いながらも素直に言ってくれた。

中に入る綾波に続いて“お邪魔します”と言つて俺も入った。

家の中をざっと見ると葛城家と左右逆になっているが全く同じ作りのようだ。

綾波と一緒に一通り見て回るとミサトさんが言っていた通り、冷蔵庫と洗濯機が備え付けられていた。

「3部屋あるけど、どこ使うつもり？」

「あそこにする」

綾波は左奥の部屋を指差した。

そこは葛城家で考えると俺の部屋と同じ所にあたる。

構造上、壁を挟んで俺の部屋と向かいあっている部屋だった。

まあそうなるかな

「オツケー、荷物置いたら買い物行こうか。ベット必要だね」

「うん」

早速2人でデパートへ電車で向かった。

“第3新東京デパート”は市の中心にあり、市内最大級のデパートである。

コンフォート17からは電車で10分ぐらいの距離で比較的近い。

デパートに着くとまずは寝具売り場へ向かった。

そこで綾波と話ながらシンプルなシングルベットを買い、今日の午後に届くように手配した。

続いて食器コーナーに移動しキッチン用品と食器を購入し、ベットと一緒に届くようにした。

ふと時計を見ると2時を回っていて、朝ごはんが遅かったせいか少ししかお腹が減っていなかった。

聞いてみると綾波もお腹が減っていないようだ。

しかし昼ごはんがこれ以上遅くなると夜ごはんに影響するので、デパート内の喫茶店に入り軽食を取ることにした。

頼んだ野菜サンドイッチを食べながら綾波に言った。

「もう一ヶ所行きたいところあるんだけど、いいかな？」

「まだ何か足りない物があるの？」

「足りない物っていうかさ、綾波の服買おうよ。今日だって制服じゃん」

「必要ないわ」

綾波もサンドイッチをかじりながら言った。

栄養剤以外のものを普通に食べてくれているのが嬉しい。

「いやいや、必要だって」

「制服じゃいけないの？」

「何でいけないかって上手く言えないけどさ、あつた方が便利だよ。部屋で下着なのは良くないしね」

ボキヤ貧だから上手く言えなくてつらい……

「そういうもののなの？」

「まあ普通はね、綾波は何でも似合うと思うからとりあえず買ってみない？」

「ええ」

食後のデザートにショートケーキを頼んだ。

どうやら綾波は初めて食べるみたいだった。

「甘い……………」

ケーキだからね（笑）

「おいしいでしょ、色んな種類があるんだよ。もっと食べる？」

「うん」

しばらくして頼んだケーキが運ばれて来た。

この店の全10種類のケーキがテーブルの上に並んだ。

いやいや、完全に食べすぎでしょ……………」

そんな俺にはお構い無しにケーキをどんどん食べていく。

「これも甘いわ」

見事なまでに食べて、綾波はこの店のケーキを完全制覇した。

「おいしかった……………」

どうやら満足したようだ。

会計を済まし外へ出ると綾波が言った。

「ありがとう」

「喜んでくれたならいいんだよ」

俺はデパートの喫茶店のケーキが高いことを今日よくわかった。

完全にボツタクリ同然の値段でもしカードが使えなかったらアウトの値段だった。

ちなみにケーキ1つ600円……

「でも悪いわ、食事だけでなくベットや食器までお金出してもらって」

「構わないよ、俺も今日聞いたんだけどさ。何かいっぱい給料でてるみたいで。てか綾波、ちゃんと給料もらってる？」

少し考えてから

「わからないわ、聞いたことないから」

「ちゃんと払われてればけっこうな額になってると思うよ。今度確認しよう」

「ええ」

お金とか何より綾波が俺に悪いという感情を持ってくれたのが嬉しい。

あとは誰か俺以外の友達が出来ればいいのかもしれない。

「じゃ、とりあえず洋服売り場に行こうよ」

洋服売り場に着いた俺たちは早速綾波の洋服を選ぶことにした。

わからない……………

女の子の洋服はよくわからない。

綾波もよくわからないっていうし、店員はこれはチャンスとばかりにいっぱい売りつけようとブッシュしてくるし……………

どうしよう……………

「あれ、碇君？　こんなところで何してるの？」

突然話しかけられて振り返ると

「洞木さん？ どうして？」

そこにはジーンズ姿の洞木さんが立っていた。

「どうしてっていうか、ここ女の子の洋服売り場だし。碇君こそこんなところで何してるの？」

「いや……、綾波の服を買いにね」

今まで忘れられていた綾波の方を向いて言った。

「あつ、綾波さんこんにちは」

「こんにちは」

まさかと思ったが綾波が挨拶した。

思わず洞木さんと目を見合わせた。

「てか洞木さん、学校は？」

「今日は午前中授業だったから、たまにはデパートで買い物しようかなと思って来たのよ。というか碇君たち学校サボったのね！」

「ゴメン……、昨日は寝る時間なかったからね」

洞木さんは真面目な顔になって

「そっか碇君ってパイロットなんだっけ。もしかして綾波さんも？」

「

ぶっちゃけ昨日寝る時間なかったのは綾波の引越しの手配とか食事とかが原因だから俺のせいなんだよね（笑）

ウソついちゃったかな

「実はそうなんだ。今日は綾波が引越しすることになったから手伝ってるんだ」

「そうなんだ、綾波さんどこに引越したの？」

「けっこう聞いてくるのね

「俺と同じマンションなんだけどね。えっと……、ネルフの関係者が集められてるんだ」

「同じマンションっていうところで洞木さんの目が鋭くなっていたので、慌てて弁解気味に言った。」

「一応納得したみたいにな」

「それで今朝先生が何も言わなかったのね。」

「まあネルフ関係者のことは悪く言えないとおもっただけだね。」

「そういうこと」

「碇君、今綾波さんの引越しの買い物に来てるねよね」

「そうだけど」

「何か手伝えることない？ 私買い物とかけっこう得意なんだ」

「そうだ！」

綾波の服選びを頼めばいいじゃん

「じゃあ綾波の洋服を選ぶの手伝ってもらえないかな？ けっこう困ってたんだ」

洞木さんは綾波の方を向いて

「綾波さんはどんな洋服が好みなの？」

「わからないわ」

綾波が答えた。

「今までに買った服はどんなものか教えてくれる？」

「買ったことないわ」

洞木さんは困ったように俺の方を見た。

服を買ったことないってことの説明を求めてるみたいだ。

って言っても綾波についてホントのことというわけにいかないしなあ。

「えっと……、綾波は色々あって中学に入るまで入院してたんだよ。ねっ」

渾身のウソをつき綾波に同意を求めた。

俺の雰囲気気圧されたのか綾波は頷いた。

なんとか洞木さんも納得してくれたみたいで早速選り始めてくれた。

俺は綾波に洞木さんの言うことを聞くように言っておいた。

頷いたのをみて俺も自分の服を買いに行くことにした。

1時間ぐらいかな。

第21話 引越し 4（前書き）

やっと引越しは一段落です。コメントをくれた方々本当にありがとうございます。
アイディアも募集しております！

第21話 引越し 4

洞木さんが綾波の服を選んでいる間、俺も自分の服を買った。

といつてもたいして気合が入っているわけでもないので30分ぐらいで買い物が終了してしまった。

洞木さんには選り終わったら電話してくれるように頼んだので、俺はデパートの屋上にあるベンチに一人で座っていた。

こうして一人になるの久しぶりだな……

青空の下でのんびりしていると自然とこれまでの2体の使徒、そして次のラミエルのことが頭をよぎる。

サキエルは原作以上のスピードでの暴走で殲滅

シラムシエルはちょっとビビりながらも原作通りの同士討ちの様な形で殲滅

しかしどちらも決して上手く倒せたと言うには程遠く、運が良かったと言った方が良いかもしれない。

特にシラムシエルの方は、かなりというほどではないがある程度訓練していつてあれほどビビってしまった。

この事はかなりショックだった。

今後も原作通りに進めて行けば使徒が必ず倒せるという保証はない。
ヤシマ作戦の勝率を考えると実行するにはちょっと心配な点が多々ある。

特に戦略自衛隊から“陽電子砲”を徴発することによって、ネルフと戦略自衛隊の関係が悪くなったのは容易に想像できる。

これは最後のネルフ本部に戦自が攻めてくるのにも関係していると俺は予想している。

新たな作戦を考えなくてはいけない。

けどどうやって？

実際に本物を見ないとなんとも言えないが、原作でミサトさんが表現していたように完全無欠な敵だと思う。

遠距離からはATフィールド、近くに行けば陽電子砲の餌食になる。

下はボーリングの様な機械で掘っている。

上は………

ちょっと待てよ…

アニメでも漫画でもラミエルは上側にフィールドを張ってなかった

ぞ。

もしかしたら張ることが出来ないかもしれない。

ということは、エヴァをラミエルの上に運んでそこから落下するス
ピードを剣とか槍とかにのせて突き刺すことが出来れば殲滅出来る
かも。

検討の余地ありだな

なかなかいいアイデアだと自分でも思う。

しかし現段階でこれを進言することが出来ないのが辛い。

何故なら次の使徒の形態などを知っているのを言うことは、自分が
この世界ではないところから来たと伝えなくてはいけなくなるから
だ。

だがそんなことを言っても頭が逝っている奴としか見られないだろ
う。

そう考えていると洞木さんから服を選んだからみてくれと電話が入
った。

今までのことは一旦保留にしておく。

しかし、いずれは話さなければいけないことだとは思っ。

「こんな感じで選んで見たんだけど、どうかな？」

洞木さんがその後も何か続けて喋っていたが、俺は綾波に見とれていつ頭には入って来なかった。

試着室の中には白いワンピースを着た、蒼い髪をした少女が立っていた。

これは似合うとか似合わないとかそんな次元の話ではないな。

初めてこの世界に来て良かったと感じるような光景だね。

「これいいでしょ！ 私これ見たときピピツときたのよ。まだあるから待つてて」

洞木さんも試着室に入っていくカーテンを閉める。

第3新東京デパートの試着室はかなり大きく二人入っても全然余裕のようだ。

てか洞木さんかなりノリノリじゃね（笑）

こんなキャラクターだったわけ？

「じゃーん」

声と共にカーテンが開いた。

次にはジーパンにロンT姿の綾波がそこには居た。

余裕が出てきた俺は綾波を観察すると、何か顔が赤くなっているのを見て少し楽しく感じた。

「シンプルバージョンね。次は部屋着よ」

このファッションショーは延々1時間ぐらい続き、部屋着を含めて約20着ぐらいの洋服を購入した。

「洞木さんありがとうね、何時間も。俺じゃあこつは上手いかなかったから助かったよ」

会計を済ましてお礼を言った。

「いいのよ、私も久しぶりに楽しかったし。でもあんなに買ってお金大丈夫なの？」

優しい心使いでお金の心配をしてくれた。

「まあ大丈夫だよ。それより何かお礼をしたいんだけどさ、洋服とかどうかな？」

「いいのよ、あれぐらい」

「じゃあせめて食事とかどうかな？」

なんだかんだで、実感はなかったがすでに6時を過ぎていた。

「気持ちは嬉しいんだけど遠慮しとくわ」

原作で洞木さんが姉妹のために料理を作っていたことを思いだし、今食べるわけにはいかないんだと分かった。

他の案を考えていると

「ケーキ」

突然、綾波言った。

「ケーキ？」

「さっき食べたケーキはおいしかったわ。お礼にどうかと思って」

綾波のその発言で俺たちはさっきの喫茶店に入ってケーキを食べた。

食べ終わって綾波がトイレに行っているとき、洞木さんが俺に言った。

「今日は楽しかったわ。ありがとう」

「こっちこそ色々ありがとう」

「けど綾波さんってけっこう普通の女の子なのね。学校で話しかけても事務的なことしか喋ってくれなかったし」

「そうなんだよね。あのさ、お願いがあるんだけどさ」

「えっ、なに？」

「綾波の友達になってくれないかな？　喋ったり、一緒にどこか行ったりさ。そういうのが綾波には必要だし、男の俺より洞木さんの方が適任だと思うんだ」

「そうね、わかったわ。任せておいて」

大きく頷いてくれた。

「お願いします」

「けどいいわね、綾波さんは」

「？」

「碇君にこんなに自分のこと考えてもらってこつちをじっと見て言った。」

「あはは」

「碇君って綾波さんのこと好きなの？」

「どうなんだろう？」

そう聞かれると、正直自分がどう思っているか分からない。

もちろん嫌いなわけではないしね

けどどこかで綾波のことを神聖視している自分がいるみたいだ

何て言っても俺たちの画面の中の憧れだったからね。

都合が悪くなってきたので笑って誤魔化すことにする。

「あはは……、洞木さんこそどうなの？ トウジのこと」

ちょっと悪ふざけをしてからかうことに決めた。

トウジの名前を聞いてむせる洞木さん。

「なっ何で鈴原なの！ どうして」

凄く食いついてきた。

「見てればわかるよ」

「ちょっと……、鈴原は知っているの？」

目がマジだ（笑）

「大丈夫だよ、知らないから。本人はかなり鈍いからね、ちゃんとプッシュしないと伝わらないよ」

みるみる顔が蒸気していく。

けっこうからかうのって楽しいね

ミサトさんの気持ち少しわかってきたや（笑）

「本当に？」

「大丈夫だよ話してないし、綾波来たからこの話はここまででねっ。さっき言ったこと頼むよ」

洞木さんは動揺している感じだったが大きく頷いた。

その後も少し談笑して帰る時間になった。

「じゃあそろそろ帰りますか、綾波今日は洞木さんにお世話になったからちゃんとお礼を言っ」

「ありがとう、洞木さん。おかげで洋服をいっぱい買えたわ」

「いいのよ全然、それから私のことはヒカリって呼んで。私もレイさんって呼ぶから」

洞木さんがそう言った。

早速実行してくれたみたいだ。

「ヒカリ……さん」

「そうよレイさん。これで私たちは友達ね」

「友達……」

と綾波はその言葉を呟いた。

以前より表情が柔らかくなったせいか、どうやら少し喜んでいるように俺には感じられた。

会計をしようと思って伝票を探したがテーブルの上には見当たらない。

綾波に聞いてみると

「会計は済ましたわ。碇君にばかり払わしちゃ悪いと思うから」

その言葉を聞いて俺は感動した。

別にお金なんてネルフのお金みたいな物だから出し惜しみするつもりなかったし、使いきってしまったてもいいつもりでいた。

しかし綾波の、なんていうか“成長”みたいなものを感じられた様な気がしてとても嬉しかった。

デパートを出て3人とも電車に乗った。

途中、先に洞木さんが降りる駅に着き

「レイさん、碇君今日はありがとねっ。楽しかったわ。また今度どこかに行きましょう」

「こちらこそありがとう、ヒカリさん」

「買い物助かったよ、ありがとう」

俺も綾波の言葉に続く。

「じゃあまた学校で、明日はサボっちゃダメだからねっ」

やっぱり委員長の洞木さんだった。

扉が閉まりガラスの向こうで手を振っていた、それにつられるように綾波が手を振り返していたのがとても印象的であった。

綾波の新居に着き、今日買ったものが届くまでに簡単な拭き掃除などを一緒にした。

一段落したところでチャイムが鳴り、ベッドや今日買ったものが運び込まれる。

それらの物を配置すると物足りないながらも、一応生活感のある部屋に変わっていった。

俺の家に場所を移して、帰りに買った惣菜を中心とした夕食を取る。

食べ終わり紅茶を飲んでいると（ちなみに綾波は紅茶をけっこう気に入っていることに気付き、自分の家でいつでも飲めるようにティ―パックを購入しておいた）

「碇君……、今日いろいろありがとう」

「気にしないでいいんだよ。俺ら友達だから困ったことあったらすぐに言ってね」

「友達……」

「洞木さんも綾波の友達だよ。友達はね何でも協力してくれるから大事にしようね」

自分でも何か違和感のある、お母さんの感じで言ってしまった。

「うん」

完全に親子みたいになってしまったようだ。

そこから軽く話が進み

「ご飯は食べに来てね、作って待ってるから。っていうかこの部屋を中心に生活してくれると嬉しいかな。いろいろと話したいこともあるしね、一応俺は6時半には起きてるつもりなんだけど寝坊したらお弁当作れなくなっちゃうから起こしに来てくれると嬉しいな」

「

綾波は頷いて

「わかったわ、起こしに来る」

「この家は綾波のＩＤで開くように設定してあるから」

「ええ」

「そのくらいかな、後今日買った洋服は一回洗った方がいいかもね。けど俺、女の子の洋服はわからないから明日洞木さんに聞いてみようね」

洞木さんの名前を聞いたからなのか綾波は嬉しそうに大きく頷いた。

「じゃあもう遅いし寝た方がいいかもね。明日は学校行かなきゃね、約束したし」

「わかったわ、おやすみなさい」

そう言って綾波は帰って行った。

一人になった俺は今日あったいろいろなことを考える。

今日綾波と行動して確かに世間を知らないということがあったかもしれないが、俺の感想としては洞木さんと同じで普通の女の子というものだった。

だからこそ普通に生活して欲しいし普通に楽しんで欲しいと思って

いる。

今のところ綾波とはいい関係を築けていると思うし、洞木さんも友達になってくれた。

しかし俺は綾波に隠していることがある。

それは綾波の出生の秘密とか関わっている実験などを知っていることだ。

原作を見ると、やはり“ヒト”でないことを気にしている様子がある。

純粹にこの世界で“ヒト”かどうかでことだと俺もイエローカードだと思う。

そう考えると俺の存在っていったいなんなんだろう。

というか実際の碇シンジはどこへ行ってしまったのだろうか？

この頃思わなくなってきたしまった最初の疑問を思い出す。

最近気付いたことなのだが、俺は現実世界で綾波のことをレイ・父さんのことをゲンドウと呼んでいた。

しかし今はとつさの時でも綾波と父さんと原作通りの呼び方で呼んでいた。

まだ予想でしかないが、もしかしたら俺の中に本当の碇シンジがい

て意識していない深層心理に影響をしているのかもしれない。

例えばそうだとしても確かめる術はないのだが……

自分が自分でないかもしれないという恐怖

といっても元々自分の身体でもないし……

複雑な心境だ

もしかして彼なら何か知っているのかもしれない………

……そう、使徒であり唯一人間とコミュニケーションが取れるもの

渚カヲルなら………

だが彼と会うのは少し先にりそうだ………

一夜明けて（前書き）

脱力感MAXさんアイデアありがとうございます。これからもアイデア募集しています。更新が遅れて申し訳ありません。

一夜明けて

ゴツゴツした感触がする。

揺すられる感覚があり、次第にはつきりしていく意識のなかでベッドで寝なかったことを思い出す。

どのくらい寝てしまったのだろうか、多分ミサトさんが起こしてくれたのだらう。

目を擦りながら顔を上げていく、机に突っ伏して寝たせいか逆に疲れが溜まっている様だ。

目を開けるとそこに蒼い髪をした少女と視線が重なった。

「…………綾波？」

何で綾波がいるんだろう？

ああ、昨日家の横に引越したんだな……

寝起きで働かない頭を使ってそういう結論に達した。

「碇君……、もう7時半よ」

時間に反応したのか、急に眠気が吹っ飛んだ。

目の前には制服姿の綾波が立っていた。

どうやら俺が起きないので、ずっと起こそうとしてくれていたらしい。

学校に遅刻しないで着くためには8時には家を出なくてはならない。

大急ぎで昨日眠気と戦いながら準備したおかずに何品か料理を足して今日のお弁当を作った。

8時を少し回ってしまったので慌ただしく二人で家を飛び出した。

玄関にミサトさんの靴が転がっていたので、どうやら深夜に帰宅していた様だ。

どうせだったら机で寝ていた俺を起こして欲しかった。

身体が痛くてたまらず、まだ寝ない方がましだった。

登校中に綾波と昨日の話や新居の話をした。

あまり感情を表に出す方ではないが、悪くはないんだと読み取ることがができる。

またお礼も言ってくれ、よほど嬉しかったのか洞木さんのことも話題に出た。

昨日買った洋服の洗濯のやり方を洞木さんに聞こうという話だったが、どうやら朝は時間がなさそうだ。

そんな話をしている内にクラスに着いた。

なんとかギリギリセーフの様だ。

一緒に教室に入るとざわめきが一瞬止まった。

最初何でかわからなかったが、おはようと言って俺たちは自分の席に座る。

すぐにざわめきが止まったのは俺が綾波と一緒に登校してきたのが原因だと推測できた。

誰とも必要以上に喋らないやつが談笑しながら登校してきたら、そりゃびつくりするわな。

「おはようレイさん、碇君」

ざわめきの中から洞木さんが挨拶してきてくれた。

「おはようレイさん」

「おはようヒカリさん」

「おはよう洞木さん」

ちゃんと挨拶した綾波に続き俺も挨拶した。

クラスメートは“えっ”という顔をしてこの様子を見ていた。

そして間を開けずに朝のチャイムが教室に鳴り響く。

授業が始まったが、一応この前まで高校生だった俺には退屈でしかなく、完全に爆睡をしまっていた。

寝たり起きたり綾波に起こされたりを繰り返している内に昼休みに突入した。

綾波に今朝急いで作ったお弁当を渡していると洞木さんがやって来た。

「レイさん、一緒にお弁当食べよ」

「ええ」

一瞬戸惑った様な表情を見せた綾波だったが、ややタイムラグがあつてそう答えた。

俺はそんな様子を微笑ましく見守りながらトウジたちのところへ合流した。

屋上で3人で昼御飯を食べていると、ケンスケが戦闘中に外へ出ようとしたことを謝ってきた。

反省しているみたいで俺も深くは追及しないことにした。

午後の授業も終わり俺はネルフに向かう。

綾波は2週間後の再起動実験の前までは訓練は入ってないらしく、今日は洞木さんと一緒に洋服の洗濯の仕方を教えてもらうらしい。

本部に着くと早速着替えてハーモニクスの訓練をした。

今日はリツコさんとマヤさんその他の研究員の人っていて、ミサトさんはいなかった。

リツコさんに聞くと、ミサトさんは使徒戦の後始末の書類に追われているらしい。

訓練が終わりリツコさんに簡易的な検査を受けた。

「シンジ君、体調はどう？」

聴診器を当てながら問いかけてきた。

「特に問題ないです」

聴診器を首にかけながら

「今日の結果は悪くはないわ。ただ成績の上下の振れが激しいわね」

「すみません」

「この前の使徒のことを思い出しながら明日はやってちょうだい」

「使徒と言えはなんですけど……………」

俺は対ラミエル戦に考えた作戦に必要な武器のことを話すことにした。

「この前の使徒戦なんですが、プログナイフだと相手の近くまで行かないと攻撃出来なくて、なんとかありませんか？」

「確かにそうね、パレットライフルだとダメージは与えられないみたいだし…………、具体的に何か考えがあるの？」

俺は新しい武器に関しての考えを話した。

「やつぱり長いのがいいですね。杖みたいのもいいんですが、剣や槍みたいな物があればある程度間合いが確保出来ると思うので」

「槍状の武器だったらドイツに“ソニックグレイブ”があるわ、取り寄せるには1、2週間ぐらい掛かるわね」

綾波の再起動実験が2週間後で原作通りだとラミエルはその時に来る。

ギリギリのところだな。

槍状の武器がないと考えていた上からの攻撃は出来ない。

「もうちょっと早くはなりませんか？」

「そうね…………、ドイツには急ぐ様に指示するわ、それに刃が付いてないものだったら本部で1週間ぐらいで作ることは可能よ。」

「じゃあ、それでよろしくお願いします」

「ええ、けどシンジ君」

「なんですか、リツコさん？」

真顔になって

「私はあなたが何か根拠があつて早く武器が欲しいと言っているような気がするのだけれど、何か理由があるのかしら」

と言った。

それはまるで俺の考えを全て知っているのではないかと思える様な雰囲気をかもしだしていた。

「いえ……、いつ使徒が来るか分からないですし、パレットライフが効かない以上、近距離戦闘でやらなくてはいけないと思うのでビビらない様に出来る限りの準備をしたいだけです」

「そう……、私にはてっきりあなたが何か知っている様に思えたの。疑問点は残っているけれど、今日はこのくらいにしておきましょう。お疲れ様、帰っていいわよ」

着替え、俺は本部を出て家に帰ることにした。

先ほどのリツコさんの会話は、俺のこの境遇を知っているのではな

いかと思わせる様な感じであつた。

しかしそれ以上に、ソニックグレイブと新武器が手に入りそうなのは大きいと思う。

予想の通りラミエルが上面にA Tフィールドと荷粒子砲を撃てないとするなら光明が見えてきたかもしれない。

家に帰ってくると明かりが着いていた。

「ただいま」

と、もしかしたらミサトさんが帰って来ているのかもしれないと思
い声を出した。

するとミサトさんではなく綾波が居間の方からやって来た。

「おかえりなさい」

昨日買ったと思われるTシャツと膝下まである部屋着のズボンを履
いていた。

その視線に気付いたのか綾波がこう言った。

「ヒカリさんに洗濯の仕方を教えてもらったの」

「そうなんだ、よかったじゃん」

「ええ」

綾波は本当に嬉しそうなおをして言った。

「他にはどんなことしたの？」

「買い物をした、あとヒカリさんに料理を作ってもらったわ。いっぱい作ってくれたから碇君も食べてみて、とってもおいしかった」

「そろは助かるよ、なんにも食べてないんだ」

「今暖めるから、碇君は座って待ってて」

「ありがとう」

綾波がご飯を多分この匂いはカレーだとおもっけど暖めてくれるなんて思わなかったな。

もしかして洞木さんにいろいろと料理とか教えてもらったのかもしれないな。

「お待たせ」

綾波が予想通りカレーを出してくれた。

食べてみると少し甘口だったがとてもおいしい。

もちろん野菜カレーだった。

食べ終わると綾波が口を開いた。

「おいしかった？」

「すごくね、洞木さんはすごいな」

「碇君もすごいわ」

「ありがとう、けどやっぱり洞木さんの方がすごいね」

なんだこの会話は（笑）

「ヒカリさんにおいしい料理を作ってもらって、私も料理を作ってみたいと思ったの」

「いいとおもうよ、そういうのって」

「だから碇君にも料理を教えて欲しいの」

「うん、まあでも俺はあんまり上手なわけじゃないから基本的なことをやって洞木さんにちゃんとした料理を教えて貰えばいいかもね」

綾波は微笑んで

「うん」

と言った。

それから明日が土曜日ということもあり少し遅くまで会話を続けた。

かなり遅くなったので綾波を家に返して俺も寝ることにした。

第23話 準備（前書き）

更新遅れて、さらに短くてすいません。使徒戦は3、4話に別れる予定です。モバゲーの名前を古手夜一に変えました、メールくれたかたありがとうございます。

第23話 準備

1週間

学校生活を楽しみ、訓練をし平和な時を過ごしていた。

しかし無情にも決戦の時は刻一刻と迫っている。

綾波の再起動実験は3日後に決まり、今日から一緒に訓練メニューが課せられることになった。

「シンジ君、なかなかいい結果よ」

新しい棒状の武器の完成に先だって、新しい武器の訓練の評価をリツコさんが言った。

新武器に何か名前を付けてあげればいいのと思う。

「ありがとうございます」

シュミレーションでこの棒の武器を使い、次々と出てくる第3使徒に模した敵を倒していく。

ちなみに綾波はミサトさんのもとでシンクロやハーモニクスのテストを受けている。

なぜ訓練がリツコさんなのかというと、新武器についてのことがあるからだそうだ。

「ちなみにソニックグレイブは3日後に空輸で届く予定に決まったわ」

「それって綾波の再起動実験の日ですよね？」

「そうなるわね、まあ別に問題はないでしょう」

……いや

問題はある。

もしも原作通りだったら、その日に使徒が来るはずなのだから。

その為にソニックグレイブを頼んだので、間に合わなかったらこの棒で戦うか、もしくはヤシマ作戦をするしかなくなる。

後、俺にはもう一個疑問があった。

「あの一つ聞きたいんですけど、いいですか？」

「何かしら」

「ソニックグレイブってドイツに何本有るんですか？」

リツコさんが書類をめくって答えた。

「2本ね。予備の1本を送って貰う様に手配したわ。もし1本しか

なかつたら手放さないわね」

……よかった

これならアスカに怒られずにすみそうだ。

何かお気に入りの武器みたいだったからね。

その後も少し訓練が続いたがとりあえず今日の俺の分は終わった。

綾波と一緒に帰る約束をしていたのでシャワーを浴び、着替えて待っていることにする。

さっき聞いた感じでは後30分ぐらいだそうだ。

それからシャワー浴びたりしたらだいたい1時間ぐらいかな。

……待てよ。

綾波ってちゃんとシャンプー使ってるのか？

今まで買ってるどころ、見たことないぞ……

後で聞いてみよう。

少し待つことになりそうなので、食堂にいとメールをして待つことにした。

アイスコーヒを飲みながら、俺は予定なら3日後に迫ったラミエルのことを考えている。

本当に武器を頼むだけで最善を尽くしたと言えるのだろうか？

それとも未知の新しい作戦よりも、ある意味前例のある作戦にしたがつていった方が良いのか。

それは誰にもわからないだろう。

だが、考えないというもつとも愚かなことはしたくはない。

実のことをいうと、ヤシマ作戦を俺がしたい理由は綾波に負担を掛けたくないというのが大きい。

ヤシマ作戦で零号機溶けちゃうぐらいのダメージがあつて、綾波がすごい傷ついていたのはエヴァを見ていた人なら全員知っているだろう。

それから大破した零号機はカラーリングも変えられた。

…… カラーリング

…… しまった

綾波の弁当道具を蒼色にしたのは零号機に合わせたつもりだったん

だ。

修理中で零号機見てなかったけど、今は確かオレンジ色なんだよね

……

しくつたなあ……

いやいや、話を戻そう。

ラミエル戦は試すだけでも上からの攻撃を頼んでみよう。

それぐらいの価値はあるはずだ。

もしダメだったらその時はヤシマ作戦をやればいいんだし、気楽に
いこう。

綾波の負担を減らすためには攻守を交代するのがいいんだが、シン
クロ率が高くないとポジトロンスナイパーライフルを扱うことがで
きないらしい。

じゃあ俺がやるしかないのか？

といっても、俺のシンクロ率は60%前後だ。

原作のシンジと大差はない。

携帯の着信で我にかえった。

相手は綾波でこっちに向かってくるそうだ。

もう考えるのはよそう。

もう俺に考えられることは何も無い……………

第24話 新決戦 序（前書き）

遅れてすみません

第24話 新決戦 序

……なんで前は失敗したのだろう

今回は朝、碇君が頑張ってっていつてくれた。

嬉しかった

碇君は私に色々なことを教えてくれた。

そしてヒカリさんとも友達になれたし、まだ少しだけど料理も教えてもらった。

起動失敗した理由はわからないけど今の私はあの時の私ではない。

そんな碇君を助けたい。

零号機に乗って。

碇君も言ってくれた

私はもう人形じゃない

「これより零号機の再起動実験を行う」

ゲンドウのあの重々しい声が制御室に響く。

「準備はいい？」

リツコさんが綾波に問いかけた。

「問題ありません」

ずっと閉じていた目を開き綾波が答えた。

その視線がモニター越しに俺のものと重なる。

力強く頷くと綾波もそれに応えてくれた。

「第1次接続開始」

「了解、第1次接続開始」

マヤさんが復唱する。

「主電源コンタクト」

「稼動電圧臨界点を突破」

「A10神経接続、異常なし」

「初期コンタクト、全て問題なし」

「双方回線、開きます」

モニターのなかの綾波に各種ディスプレイに灯った光が頬を照らす。

「第2次接続開始」

「第2次コンタクト、準備よし」

「主電源接続、フライホール、回転開始」

起動する零号機。フライホールが回転を始める。

制御室のモニターでは高いシンクロ率を示している。

「零号機、再起動実験成功です」

前回の失敗を頭がよぎっていた職員達に安堵の表情がうかがえる。

その瞬間ゲージに警報が鳴り響いた。

「非常警戒指令、非常警戒指令。第3新東京市の北西50キロ上空に未確認飛行物体が出現、時速100キロで市街地に向けて進行中。繰り返します……」

ゲンドウがマイクに向かって

「総員、第1種戦闘配置」

「零号機をそのまま使いますか？」

ミサトさんがゲンドウに聞いた。

「まだ戦闘には耐えん、初号機を使う。そういうことだシンジ、準備しろ」

ゲンドウが俺に直接指示してくると思わなかったので、一瞬怯んだがすぐに答えた。

「わかった」

「初号機はどのくらいで用意できる？」

「380秒で出せます」

「そうか、やってくれ」

すぐに着替えた俺は発令所に向かう。

その途中に零号機から戻ってきた綾波とあった。

「……ごめんなさい。また碇君のこと手伝えないわ」

俺にそう言った。

「いいんだよ、次は手伝ってもらうことになると思うし」

「わかったわ、……碇君頑張って」

「OK」

発令所のモニターには第5使徒がアップで映っている。

「シンジ君、使徒はそのまま第3新東京市に向かっているわ」

「使徒の特徴はわからないんですか？」

知っているが、何か変なことを言ってしまったらいけないので聞いてみることにした。

「第3新東京市の戦闘稼働率は26%、援護は出来ないけど戦略分析は出来るわ、シンジ君はエヴァに乗って待機してて」

「だけど、特徴をみないと戦えないですよ」

「エヴァに映像を送るわ、それで見てちょうだい。今はいつでも出動出来るようにしておいて」

「わかりました」

「使徒、芦ノ湖上空に侵入」

「攻撃を開始して」

ミサトさんが指示をだす。

12式自走臼砲が使徒に向かって攻撃をする。

砲弾が使徒に届くというところで、オレンジ色の壁によって妨害された。

「目標肉眼で確認できるほどのATフィールドを展開、……目標に高エネルギー反応」

キラツと光るラミエル。

その瞬間、ビームの様なものによって自走臼砲が炎上した。

「続いて西方より攻撃を開始」

「了解、西方より攻撃を開始します」

しかしまた同じ様な映像が初号機のモニターに流れる。

「続いて無人戦闘機による攻撃を開始」

これもまた同じ様に光のビームによって殲滅された。

「上から攻撃してください！」

俺はミサトさんに叫んだ。

「上から？」

「四方はダメでも、もしかしたら上からならいけるかもしれません」

「わかったわ、残りの戦闘機を上空からの攻撃に回して」

数機の戦闘機が隊列を組んで上空から下降しながら攻撃をする。

しかしまたもやオレンジ色の壁によって阻まれる。

だが攻撃をしてこない。

数回攻撃をすると端に位置する戦闘機はうち落とされたが、中央の戦闘機は無事だった。

「赤木博士！」

「いま、マギに計算させてるわ。……マギによると使徒は自分の上、80度から160度までは荷粒子砲を射てない様よ」

「エヴァを出してもダメみたいね」

「ええ、出した瞬間に荷粒子砲で狙撃されるわね、完全に防ぐことは不可能よ」

「まさにパーペキな要塞ね」

「目標、本部上空に到達、ボーリング状のもので本部に向けて進行中」

「時間制限がついたみたいね、シンジ君聞こえてる？」

「はいっ、聞こえてます」

初号機のエントリープラグ内のモニターにミサトさんの顔が現れた。

「見ての通りだから、作戦を練り直すわ。一旦戻ってきて」

なんとか最初に使徒に射たれるというのは避けられたみたいだな。

というか、原作では何で最初から戦略分析みたいなことをしなかったんだ？

そうすればもっという結果になったのだろうし。

エヴァを出せばいいと思ってたのかもしれない。

まあ俺が結果を知っていたから避けられたのだけだね。

そんなことを言ってもしかたがないか。

一旦戻った俺は綾波と一緒に控え室待機していた。

現在も使徒は真上で本部に向けて掘削をし続けている。

俺たちに出来ることは今は何もない。

ただ待つことだけだった。

第25話 新決戦 破（前書き）

更新遅くなってすみませんです。

今エヴァで気になっているのは、新劇場版 破でレイの食器が四人分用意されていたことです。

レイ・シンジ・ゲンドウともう一人は誰でしょうか？

アスカ・ミサトさんとリツコさんとオペレーターずは松代に行っているはずなのでないと思います。

一体誰の分でしょうか？

謎です

第25話 新決戦 破

異常に広い部屋の中に三人がいる。

「……レンジ外からの長々距離からの、直接射撃かね」

冬月の声が静寂に包まれていた室内に響いた。

「そうです、目標のATフィールドを中和せず、高エネルギー集束帯による一点突破する作戦を提案します」

「“マギ”はどう云っている？」

「スーパーコンピューター“マギ”による回答は、賛成2、条件付き賛成1でした」

「勝算は8・7%か」

「使徒の本部到達までの残り9時間で出来る作戦の中で、もっとも高い数字です」

「考えた作戦はこれだけかね？」

「もう一案ありますが」

「そっちの作戦はどのようなものかな？」

「シンジ君の思いつきで、使徒は自分の上には荷粒子砲を射てない可能性を見つけたので、上空から落下のスピードをつかいドイツか

ら取り寄せたソニックグレイブでコアを突き刺す作戦です。ちなみに勝算は8・3%です」

このやりとりのなかでもゲンドウは口の前で手を組み、微動だにせず口を開かない。

「ほぼ勝算は変わらないな。マギは？」

「条件付き賛成が3です。上空に荷粒子砲を撃つことができるなら、我々に勝ち目は無くなるという判断です。現在のところはATフィールドを張ることが出来るのを確認しています。」

またもや一瞬の静寂が訪れる。

「反対する理由はない、君の思った通りにやりたまえ」

とゲンドウが初めて口を開いた。

俺と綾波が控え室から発令所に招集された。

発令所にいる職員はオペレーターを始め、皆忙しそうに働いている。モニターにはシールドを本部に向けて進めている使徒が映っており、その下には最終到達予測時間のカウンtdownが表示されている。

ミサトさんが俺たちに作戦を伝えた。

「目標に対して、二子山よりレンジ外からの長々距離射撃をおこないます。シンジ君は初号機で砲主を担当、レイは零号機で盾を使い防御を担当よ。使徒の本部到達予測時刻まであと9時間、作戦は0003に開始します。よってパイロット両名は1000から最終起動チェックを行うので、集合して。何か質問は？」

いやいや……

これじゃ本編とまるで同じじゃないか。

そうならない様に俺は考えてきたんだ。

しかし論理的な反対意見は出せそうもない。

そんな様子を見てか、ミサトさんが言った。

「シンジ君何か意見あるのかしら？」

真剣な目線が俺の目に向けられる。

その後ろに控えているリツコさんの視線も感じた。

俺は言葉を選びながら話し始める。

「その作戦って打ち返されることはないんですか？ 実際には使徒の射程距離が長かったりして」

「可能性としてはあるわね。そのために盾を用意しています。」

その盾って確か、宇宙船か何かの電磁コーティングされてるやつだったよな。17秒まで耐えられるっていう。

「上は撃たれないだったら上空から落下のエネルギーを使って責めるわけにはいかないんですか？」

今までずっと考えてきた現時点で俺が提案できる作戦を言ってみた。

「それも考えたわ、……リツコ」

ミサトさんがリツコさんに合図をした。

書類を見ながらリツコさんが変わりにこたえる。

「マジによると使徒がもしも上空に向けて荷粒子砲を撃ってきた場合、初号機及び零号機のATフィールドでは防ぐことができないという回答が出たわ。さらに上空からの落下という特殊な状況では避けることもできないということも主な原因の一つね」

「だけど射たれるのは一緒じゃないですか？」

「いいえ、盾を持つことが出来るかどうかが違うの。それによって勝率が変わってくるわ」

ミサトさんが答えた。

「どのくらい違うんですか？」

「0・4%よ」

…… たったそれだけ

「ほとんど変わらないじゃないですか」

「高い勝率の作戦を選ぶのは指揮官としては当然の判断よ」

ミサトさんが言い切った。

綾波が俺達の言い争いを心配そうに見ている。

ちょっと熱くなりすぎちゃったみたいだ。

ただどヤシマ作戦で綾波を危険な目に合わせたくはないと思っている。

「……ですがミサトさん、その作戦に失敗したらエヴァを2体失います。しかし上空から攻めたんなら失敗しても一体ですみます。一体残れば何とか長々距離からの作戦が出来るんじゃないですか」

「シンジ君、何が言いたいの？」

「二回作戦が出来るということです。上空から攻める場合はたいした準備は要らないと思うので2案を同時に進めることが出来ます」

ミサトさんは少し遠くを見つめて考えて言った。

「確かに一理あると思うわ。だけどシンジ君、よく聞いて。この作戦には高いシンクロ率がひつようなの、だからもし初号機を失ったら長々距離射撃は残念ながらレイのシンクロ率では成功する確率が低いわ。それとも、何かその作戦がやりたい理由があるの？」

「いえ、特にわ……」

「この話はこれで終わりにします。今回は私に従って貰います。シンジ君もレイもいいわね」

おれはしぶしぶ了承するしかなかった……

綾波の心配そうに見つめる視線が目に入る。

そのやりとりの後、原作で綾波がやっていた陽電子砲を戦自研に俺とミサトさんが取りに行った。

やはり話は通しておらず無理やり奪う形になり、戦自研に事前に言うように進言をしておくべきだと後悔の念が俺をおそう。

そして俺達は、決戦の時までの少しの間を原作同様にタラップの上

で待つことになった。

そのつかの間の休憩を綾波と会話する。

「……綾波」

「何？、碇君」

前を向いていた首を俺の方に向けた。

「盾は斜めにして使って、その方が持つと思うから」

「ええ、わかった」

「後、無理だと思ったら逃げて。自分の安全を考えてほしいな」

少しの間、その二人がいる場所が静寂に包まれていた。

そして綾波が口を開いた。

「私は逃げないわ。あなたは私が守るもの」

大きくはない声だが、はっきりと意志が俺にも伝わった。

その言葉に対して俺は何も言えなかった。

「そろそろ時間よ、行きましょう。」

「ああ」

冷たい風が頬をたたく。

「碇君、……………ありがとう」

小さい声…………

そう俺には聞こえた。

何か言おうとしたが、綾波はもうそこにはいなく一人俺が残っていた。

第26話 新決戦Q（前書き）

久しぶりの更新です。

楽しみに待っていてくれた方がいればよいのですが…。実は浪人してまして、さすがに下記続けているのはまずいと思い更新をとめていました。このままだとチヨコレートは。。。大学の理工学部に決まりそうです。そんなわけでこれから更新を続けていくのでヨロシクお願いします（＾―＾；）

第26話 新決戦Q

「いい、シンジ君。あなたに日本の全エネルギーを預けるわ」

ミサトさんが二子山近辺に仮設した管制室から初号機にSound onlyで俺に言った。

極力電力消費を押さえるためにエントリープラグ内が薄暗く、画面に見える使徒の青い色が不気味に感じられる。

「これより“ヤシマ作戦”を決行します。電源を繋いで」

「了解、電源接続を開始します」

変圧器の音が初号機の中まで響いてくる。

しかし俺は綾波が言った最後の言葉が気になっていた。

零号機との回線は切れていてその真意を聞くことは出来なかった。

「初号機、ポジトロン・スナイパーライフルの撃鉄を起こして」

俺は言われたとおり、うつ伏せでスナイパーライフルの撃鉄を起こした。

その刹那

「目標、内部エネルギー急上昇」

「まさか気付かれたの！、シンジ君早く」

赤いマークはまだ揃わない。

だが俺は考えていた。

原作では一発目が干渉して外れ、零号機が荷粒子砲を受け融解。

そして二発目で使徒を殲滅した。

ということはある程度使徒の一発目を綾波に盾で防いで貰い、こっちは一発でしとめればオッケーじゃん。

盾も斜めに受ければ17秒以上持つと思える。

これが今出来る一番よい作戦だ。

そう思っていた。

……………あんなことになるまでわ

「シンジ君早く撃って」

その声と同時にぐらいに、使徒の荷粒子砲がエヴァに届く。

それを防ぐ零号機

黄色い荷粒子砲が盾によって拡散される様子は、一瞬人類を救っていることを忘れさせるような美しさであった。

管制室からは何か言っていたが、それが聞こえないほど集中し、タイミングを見計らっていた。

どれくらい経っただろうか？

盾が融解する前に攻撃が止まった。

今だ！

エヴァ越しにスナイパーライフルの引き金をひく。

黄色とも白ともいえるような閃光が銃口から使徒に向かって地面を這っていった。

荷粒子砲を撃ったばかりの使徒は防御出来ずに撃ち抜かれる。

……はずだった

轟音と共にスナイパーライフルから出た閃光がオレンジ色の壁によつて弾かれた。

「……失敗した」

完璧だと思ったのに……

くそっ……

一発目はフルパワーで撃ってきてないのか

そんな俺を現実に戻す声

「第2射いそいで」

ミサトさんが叫ぶ。

「目標内部に高エネルギー反応」

終わった……

辺りは急に暗くなった。

『君はこんなところで終わりののかい？』

突然、声がした。

「だれだ？」

『せつかくこの世界に來させてあげたのに、もう君は諦めるのかい？』

依然として暗闇の中に人影は見えない。

しかしこの声には聞き覚えがあった。

「渚カヲル？」

「フッフ、諦めても僕は構わないんだけどね。彼女を守るんじゃないのかい」

辺りがいきなり明るくなり、俺はエントリープラグに座っていた。

まだ諦めるわけにはいかない。

「綾波、ポジトロンライフルを撃ってくれ。俺が使徒を引き付ける」

叫んだ俺は、零号機から離れ使徒の方に走り出した。

これはある種の賭けだった。荷粒子砲を初号機の方に引き付けることが出来れば、何とか二発目のライフルを撃てるまで時間を稼げるかもしれない。

零号機と直線上にならないように、使徒に回り込むように走る。

使徒の放った閃光が俺の横をかすめた。

よしっ、フィールドを張れば直撃は避けられる。

その間も初号機を荷粒子砲の連射が襲い、軽くボディーをえぐった。

くっ…、綾波頼んだ。

「第2射発射」

ミサトさんの声がエントリープラグ内に響いた。

綾波のスナイパーライフルから激しい音と共に、一直線に使徒へ閃光が走った。

そして使徒は十字架の炎を上げ炎上した。

「勝ったのかな」

不安に思っているところ発令所からミサトさんが言った。

「作戦終了、初号機、零号機はB-13ゲートから戻って、あとシンジ君には話があります。わかるわね」

まあ作戦無視したからしょうがないか…

想像の通り、ミサトさんに小一時間みっちり絞られた。

はつきりってそんなことはどうでもいい。

俺が諦めそうになった時に出てきたのは、本当に渾力ヲルなのか。

というか、この世界に来てと言っていたということは、やはりこの世界に来た理由を渚カヲルは知っているのか。

てか今の段階でカヲルは生まれてるのか。たしか序だと月っぽい所で生まれてたような気がしたけど。

まあ考えてもわかんないし、ゼーレのことは加持さんに聞くことにしよう。

船で会えるのかな。

とするとアスカとも会うのか、いろいろ考えないとね

更衣室で着替えて帰ろうとしたとき開けた外に綾波が待っていてくれた。

怒られてる時間とシャワー浴びて着替える時間を合わせると約二時間待っててくれたことになる。

「ごめん、待たせたね」

「いいえ、本読んでいたからかまわないわ。それよりお腹の方は大丈夫？」

言われるまで気がつかなかったが、使徒に何発かえぐられている。

Tシャツをめくってみると少し赤く腫れていて、触ると多少痛かった。

「触ると痛いけど大丈夫しょ」

と笑いながら言った。

「大丈夫ではないわ」

ピシッと言い、綾波は鞆から薬取り出して俺に塗り始めた。

「これで大丈夫、また痛くなったら言って」

塗り終わってからそう言った。

「ありがとう、てか薬普段から持ってたっけ？」

「さっき赤木博士に貰ってきたの、多分碇君が怪我してると思って」

俺は感動した。たいして痛くないし、薬がしみてる方がいたいけど感動した。

「ありがとう、綾波。おかげで助かったよ」

「いいのよ」

ちょっと照れてる感じが伝わってきた。

話ながら帰っている途中、俺は気になっていたことを聞いてみた。

「綾波、エヴァに乗る前に俺に何て言った？」

ゆっくり俺の方を向き言った。

「ありがとって言ったわ、もしどちらかがもう会えない状態になったら後悔すると思って」

「そうだよ、死んだら代わりはいないんだよ。だから精一杯今を生きよう」

「ええ」

「だから死ぬような無理はしないこと、約束ね」

「わかった、約束する」

この綾波は違う、この世界ならみんな幸せに生きられるかもしれない。

第27話 加持リヨウジ 序（前書き）

すいません、新生活でなかなか更新できませんでした。

私事ですがなんとか大学生になることができました。今は東京学芸大学というところに通っています。

これからも応援お願いします。

第27話 加持リョウジ 序

「はじめまして、加持さん」

船上の一室で待望の初対面を果たした。

ここまでくるのは長かった。

ラミエル来襲から少しして学校で個人面談があった。原作であったやつね。

そこでミサトさんはやっぱり目立つちゃって大変だった。

まあその後、ケンスケとトウジが家に来るようになり、今日ミサトさんの提案で二人もオーバーザレインボーに乗ってるわけだ。

確かこの時ミサトさんは適格者の子供が2-Aに集められていることを知らないわけだから、純粋な提案だったんだと思う。

まあ俺はもちろん反対したよ。

だって使徒来るって知ってるのに二人を危険にさらすのは反対だしね。

しかし

「何言ってるのシンちゃん、別に遊びも兼ねてだからいいじゃない」

という言葉に負けてしまった。

とりあえず、司令に自分のプラグスーツを持っていった方がいいかと思いたら

「好きにしる」

という言葉を一言、インターフォン越しに言われた。

多分俺が行くのは、作中で予備を行かした的な言葉から予定の内かと思うがプラグスーツまでは考えてなかったのではないかと思う。

てなわけでミサトさんを合わせた四人でへりに乗ったわけだね。

あとその前にJAも出てきた。

旧東京へ向かうへりのなかで

「……………何でシンジ君がいるの？」

とミサトさんが言った。

「私が許可したわ。別に構わないでしょ、本部にはレイもいるし」

リツコさんがパソコンをいじりながら答える。

どうやら旧東京の変わり果てた姿は興味が無いようだ。

「それもそうね、何事も経験だし」

そんな軽い感じで「A完成披露記念会に参加した。

少し早めだったのだろうか、まだあまり会場には人がいない。

案内された席にはビールが数本あるだけのテーブル。となりには豪華な料理がおいである。

俺はテーブルの中央にあるNERVと書いてあるプレートを隣のプレートと代えて料理にパクついた。

「シンジ君何してるの」

ミサトさんが慌てて言う。

「これはネルフへの嫌がらせね、そのくらいのことやったって構わないわ」

リツコさんが冷静に言った。

「まあそうね、となりは戦自みたいだし。そうと決まれば私も食べるわよん」

すばやい変わり身で料理を食べ始めた。

少しして戦自の招待客が騒いでたのは気にしない（笑）

「J Aは外部からのエネルギーの供給無しに最大120日の活動が可能です。」

「エネルギー源に核を使用しているようですが、それで戦闘をするのは危険ではないですか」

リッコさんが鋭く突っ込む。

「五分かそこらしか動かない決戦兵器よりはマシだと思いますけどね」

がっちりとスーツを着た日重の時田博士がネチネチと言った。

「放射能汚染を起こす危険性についてはどのようにお考えですか」

「危険、危険と言いますがスグに暴走する某決戦兵器よりは安全ではないですかね。しかもネルフは子供をパイロットに使っているという話ですが、それこそ人道的に問題有りですよ。J Aは外部からの操縦でパイロットを乗せる必要がないのでまさに理想的な兵器ではないですかね、どうですかみなさん」

拍手が至るところで起こり、ネルフへの非難の声もかなり出ている。形勢が不利になってリッコさんは着席した。

「ちょっといいですか」

マイクを取り発言する俺。

リッコさんとミサトさんがこっちをみた。

「えつと君は誰かな」

時田博士が不思議そうに見てきた。

「人道的に問題有りの某決戦兵器のパイロットの碇シンジ三尉です。質問してもいいですか」

「君があのだサードチルドレンか。何でも聞いて下さい」

機密情報が駄々漏れねとミサトさんが呟いた。

「J Aを作った目的は何なのですか」

「もちろん人類の敵、使徒を倒すことです」

また場内で割れんばかりの拍手が起こった。

こいつらみんなさくらかよ。

「それはネルフと同じ目的ですよ、協力して使徒に向かう気はないんですか」

「日重はネルフと協力するつもりはありません。J A単独で使徒を倒すことが可能であるからです」

「僕は友人や大切な人たちを守るためにエヴァに乗っています。時田博士は何のためにJ Aを作ったんですか。見栄や名声のためですか。ちがいますよね。J Aとエヴァは協力すれば俊敏性や稼働時間

などの互いの問題点を補い人類を守ることができるのではないでしようか」

正論を時田博士に直にぶつけてみた。

博士は少しの間考えた様子を見せてから

「私は科学者です。人類のためにいろいろ研究をしてきました。その大事なことを敵視していたしかも少年に教えてもらうなんて」

少々まがあって

博士は少しの間考えた様子を見せてから

「私は科学者です。人類のためにいろいろ研究をしてきました。その大事なことを敵視していたしかも少年に教えてもらうなんて」

少々まがあって

「できるだけ協力はしましょう。我々の敵は人間じゃない使徒です」

またまた割れんばかりの拍手が起こり、続いての起動実験に移った。

見学スペースへの移動の最中にリツコさんが話しかけてきた。

「シンジ君、あなたなかなかやるわね」

「時田博士が協力すると言った以上、J A への工作はやらなくていいんじゃないですか」

そう言ったら驚いたようにこっちをみて

「あなたどこから」

ホントのことをいうわけにはいかないので嘘をつく。

「予想ですよ。日重とネルフは仲が悪くて、しかもネルフの地位を脅かすかもしれない物を発表するならやっぱり邪魔しますよね」

リツコさんはいつもの笑ったような表情になり言った。

「あなたは本当に興味深い研究対象になりそうね。あなたの予想は当たりよ。あと残念ながら止めることはできないわ。少し時間が足りなかったようね」

結局JAが暴走し、何も知らないミサトさんが中に入り止めようとしたがとまらずに、仕組まれていたように爆発一歩前で停止した。

JAに踏み潰された展示室のなかで

「時田博士、もうこれで終わりですか」

「いやっ、私は科学者だ。今度は暴走せず、ネルフというか君に協力して使徒と戦える物を作るよ」

「ではまた会おう、碇シンジ君」

そう言って立ち去る姿は使命に燃えた男の顔だった。

第28話 加持リヨウジ 破（前書き）

短いですが早めに更新します。
これからも応援お願いします

第28話 加持リョウジ 破

「オーバーザレインボーだ」

ケンスケが大声をだす。

セカンドチルドレンのアス力を迎えにいくために現在ヘリに乗っている。

乗っているのはミサトさん、トウジ & ケンスケと俺の4人。

俺だけプラグスーツを持っているので少し荷物がでかい。

今俺は非常に残念でならない

俺はケンスケのことを原作でも実際に会ってみても、中2ながら他人に気を使ったり、大人びた考えが出来ることにとっても尊敬していた。

まあ船をみて興奮していたのは趣味だからということ目で目をつぶりましょう。

ちなみに綾波は本部でお留守番です。

この帽子この日のために新調したんですミサトさんと言っているトウジはほっときます。

そんなこんなでオーバーザレインボーのデッキに降りると栗色の髪をした黄色いワンピースを着た美少女が立っていた。

「ハローミサト、元気してた」

「ええ、あなたも元気みたいね。あれからずいぶん大きくなって」

「まあいろんなところもね」

その瞬間風が吹き裾がゆれる

バシッ、バシッ、スカッ

ある程度予測できた俺は何とか避けた。

こっちだって訓練やってるんだ。

「避けるなんて失礼ね、見物料よ」

ガッッ

見事な回し蹴りが俺の腹に決まった。

かえって高い見物料になってしまったみたいだ。

トウジ&ケンスケがこの見事な回し蹴りをみてビビってしまっている。

ここで呆然としていたミサトさんが口を開いた。

「彼女がエヴァンゲリオン式号機のパイロット、惣流アスカラング
レー1尉よ。こう見えても大学も卒業していてドイツと日本のハー
フでちなみに国籍はアメリカ」

「こう見えてもってなによ。紹介のときは超天才美少女ってつけな
さいよ、ところでサードはどいつ」

ミサトさんがちらっとみて

「一番いたがっている子」

アスカはいまだに痛がっている俺を見下ろして言った。

「いいあんた。あんたがエヴァに乗れたのは親の七光りよ、わかる
七光り。私は実力よ実力」

「ああ」

やっと痛みが和らいできた。

ヤロウマジで蹴ったな畜生。

「私は小さい時から訓練してるの、私がエースよ。あんたがこの前
倒したのだって偶然に決まってるわ。これからの使徒戦は私の指示
に従うのよ、いい」

初っぱなからしかもうずくまっている相手に向かってこれかよ…

まあ、関係を悪くすると今後不味いから今日はしかたないか

「ああわかった。よろしく惣流さん」

ニタツとわらいながら

「分かればいいのよわかればね」

ミサトさんの方を向いて

「もう一人は来てないの」

「ああ、レイね。本部を開けとくわけにはいかないから今日はお留守番よ」

「それもそうね」

「今から艦長に会いに行くわ。鈴原君と会田君は着いてきて、シンちゃんはまだ無理そうだから待っててねん。アスカはどうする」

「私はパス、部屋にもどるわ」

「オツケー、じゃあ鈴原君と会田君行くわよ。操縦室が見れるチャンスかもね」

ケンスケが最後の言葉に反応して奇声をあげ喜んでいる。

それをみてミサトさんが引いていたが、三人は船の中へと進んで行った。

「じゃあ私戻るから、あんたはその辺で待ってなさい。それと私がエースってことを忘れるんじゃないわよ」

そう言って帰ろうとしたところを引き留めて

「ちょっと待って、加持さんの部屋ってどこかわかるかな」

「そこ入って階段上がった一番奥の部屋だけど、あんた加持さんの知り合いなの」

「まあちよつとね、ありがとう」

「まあいいわ、そうだとでまた話があるから用事終わったら来なさいよ」

そう言い残しアスカは船の中へと消えて行っただ。

立ち上がり中へと入り階段をあがら思っていた以上に広くガランとしていた。

アスカに教えてもらった通りに進み一番奥の扉にたどり着いた。

やっと加持さんに会えるそんな気持ちになりノックをしようとした瞬間中から声がした。

「空いてるよ、入っておいで」

まさかの展開に一瞬焦ったが一回深く深呼吸をしてから中に入った。

「はじめまして、加持さん」

それが俺が初めてすごく会いたかった加持さんに喋ったことだった。

「はじめまして、誰かと思ったら今話題の碇シンジ君じゃないか」

加持さんは笑みを浮かべながら言った。

「もう調査済みというわけですか」

「いやいや、初搭乗でエヴァを起動。そして使徒を2体殲滅、これで話題ならない方がおかしいさ」

ふいに立ち上がるとカップを2つもち1つを俺の前に置いた。

「加持さんこそ、アルバイトの3つ掛け持ちなんて大変じゃないですか」

涼しい顔をした加持さんの顔が一瞬曇った。

「内調の方はバレてると思っていたが3つ目までバレてるわけね…。碇司令から聞いたのかい」

「俺のことを調べてたならそれは無いとわかんと思います。ちなみに今日のある生物の運搬の仕事も知ってますよ」

一瞬目をつぶり加持さんはこう言った。

その表情はむしろ好奇心に満ちていたと言う感じだった。

「ここまで知られてるとはね。この事を俺に言っただってことは何か俺にやって欲しいことがあるのかな」

さすがは加持さん、俺が今後いろいろと協力して欲しいと思いついたことを早々と見破った。

今まで接してきた人とは一癖も二癖も違う。

「大事な話があります。ここは耳の心配はないですか」

そう言うのと流しに置いてあるカップを指差した。

「10個も付いてたよ。全部水に浸けたから大丈夫だよ。良ければもっと安全な部屋があるけど、シンジ君どうする」

「ここで話します。お願いしたいことがあります」

「なんだい、言うてごらん。出来ることだったら協力しよう」

俺も緊張しているので加持さんが煎れてくれたコーヒーを一口飲んでから言った。

「1つ目にゼーレから手を引いて貰えませんか」

第29話 加持リヨウジ Q(前書き)

次はもっと早く書きます。

第29話 加持リョウジ Q

「まさかとは思ったけど、ゼーレまで知ってるとは参ったな」

やはりその表情は笑みを浮かべていた。

「俺が死ぬからかい、手を引けっというのは」

「それが一番の理由です。多分、加持さんの知りたい真実にある程度近づいたら消されると思います」

「それは俺も同意見だね、消されることを望んではいないからね」

「それに加持さんが死んでしまったらミサトさんが悲しみます」

「クツクツく、俺と葛城のことも知ってるのか。君は何者なんだい」

「

「その答えを言う前にこれを見てくれませんか」

俺は一枚のディスクを渡した。

「ここに加持さんが知りたいと思っているだろうことを俺の知ってる範囲で書きました。セカンドインパクトの本当の理由なんかです」

「

しばらくの間加持さんはパソコンの画面を見続けた。

ディスクの内容は、セカンドインパクトの原因はアダムを還元した

時に放出されたエネルギーが原因であることやターミナルドグマに
いるのはリリースであること、マドウルック機関は全てダミーで2年
A組に適格者が集められていることなどである。

そして加持さんは口を開いた。

「これが真実だとしたら、ほとんどが俺が知りたかったことだ」

「真実だと思ってますよ、これの裏付けの調査をするならば1から
調べるよりも危険は減ると思います」

「確かにシンジ君の言った通りだ。だがこんなことを調べられる君
はいたい……」

「碓ゲンドウの息子、碓シンジっていうのは間違いないですよ」

「俺が調べた限りじゃあそうだったね」

「じゃあ加持さんはいったい誰だと思えますか」

「一番可能性があるのはゼーレから送られてきたというものの、しか
しそれなら俺に色々と教えてくれた説明ができない」

さらに続ける。

「そうでないならば全てを起こした犯人だが、そもそもセカンドイ
ンパクトの時にシンジ君は生まれてすらいない」

「お手上げだが強いていえば、何らかの方法で未来を知ったか・見
た人物。それが俺の結論かな。」

一回会っただけでここまで見破る洞察力、さすがすごく空いたと願った加持リョウジ。

まあ事前に調べたこともあると思うけどね。

「ほとんどその通りです。けど信じられますか？」

「まあ完全に信じたといえば嘘になる。しかしこの世界にいと信じがたいことがたくさんあるし、今日運んでいるものだって信じがたい物だろ」

「確かに…、とりあえず詳しいことは今度話します。俺が見てきたなかで加持さんは信頼できると思いましたし、その加持さんがここざし半ばで諦めたように死んでしまったのも見ました。それを俺は止めたいんです。」

笑顔になり言う。

「シンジ君が見てきた俺は君にそんなに心配をかけてきたのか、悪かったなシンジ君」

「いえ、ここで加持さんが死なないでミサトさんを幸せにしてくれればノープロブレムですよ」

「クツクツく、そっちは葛城の意志もあるからなあ、心配させてしまったことだし、大人して死なないとは約束しよう」

「ありがとうございます。大人はズルイぐらいがちょうどいい、加持さんが俺に言った言葉です。嘘でないことをねがいますよ」

「確かに俺に会ってるな」

面白いので続けてみる。

「8年前の言葉をいつか言ってあげて下さい」

「これは参った、全てを信じるしかないようだね。そういうシンジ君も綾波レイちゃんとはなががいいようだね」

ニヤつきながら言った。

「まあそこそこには、それより本題です」

真剣な面持ちで言った。

「俺に格闘訓練をしてくれませんか。襲われる可能性があって何もしないわけにはいかないのです」

白兵技術を身につけることにより誰かに襲われても、最低限身を守ればミサトさんや他の人に迷惑をかけなくてすむ。

何よりこのシンジの貧弱な身体では色々とエヴァに乗るのだって大変だと思い加持さんに頼んでみた。

「それは構わないんだが、俺が調べたところだと訓練に含まれてなかったかな」

確かに格闘訓練はスケジュールに含まれていた。

「加持さんの能力が高いことを知ってるからこそ、ぜひ訓練とは別
にお願いします」

「そういうことなら構わないよ、どうせそれを渡したらしばらくヒ
マになるからね」

「ではそういう感じで、また俺の知ってることは全てお話します。
そういう話を出来る部屋の準備はお願いします」

「ああ、本部についたらすぐに手配しよう」

「お願いします。俺はミサトさんのとこ行きますけど、加持さんど
うします？」

「俺も一緒に行くよ、シンジ君一人じゃ分からないだろ、案内しよ
う」

そう言っただけ二人はミサトさんたちがいる操縦室へと向かって
いった。

オーバーザレインボー 操縦室

「いいから緊急時の主導権はネルフにあります」

「いや我々はあのオモチャを運ぶ命令を受けただけだ、よって横須
賀に着くまでの主導権は私達にある」

「使徒には通常兵器は効かないの、エヴァだけが倒すことができま

す
」

「そもそも子供を何人も連れてきて、ボーイスカウトのお姉さんか
と思ったよ
」

「何ですって
」

『シンジ!』

操縦室のドアを開けたら隅っこにいたトウジとケンスケが俺を見て
叫ぶ。

「シンジ君来たのね。げえ、何でアンタがいるの？」
」

俺の後ろ、つまり加持さんを見て言った。

「久々に会ったのにつれないなあ。アスカの同伴でしばらくは本部
さ、ヨロシク頼むよ
」

愕然としているミサトさんの代わりに艦長が言う。

「加持君、君をここに招待した覚えはないんだがね
」

「俺はただの道案内でしてね、葛城そろそろ行こう
」

その言葉をきっかけに俺たちは艦長室の外に出た。外にはアスカも
いた。

「ちょっと加持、まだ言いたいことがあったのに
」

ミサトさんがきつい口調で咎めた。

「まああれぐらいでやめないとな」

「それはそうと、何でシンジ君とアンタが一緒にいるのよ」

「男どうしの固い友情で結ばれてるのさ」

こっちを向きウィンクをしながら言った。

ミサトさんは府に落ちない顔をしている。

まあもつともな話しだけどね。

「まあここではあれだからカフェエリアにでも行こうか」

俺も行こうとしたら、いきなり服の襟首を捕まれた。

「アンタはこっちに来なさい」

その瞬間、俺はアス力に拉致されてしまった。

第30話 式号機（前書き）

久々の更新です
すいません

第30話 式号機

「これが制式タイプの初めての機体、エヴァンゲリオン式号機よ」

「赤いんだ」

原作と同じことを言ってしまったマヌケな俺。

「違うのはカラーリングだけじゃないのよ、零号機・初号機はテストタイプとプロトタイプ。私のは実戦を重視した制式タイプなのよ」

二回も制式タイプをアピらなくても分かるって。

しかも制式タイプって量産を意識して作られてるってことはわかってるのかな。

…この自信に満ちた顔は多分わかってないだろうな。

そんな話を延々と聞かされていると

ガッターン

船が大きく揺れた。

「まさか、使徒!!」

アスカが叫んだ。

やっぱり来ちゃったか。

これもまた原作通りか…

俺たちは甲板に移動した。

「あれが使徒なの」

視線の先には白い巨大な魚みたいなものが戦艦と交戦していた。

「多分ね」

そう聞いたアスカの目が光る。

「チャンス！」

きたか名ゼリフ

「サード、今から式号機に乗って戦うわよ。あんたも乗せて上げるから準備しなさい。スーツは私の予備を特別に貸してあげるわ」

あんまり乗せて貰いたいわけじゃないんだけどな…

「スーツはもってきてるんだ」

「何でもってきててるのよ。まあいいわ、いいから早く着替えなさい。覗かないでよ」

そんなこんなでプラグスーツに着替えた俺たちは、手でエントリ
ープラグを開き中に入った。

二人入るとなかなかせまい。

「いいわねサード、起動するわよ」

「俺、ドイツ語出来ないからね」

グーテンモルゲンしか言えない俺は、先に言っておいた。

「言われなくてもわかってるわよ。日本語をベーシックに」

怒ったように言った。

これは完全にやろうとしてたね。

低い音をたてながら式号機が起動した。

機体を覆う布はまるでマントのようだった。

オーバーザレインボー 艦長室

「エヴァンゲリオン式号機起動しました」

「まだ引き渡しの前だ、直ちに戻れ」

艦長がマイクに向かって叫んだ。その横からマイクを奪い取りミサトさんが叫ぶ。

「ナイス！アスカ。そのまま出撃よ」

「何をふざけたことを言っている」

「あんた見て分らないの、艦隊のほとんどが壊滅。通常攻撃おまけにN2も効かないのよ。効くのはエヴァだけよ」

まだバトルが続いている。

結局艦長の

「好きにしろ」

という言葉で決着がついたようだ。

「行っているんですよ」

一応俺は確認してみた。

「あらシンジ君もそこにいたの」

「まあ成り行きで…」

「アスカ出撃よ。非常用電源はこの船にあるわ」

「船を足場にするときは慎重にね。乗ってる人いるから」

本編でみたひっくり返るのではないかというぐらい揺れた船を思い出した。

本編には出てこなかったが何人も落ちたんじゃないかと俺は思う。

「わかってるわよ」

俺に怒鳴った。

才能があるのか、それとも原作ではワザとやってたのかはわからないが、エヴァは静かに移動した。

「さあ、かかってきなさい。三枚に卸してあげるわ」

後は全く原作と一緒だった。

水中に引き込まれた式号機は使徒の口をこじ開け、そこに無人艦隊二隻による零距离射撃・自爆による殲滅が完了した。

ちなみに加持さんはとくに本部に向かって飛び立った後だった。

「アスカでいいわ」

水中から引き上げられるエヴァの中でアスカがそう言った。

「問題はない」

原作通りで別に面白くなかったので、ゲンドウのモノマネで答えてみた（笑）

言ってから気づいたけど、まだアスカ面識無いからこの渾身のモノマネわからないんだよね…

慌てて続けて言った。

「シンジでいいよ。流石はエースパイロット。B型装備で水中で上手くエヴァを使えるなんてね」

この後いろいろ言われたのはまたべつの話し

「碇は大変やなあ、あんなけつたいな女と同僚なんてホンマ同情するわ」

使徒戦後トウジが俺に声をかけてきた。

この後クラスメートになるのは黙ってたほうが楽しそうなので秘密にしておいた。

第三新東京市

ネルフ本部司令室

「いやいや、全く参りましたよ。使徒に襲われるとはね」

「ごくろうだったね、加持君」

上辺だけのねぎらいをする冬月

「いえいえ、コレが例の品です」

ゲンドウの方を向き直して

「硬化ベークライトで固めてありますが間違いなく生きています」

「これが第一使徒アダムだ。人類補完計画の鍵となる」

ゲンドウは重い口を開いた。

しかし口の前に手を組んだ姿勢は崩さずに。

司令室内に重い空気が漂う。

口を開いたのは冬月だった。

「長旅ごくろうだったね、また呼ぶまではゆつくりと過ごすといい

」 暗に帰れという意志を伝えている。

「ではお言葉に甘え、しばらくはゆつくりさせて貰います。」

加持は音もなく歩き司令室を後にした。

広い室内には加持が出て行った自動ドアの音が響いたがすぐに元の静寂に戻った。

また静寂を破ったのは冬月だった。

「碇、彼を自由にさせてもかまわないのか」

「問題はない。利用価値がある間は使う、我々のシナリオには影響はない」

ゲンドウはその後口を開かなかった。

第3新東京市

第1中学校2A教室

「惣流・アスカ・ラングレーです。よろしく」黒板には筆記体で名前が書かれている。

あれじゃあ誰も読めないっしょ…

日本に来たんだから日本語で書けよっと思う保守的な俺だった。

「あつ、お前は船んときの暴力女やないか」

今になってやっと気づいたトウジが叫んだ。

ちなみにケンスケはビデオとカメラで販売用の撮影を早くも開始している。

心の中で

売れるぞ売れるぞ売れるぞこれは売れるぞ
と思っっているのはまだ秘密にしておく（笑）

「あんたはあの関西弁。なんでここにインのよ！」

トウジを指差しながら言った。

確か学校ではおしとやかな感じで過ごすのではなかったっけ。

あんたとか指差した時点でもう地がでてしまつてヤバいんじゃないかな
いかな。

まあ洞木さんと仲良くなつてくれればよいかな。

これは余談なんだけど、プレステのエヴァ2で隠しパスを打ち込む
と「補完される心」っていう隠しシナリオがでるんだ。

そののヒカリのシナリオをやるとなんか洞木さんイジメられている
っぽいんだよね。

真面目で融通が効かないと思われてるみたいだね。

実際にはみんなのことを思っている超いい人なのにね。

「シンジ、あんたもこのクラスなのね」

物思いにふけっていた俺に、突然指差し言ってきた。

クラスが静まる

いきなり名前で呼ぶんだもんな…

ちょっとは日本を学んでからきてほしいよ…

「ちょっと、無視するんじゃないわよ」

こうして俺らにはつかの間の平和？の時間を楽しんでいた。

31話 異なる世界

今日も学校が終わり家に帰ってきた。

となりに引越してきた綾波はご飯は俺の家で食べる。

だから綾波の家には寝に帰っているみたいになっている。

普段綾波は学校からかえると荷物を置いて着替えてから俺の家にきている。

だから玄関先で別れた俺は先に家に入った。

…荷物如山

ダンボールの山如山

そうか今日だったのか…

テーブルの上にはぽつんと置かれた少ない俺の私物

ちょっとマンガもある

もう皆さんはお分かりだろうか

皆さんって（笑）

ついに来たXデイ

少しばかり幸せな日が続いたいたので完全に忘れていた。

あれっ…

ちよつとまてよ

アスカが引っ越してくるのって使徒戦に負けてユニゾンをやるから引っ越してきたんじゃないかなかったっけ

てか今日使徒くんのか？

何でこんなに早くにいるんだ？

俺の部屋だった所から現れた茶髪の少女は俺の姿を見てこういった

「エースパイロットとして今日から私がここに住むことになったわ。あんたはお払い箱よ」

強引だな…

よく見るとテーブルの上の私物にあるガンダムのフィギュアの腕が壊れていた、少し高かったやつなのにゴミみたいに扱っている…

何でフィギュアの素晴らしさがわかんないんだ！

てなことを考えてたいたら後ろで音がした。

綾波だ

「碇君がお払い箱、というかあなたは誰。ここは碇君の家よ」

綾波が怪訝そうな顔で聞いた。

感情表現が出来るようになって喜んでいるのは現在俺一人だろう。

話がややこしくなりそうなので俺が説明しようと割り込む。

「えっとね」

「エヴァンゲリオン式号機パイロットの惣流アスカ・ラングレーよ。あんたのことは聞いてるわ、ファーストチルドレンで碇司令のお気に入りでしょ」

こいつ初対面なのに何てこと言ってたんだ。

てか何、人を怒らせるのを目的にしてんのか。

「いいえ、違うわ」

冷静に返す綾波。

アスカの目がつり上がる。

自分の言ったことが否定されて不機嫌になった顔だ。

居るんだよねこういうやつが、まあ中学生だしっていうのもあるけど大学まで卒業してるはずなのにね…

「何よファースト、あんたは実力でエヴァのパイロットに成ったっていうわけ」

醜い戦いが展開されている。

というか一方的にアスカが喚き散らしているだけの様な気がするが…

とりあえず止めさせる。

「分かった、出てくからもう言い合いを止めて」

泣きそうな俺に救いを与えるかのように携帯の非常招集を示すアラームが鳴り響いた。

ネルフ本部
制御室

金髪の女性、赤木リツコはモニターを眺めていた。

手は休むこと無くキーボード上を踊っている。

「どうやら初号機はほぼ修復完了ね、零号機は無傷だったし…
本当にシンジ君はすごいわね」

資料に目を通してながらコーヒーをすする。

その時不意に後ろから体を抱き締められた。

最初は驚いたかに見えたリツコだったがすぐに資料を読み続け始めた。

リツコの耳に近づきその人物はそつと囁いた。

「少し痩せたかな」

青いシャツに緩く締められた赤いネクタイと後ろで縛られた長髪。

特殊監査部、加持リョウジ一尉である。

「そう？」

資料に目を通してながらも久しぶりに友人にあったからだろうか、少し楽しそうな様子である。

「哀しい恋をしてるからさ。涙の通り道にほくろがある女性は一生泣き続ける運命にあるからさ」

ふふふとリツコは笑った。

「口説くつもり？」

資料を置き続けて言う。

「止めといった方がいいわよ。そこで怖いオネイサンが見てるわ」

加持が顔を上げるとガラス越しに鬼の形相をしたミサトが立っていた。

「かゝじゝ、あんたは手当たり次第に誰でもいいわけ」

「俺たちはもう何でもないんだろう、それともまだ期待してもいいのかな」

「ウルサイ」

ミサトは持っていたファイルの角を加持に向かって思いっきり振り下ろした。

「おいおい、そんなのあたったら本当に怪我するぞ」

「あんたは怪我すればいいのよ」

再び振り下ろされたファイル、避ける加持、その先にはモニター画面が

ガッシャーン

「あっ」

加持とミサトの声がシンクロした。

リツコはコーヒーをすすり口を開く。

「いったい誰が弁償してくれるのかしら」

加持とミサトは一瞬顔を見合わせた。

ヴィーン・ヴィーン

沈黙を破るように突然けたたましい音が室内に鳴り響いた。

「まさか使徒！」

これは好機とばかりに発令所へと室内からミサトが飛び出す。

突如の行動にあっけにとられつつも加持にこう言い放った。

「加持君は払ってくれるわよね」

有無を言わさぬ迫力があるが、さすがは修羅場をいくつも通り抜けている加持はなんとかこう言い返した。

「俺は関係ないんじゃないかな」

「同罪よ」

抵抗むなしくその言葉は2秒で切り返されてしまった。

「それよりも発令所に行ったほうがいいんじゃないかな」

「そうね、でも後で弁償してもらいますからね」

こうして加持はつかの間の執行猶予を獲得したのであった。

「ふふ、変わらないな二人とも」

第32話 3機での出撃（前書き）

更新遅れてすいませんでしたm(_____)m

安否を心配してくれたかたもいらっしまったので一応無事だということ報告しておきます

もしかしたら被災されたかたにもこの小説を読んでくれたかたがいらっしゃるかもしれないので出来るだけ早く更新していきたいと思います

私事ですが競馬にはまってしまいウマニティというサイトで古手夜一として予想しています。やっているかたがいたらウマフレンドになりましょう

第32話 3機での出撃

第3新東京市

葛城家

「ミサト、使徒なの？」

警報が鳴った携帯でアスカがミサトに電話した。

「ええ、間違いなく使徒よ。迎えを送ったから直ぐに本部に来て頂戴」

まもなくすると迎えが来て俺たちはネルフへと運ばれた。

移動中の車内の綾波とアスカの雰囲気は最低最悪だったのはふれな
いでおく。

本部に着いた俺たち3人はプラグスーツに着替えてブリーフィング
ルームに集合しミサトの作戦を聞いた。

「目標は海上から第三新東京市に向け進行しようとしているわ。
これに対してエヴァ初号機、零号機、弐号機の三機による作戦を展
開します。初号機の修復率が90%ということを考え初号機は援護、
弐号機を中心に零号機と共に水際で一気に叩く」

いったん三人を見回し続ける。

「OK? 作戦に意義はある？」

いつものことだけど今度の使徒はユニゾンじゃないとたおせないんだよね…

一回戦うしかないか

「シンジ君はどう」

ミサトさんが俺に聞いた。

「問題はありません」

アスカを見ると自分が中心の作戦だから上機嫌のようだ。

「じゃあ作戦を開始するわ、エントリープラグに乗り込んで頂戴」

使徒上陸予定地点

「作戦開始、シンジ君は援護射撃、アスカはソニックグレイブで攻撃、レイはアスカが攻撃するまではパレットライフルで援護それから式号機ともに攻撃して」

エヴァ三機が使徒と対面した。

「日本でのデビュー戦だっというのに何で私一人でやらしてくれないのかしら、三対一なんてしゅみじゃないわ」

聞こえよがしにつぶやくアスカ。

一応人類の生死を賭けて命懸けで戦っているのにコイツ何を言ってるんだ。

人間的に最低じゃないか。

しかし、何かで読んだのだけれどもアスカが性格をいじられた、つまりマインドコントロールを受けたという説がある。

というのは、エヴァに乗りたくない碇シンジと対極のエヴァにこだわるアスカの存在を作りだし補完計画の都合のいいようにシンジを追いつめ込むという説から着たようだ。

ぶっちゃけそんなことはどうだっていいんだ。

というか人類を救うとか大きな大義が有るわけではないし、気合いもない。

使徒に負けると人類は滅びる。

多分俺も死ぬ。

自分の世界に戻るのか？

トラックがなんかに轢かれてこの世界に入って来たみたいだけど、元の世界で死んでたら終わりかも。

やっぱそこだよな、取りあえずいいかこのまんまでね

やられたらそんなときはそんなときでね。

ベストは尽くしましょう

「ちょっと待ってアスカ、あの使徒コアが二つある。今までのやつは一個だったから特殊なやつの可能性があるよ」

俺はだいたいのことは知っている。それを活かそうと怪しまれない程度の情報を出した。

「うるさいわね、エースの私に任せなさい」

帰ってきた言葉はこれだった。

独断先行、言うが早いか弐号機は使徒が攻撃してこないのをいいことに使徒に向け走り出した。

仕方なく援護射撃する零号機と初号機

使徒に達した弐号機はここぞとばかりにソニックグレイブを振りかぶり垂直に振り下ろした。

「ナイス、アスカ！」

ミサトさんの声が通信で入る。

アスカはエヴァを反転させ得意げに槍をかざした。

「どんなもんよ」

殲滅確認してないのに適に背を向けるかな。

「動くぞ、ミサトさんN2爆弾を用意してください」

「えっ」

アスカとミサトさんのマヌケな声がシンクロした。

使徒の裂け目が揺れて二体に分裂した。

「なーんていんちきな」

俺は感動する間もなくポジトロンライフルを放つ。

「綾波は左をやつを」

かなりの弾薬使ったが傷ついたそばから回復している。

「アスカ何やってるの、下がって」

ようやく正気に戻ったアスカも応戦しているが切っても切ってもすくぐに回復してしまう。

「きりないな、ミサトさんN2を」

「わかったわ、エヴァ以外総員退避、繰り返しますエヴァ以外の総員はN2の有効圏内から退避して」

初号機に通信が入る。

「爆弾であいつを倒せんの」

「無理だと思うよ。使徒はコアを壊さなきゃ倒せないから、けど使徒の体を焼くから足止めにはなると思う」

「エヴァはフィールドを張って」

そのすぐ後に轟音と共に激しい衝撃が走った。

「また地図を書き換えねばならんな」

第33話 シンクロへ（前書き）

一週間かかってしまいました
すいません

第33話 シンクロへ

「目標は？」

「以前沈黙を守っています」

「なんとか足止めはできたみたいね。シンジ君の言ったとおりか」

「立て直しの時間を稼げただけでももうけものだ。碇がいたら何を言われるかわからん」

本部のモニターにはN2爆雷をつけて無残な姿になっている使徒が映し出されていた。

ネルフ本部

葛城作戦部長本部室

ミサトの目の前に積まれる書類の山。

「はい、これが関係省庁からの抗議文と被害報告書。で、これがUNからの請求書。広報部からの苦情もあるわよ。ちゃんと目を通してね」

「読まなくてもわかってるわよ。喧嘩するならヨソでやれってんでしょ」

「1」明察」

「言われなくても上が片付いたらここでやるわよ。使徒はわたしが倒すわ」

「碇司令はカンカンよ。こんどやったら左遷ね、間違いなく」

「エヴァに損害が全くないって言うてもUNに借りを作っちゃったからね。それが痛いわ、私の首がつながるアイディアもってきてくれたんでしょね？」

「ひとつだけね」

「さっすが赤木リツコ博士。持つべきものは心優しい旧友ね」

「残念ながら私じゃないわ、このアイディアは加持君よ」

「加持が……」

一瞬厳しい顔になったミサトだったが、そのあと優しい表情になったのをリツコは見逃さなかった。

エヴァから降りた俺達は口数も少なく、着替えて検査をに向かった。しかし検査の間もアスカの引越しのタイミングが早い事が頭に引っ掛かっている。

検査を終えた三人はミサトの待つ作戦部ブリーフィングルームに集められた。

「作戦会議をします。リツコ、使徒の状況を」

「使徒は体表面組織の約68%を先のN2爆撃により損傷、現在自己修復中です。その速度を技術部で解析したところ、修復完了まで約6日かかるという結果ができました」

ブリーフィングルームのモニターに自己修復中の使徒が写し出された。

その表面はまるでやけどの跡の感じがした。

リツコさんに続きミサトさんが言う。

「つまり、後6日以内に殲滅の準備をしなければならないわ」

一拍おき続ける。

「作戦はエヴァ2機によるコアへの同時攻撃よ」

「なにそれ、ミサト。根拠はあるの」

「ええアスカ、説明するわ。映像を出して」

モニターには使徒をソニックグレイブで真っ二つに切る式号機がアップになった。

「みての通り使徒のコアは二つあります。式号機の攻撃により一旦は殲滅したように見えたものの使徒は分裂し二体になりました。これは今までの使徒がコアが一つということから考えると二つあるこ

とが原因と考えられます。よって本作戦はコア二つに対する同時攻撃とします」

「具体的には誰がどうするのですか」

原作と大きく違うところがある。エヴァが3機あるところだ。

シンジとレイが思いの外上手く練習がいつてアスカがふて腐れる。そして慰めにいったシンジとアスカの関係がよくなるイベントなど最初から起きない可能性すらある。

そんなイベントはぶっちゃけどうでもよいのだが、俺がシンクロに参加できないと困るので一応言ってみた。

「まだどの2機を使うのかは未定です。またこの作戦はパイロット兩名の息がピツタリと合っていることが絶対条件です。このためパイロット3名は私の家に6日間の同居、訓練のちにもっとも息がピツタリの二名を作戦に使います」

「ええ」

原作では早くもシンジとアスカの不満の声がシンクロしたのだが、この世界では俺は予想していたし綾波は元からそういうキャラなので叫んだのはアスカただ一人であった。

「バカシンジと一緒にすむなんて信じられない。襲われたらどうすんのよ」

襲わなーヨと思いつつ苦笑いしながら受け流す。

「大丈夫よ、シンちゃんはね」

「なんか魔がさしてとかあるかもしれないじゃない」

アスカが俺の悪態をつき続ける。

さすがに中坊だからっていつても言い過ぎじゃないか。なかなかイラッとする。

我慢できなくなつて口を開こうとしたら綾波が割って入ってきた。

「碇君はあなたに悪口を言われるような人ではないわ」

突然の乱入に室内はシンとなつたが赤い髪の女がいち早く再起動して言い返す。

「あんた何様のわけ、ミサトの部屋でも思ってたけど」

綾波も有り難いけど何言ってるか多分分かってないよね。

とめないとまずいかな……

俺は怒っているのを抑え宥めようとする。

「まあまあ、その辺で。それよりミサトさん、三人分の部屋なんかないですけどどうするんですか」

ミサトの家はミサトの部屋とアスカに奪われた部屋に物置チックな部屋の3LDKだ。普通に考えたら俺がソファアという可能性が高い。

しかし得意げにミサトさんが言い放つ。

「大丈夫よ、帰れば分かるわ」

まるで悪戯をしたことのような顔をしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0775h/>

エヴァンゲリオン 現実からエヴァ世界へ

2011年7月16日00時12分発行